國學院大學学術情報リポジトリ

國學院大學図書館所蔵　城一本『平家物語』翻刻 巻四～六

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野中, 哲照 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000710

國學院大學図書館所蔵
城一本『平家物語』翻刻　巻四～六

野中哲照

（遊紙）

」一オ

（遊紙）

」一ウ

平家物語巻第四目録

いつくしま御幸
源氏そろへ　付いたち
のぶつらかつせん
きをう
三井寺より山門へのてうじやう
三井寺より南都へのてうじやう
南都よりおんじやう寺へのへんてう
大衆そろへ
はし合戦
みやのさいご
若宮の出家
三井寺ゑんしやう
ぬゑ

」二オ

」二ウ

平家物語巻第四

いつくしま御幸

ぢせう四年正月一日鳥羽殿には入道相国も
ゆるされず法皇もおそれさせおはしましけれは元
日元三のあひだ参入する人なしされともこせう
なごん入道しんせいの子そくさくらまちの中納言
重教おとゝ右京の大ぶなかのりこれ二人ばかりそ
ゆるされてまいられけるおなじき廿日とうぐうの
御はかまぎ幷に御まなはじめとて世にはかく目出
度事ともありしかども法皇は鳥羽殿にて御み
みのよそにそきこしめされける同き二月廿一日
しゆしやうことなる御つゝかも渡らせ給はぬを　」三オ

をしおろし奉つてとうぐうせんそありこれも入道
相国よろづをもふさまなるかいたすところなり時
よくなりぬとてひしめきあへりないしところしん
しほうけんわたし奉るかんだちめぢんにあつ
まつてあるべき事ともせんれいにまかせてをこ

なひけるに左大臣殿ぢんに出て御位ゆつりの事
仰しを聞てこゝろある人はなみたをながさすと
いう事なし御心とまうけの君にゆつり奉りはこや
の山のうちもしつかになんどおほしめさるるさき
〳〵たにもけにはあはれおほかるにいわんや是は
御心ならすをしおろされさせ給ひけんあはれさ申
も中々をろか也つたわれる御たから物どもしな　」三ウ

〳〵つかさ〳〵うけ取てしんていのくわうきよ五
条の内裏へわたし奉るかんゐん殿には火のかけか
すかにけいしんのこゑもまれなるやうにてたきぐ
ちのきんしやくもたえにけれは上下かゝる目出度中
にもいまさらあはれにおぼへて袖をぬらさぬはな
かりけりしんてい今年三さいいつしか成御じや
ういかなとぞ人々ささやきあはれける平大納言時
忠のきやうはうちの御めのとそつのすけのをつと
たるに依て今度の御じやういつしかなりとた
れかかたふけ申へきいこくにはしうのせいわう

三さいしんのほくてい二さい我朝にはこんゑの
院三さい六条の院二さい是みなきやうほうの中に」四オ

つつまれていたいをたゝしくせさりしかともある
ひはせいしやうおふて位につけあるひはぼこう
いだいて朝にのそむとみえたりごかんのくわう
せうくわうていはむまれて百日というにせんそ
あり天子くらいをふむせんぜうわかんかくのこと
しと申されけれはゆうしよくの人々是を聞て
あなおそろし物な申されそされはそれはよきれい
かはとそつふやきあはれけるとうぐうせんそあり
しかば入道相国ふうふともにぐわいそ父くわいそ
母とてじゆん三こうのせんじをかうむり年くはん
年しやくを給て上日の者をめしつかはるゑかき
花付たるさふらひとも出入てひとへにゐんぐう」四ウ

のごとくにそありける出家の後もゑいくわはなを
つきせずとそみえし出家の人のじゆん三こうの
せんじをかうむる事はほうけうゐんの大入道殿
かねいゑこうの御れいなりおなじき三月じやう
じゆんにしんゐんあきのいつくしまへ御幸なる
へしとぞ聞えけるていわう御位をさらせ給てしよ
しやの御参けいのはじめには八幡賀茂春日なん
とへこそ御かうならせ給ふにはる〳〵とあきの
いつくしままての御かうはいかにと申にしら
かわのゐんは熊野へ御かう後しらかはのゐんは日
吉の社へ御かうなるすでにしりぬゑいりよに有と
いふ事を御心中にふかき御ぐわんあり又」五オ

御むさうのつげありとそうけたまはるそのうへあ
きのいつくしまをは一かう平家のあがめ申され
けれは上には平家に御どうしんしたには法皇のい
つとなく鳥羽殿にをしこめられて渡らせ給へは
入道相国の心もやわらき給ふかとの御きせいのた
めとそおほえたる山門の大衆ほうきして主上くら
いをすへつて諸社の御幸のはじめには八幡かもか

すかへ御かうならすは我山のさんわうへこそ御かうは成べけれあきの国までの御かうはいつのならひそやそのぎならはしんよをふりくだし奉つて御かうをとゝめ奉らんとこ申けるこれによつてしばらく御ゑんいんありけり入道相国やう〳〵に」五ウ

なため給へは山門しづまりぬ三月十七日いつく島御幸の御門出とて入道相国の北のかた二位殿の宿所八条大宮へ御かうなるその日いつく島の御神事はじめられて御供の人々をもさだめられけり其日のくれかたてんがよりからの御くるまうつしの馬なとまいらせらるあくる十八日に入道相国のていへ入らせおはしますしやうくわうさきの右大将むね盛のきやうをめして明日御かうの次でに鳥羽殿へ参らばやとおほしめすは相国ぜん門にふれすしてはあしかりなんとや仰けれはむねもりのきやうあはれにかたしけなくおほへていかてさやうの御事候べきとぞ申されけるさらはなん」六オ

ぢとば殿へ此由を申せかしと仰けれはむねもりのきやう此やうをそうせられけり法皇あまりに夜るひるおほしめす御事なれはこはゆめやらんとそおほせける同き十九日大みやの大納言たかすゑのきやう夜ふかふ参つて御幸をこそもよほされけれやよひもなかは過ぬれとかすみにくもる有明の月のひかりはなををほろなりこしちをさして帰るかりの雲にたえ〳〵おとつれ行も折節あわれにきこしめす夜のほの〳〵とあけかたに鳥羽殿へ御かう承りもん前にて御くるまよりおりさせ給ひて門のうちへさしまいらせ給ふに人まれにしてこぐらく物さひしけなる御有さまを御らん」六ウ

して御なみたせきあへさせ給はすはるもすでにくれなんとすなつこだちにそなりにけるこずゑの花色おとろへてみやのうぐひすこゑ老たりきよ年の正月六日てうきんの御ためにほうぢう寺殿へ行幸なりたりしにはしよゑぢんをひき

がくやにらんじやうをそうしよきやうれつ
に立てまんもんをひらきゐんじのくぎやうさん
かうしてかもんれうゑんだうおしきたゞしかり
しぎしきけふは一事もなしたゝゆめとのみそ
おほしめされけるさくらまちの中納言重教のきや
う参て御きそく申されければしやうくわう入
せ給ふ法皇はしんでんのはしがくしの間にて待」七オ

まいらつさせ給ひけりしやうくわうは今年廿に
ならせおはしますあけかたの月のひかりには
へさせ給ひてぎよくたいもいとゝうつくしく御ぼ
ぎけんしゆん門院によくにまいらつさせ給ひしか
は法皇まつこ女院の御事をおほしめしいたいて
御なみだにむせばせ給ふ両ゐん御ざちかふしつ
らわれたりやゝひさしう御物語あり御もんだうは
人承るべうもなし御ぜんにはあまぜばかりぞさ
ぶらわれけるはるかに日たけて御いとま申させ
たまひけりしやうくわうは法皇のりきうの古てい

いうかんせきばくの御すまいを心くるしう御らん
しおかせ給へは法皇は又しやうくわうのしよはく」七ウ

らうぐうのなみの上舟のうちの御ありさまおほつ
かなくそおほしえされけるまことにそうへう八幡
賀茂なんとをはさしおかせ給ひてはる〳〵といつ
くしままての御幸をは神明もなどかかんおうな
かるべき御ぐわんじやうじゆうたかひなしとぞみ
へたりけるぐぶの人々はたれ〳〵そ大宮の大納言
たかすゑ三条の大納言さねふさ五条の大納言国つ
なつち御門の宰相の中将みちちか六かくの宰相家
みち高くらの中将やすみち右中べんかねみつれん
せんの少将たかふさくないの少せうむねのりそ参
られけるさきの右大将むね盛のきやうはすい兵百
きはかりめしぐしれいきたゝしうしてくぶせらる」八オ

鳥羽のみなみのもんを出させ給ひてくさづより御
ふねにめす折節こちふいておいかせなりけれは

はやきるをよどみなく過させ給ひて其日のさるのこくに寺井につかせおはします国つなの大納言御所作つて入まいらせらるそのくれ程にしもあめいたくふりけれはりよはくいつしか都こひしう心ぼそき御ありさまなりしやうくわうさきの右大将むね盛のきやうをめしてあめかくふらは明日は是にや御とうりう有べきかちよりや御幸なるべき御ふねはかなふましきかなんとそ仰けるあくるあしたもあめやまざりけれはかちより御幸なるへしとて御こしにめして出させ給ふあしやのさとなる」八ウ

をの松めい所〳〵をゑいらんあつてふくはらのをかの御所へ入らせおはします入道相国心をつくして御まうけ共せられたり明ければ御ふねにめして御幸なる同き廿六日いつく島へ御参ちやくありけり宮島の南にきら〳〵しう御所を作りなきさまてらうをつゝけてしほときには御ふねさし入るやうにそしたくしたりける御所のひがしのにわにこもをしいてしろたえのへいをよせたて西にからひつのふさをあけ金銀のへいをならへてそのおもてををんやうじのざとせりぐぶの公卿殿上人のきよしよはないしともかやかた〳〵なりしやうくわうまつ大みやへまいらせ給ふ御へいは右中へん」九オ

かねみつたふたかすへの大納言うけとつて参せらるさゑもんのぜうのふさだ右兵衛のぜう時むね神馬一ひきこれを引かくら終て御きやうくやう有じゆりやうかんしゆめうぎやう御てづからあそはさるけつぐわんのだうしは三井寺のこうけんそうじやうとそ聞えしかうざにあかりかねうちならしひやうひやくのことはにいわく九重の都よりはる〳〵と八重のしほぢをわけもてまいらせ給ふ御心ざしの忝さよとたからかに申されけれは人ひとかんるいおそもよほされける中二日御とうりう有てきやくしんのみやをはじめまいらせ社々へ御幸なる大みやより五ちやうはかり山をめくつ」九ウ

てたきのみやへまいらせ給ふこうけんそうじやう
一しゆのうたをよふてはいでんのはしらに書付
らるとかや
　雲井よりおちくるたきのしらいとに
　　ちぎりをむすふ事そうれしき
神主さいきのかげひろかかいじゆじやうの五位
国し藤原のありつなしなあけられてじゆけの
四ほんゐんの殿上ゆるされけり座主そんゑいあじ
やりになさる神りよもうごき入道相国の心も
やわらぎぬらんとそみえし同き廿九日御ふねか
ざつてくはんぎよなる折節なみ風はげしかりけ
れは御ふねこぎもとさせ其日はいつく島のうち有」一〇オ

のうらというところにとゝまらせ給ふしやうくわ
う大明神の御名残おしみにうた仕れ人々とお
ほせけれはいゑみちのさいしやう
　たち帰りなごりもありのうらなれは
　　神もめぐみをかくるしらなみ

その夜の夜はんばかりよりかせもおさまりなみも
おだしかりけれは御ふねこき出させ其日は備後
の国しきなのとまりにつかせ給ふ此所には去ぬる
おうほうのころほひ一院の御幸の時こくし藤原の
保行か作たる御所の有けるを入道相国御まうけ
にしつらはれたりしよはくなからもいかてはるを
おしまざるべきとてをの〳〵志を作りうたをよん」一〇ウ

てあそひあへり明れはう月一日けふはころもか
へという事あるそかしとて都の事をのたまひ
出してながめやり給ふほどにかせの気色おほつ
かなしとて備中の国せみぞへ御ふねよせらるき
しに色こきふちの松のゑだにさきかゝりたる
を上くわうゑいらんあつてあの花おりにつかは
せと仰けれはたかすゑの大納言うけ給はつてさし
しやう中原のやすさだがはしふねにのつて
折節御せんをこぎとをりけるをまねいておりに
つかわすふぢの花を松のゑだにつけながらおり

て参りたりこゝろばせあるな此はなにてうた
仕れと仰けれはたかすゑの大納言　」一一オ

ちとせへんきみかかさしにふぢのなみの
まつのゑだにもかゝりぬるかな

それより備前のこ島に付せ給ふ五日天はれてか
いしやうも長閑けかりけれは御所の御ふねを始参
らせて人々のふね共みなこぎ出す雲のなみけふり
のなみをわけ志のうせ給ひて其日は播磨の国山田
のうらにつかせ給ふそれより御こしにめして又
ふくはらへ入せおはします六日には御とうりう有
てふくはらのへつぎやう所々れきらんありけりい
けの中納言よりもりのきやうの山さうあら田まて
御らんせらる七日ふくはらをたゝせ給ふとて入道
相国の家のしやうをこなわれぬ入道のやうじ丹波」一一〇ウ
のかみきよくに正下の四位入道のまこ越前の少将
は四位のじゆじやうとそ聞えし八日都へいらせ
給ふに御むかひの公卿殿上人鳥羽の草つまて参
られけりくはんきよの時は鳥羽殿へも御幸ならす
すくに西八条のていへ入らせおはします

源氏そろへ

同き廿二日新ていの御そくいあり御そくいはだい
こくてんにてこそとけらるへけれとも大こくでん
は一とせやけたりしかは太政ぐわんのちやうに
てとげらるへしとしよきやう御さた有けるに九
条の右のおとゞの申させ給ひけるは太政くはん
のちやうはぼん人の家にとつてもくもんしよてい」一二オ
の所なり大こくてんなからんうへはししんでんに
てこそとけらるへけれとてししんでんにてそとけ
られける去ぬるかうほう四年十一月一日れん
ぜんゐんの御そくいをししんてんにてとげられ
たりしは御しやけに依てかしこへ行幸もかな
はさりしゆへなりさればそのれいいかゞあるべかる
らんたゞご三条のゐんのゑんきうのかれいにま

かせて大じやうくわんのちやうにて有べき物をと
とり〳〵に申されしかとも九条殿の御はからひ
の上は左右に及はすしんてい御そくいありしかは
中宮はこうきでんよりにんじゆてんにうつらせ給
てやがて高みくらへまいらせ給ふ目出たかりし御
事なり平家の人々みな出仕せらる小松殿のきん
だちはきよ年の八月おとゞこうじ給ひしかは
未いろにて出仕なかりけり蔵人のごんのさゑもん
のすけさだなが今度の御そく位にいらんなく目
出度やうをかうし十まいばかりにしるいて八条
の二位殿へまいらせたりけれはゑみをふくみてそ
よろこはれけるかやうにはなやかにめてたき事
とも有しかとも世間はなをにか〳〵しうそみえ
しそのころもちひとのわうと申は大上法皇の
大二の御子にてそ渡らせ給ける御母は加賀大納言
すゑなりの御むすめなり三条高くらにまし〳〵
けれはたかくら宮とそ申ける御年十五と申し
」一三オ

ゑいまん元年十二月十五日このゑ河原の大み
やの御所にてそひそかに御げんぶくありける御
しゆせきうつくしうあそはし御さいかくすくれて
ましましけれは太子にもたち位にもつかせ給ふへ
きにこけんしゆん門院の御そねによつてをしこ
められさせ給ひけり花の本のはるのあそびにはし
かうをふるつて手つから御せいをかき月のまへ
の秋のゑんにはぎよくてきをふいてみつからが
いんをあやつり給ふかくして明しくらさせ給ふ程
に治承四年は御年三十にならせおはしま
す其ころこのゑか原に候けるげん三位入道よりま
さ忍びつゝ此みやの御所にまいりてひそかに申」一三ウ

ける事こそおそろしけれまさしう君は天照太神
四十八世の御すへ神む天わうより以来人わう七
十八代にあたらせ給ふ然は太子にもたち位にも
つかせ給ふべきにみやにてわたらせ給ふ御事を
は心うしとはおほしめされ候はすやつら〳〵たう

せいのていを見候に上にはしたかうやうに候へ
ともない〳〵は平家をそむかぬ者や候御むほんおぼ
しめしたゝせ給ひて平家をほろぼし法皇のいつ
となく鳥羽殿におし籠られてわたらせ給ふ御心を
もやすめまいらせ君もくらいにつかせ給ふべし是
ひとへに御かう行の御至りにてこそ候はんすれ
もしおほしめしたゝせ給ひてりやうじを下させ　」一四オ

給ふ物ならはよろこびをなしてはせ参らんする
源氏共こそ国々におほう候へとて一々に申つ
つくまづ京都には出羽のせんじ光のふの子とも
伊賀のかみみつもとではの判官光長出羽の蔵人光
重ではのくはんしや光よし熊野にはこ六条の判官
為よしか末子十郎よりもりとて新宮のへんにかく
れいて候つの国には多田の蔵人行つなこそ候へ
とも新大納言成ちかのきやうのむほんの時同心し
なからかへりちうしたるふたう人にて候へは申
に及はすさりながら其おとゝ多田の次郎ともさね
大田の太郎よりもとてしまのくはんしや高より
河内の国には武蔵のごんのかみよしもと入道子息　」一四ウ

いし河の判官代よしかぬ大和国にはう野の七郎
ちかはる子とも太郎ありはる次郎きよはる三郎
成はる四郎よしはる近江の国には山本かしはぎに
しこりか一たうみの尾張には山田の次郎しげひ
ろかうべの太郎しへなをいつみの次郎しげみつ
うら野の四郎しけとをあじきの次郎重より其子
の太郎しげすみかい田の判官代しげ成木田の三
郎しげ長矢島のせんじやう重高其子の太郎重
行かいの国にはへんみのくはんしやよしきよ其
子の太郎きよ光たけ田の太郎のぶよし加賀見
の二郎とを光その子の小次郎ながきよ一条の二
郎たゝよりいたがきの三郎かねのふ井ざわの五　」一五オ

郎のふ光へんみの兵衛ありよし安田の三郎よし
さだしなの、国には大うちの太郎これよしこたち

わきせんしやうよしかたかじなん木曾のくはんじ
やよしなかおかだのくわんしやちかよしその子の
四郎しげよしひらかのくはんじやもりよし其子
の小四郎よしのふ伊豆の国には流人さきの右
兵衛のごんのすけ頼朝ひたちの国には為よしか三
なん三郎せんしやうよしのりとてしだのうきしま
にかくれゐて候さ竹のくはんじや正よし其子の太
郎たゝよし次郎よしきよ三郎よしむね四郎たか
よし五郎よしすゑみちの国にはこ左馬のかみよし
ともかはつし九郎くはんしや義経是らはみな六ぞん」一五ウ

御べうゑい多田のまんじうかこうゐんなりむかし
は源平左右にあらそひていつれせうれつも候は
さりしかともいまはうんれいましはりをへたて
しうじうの礼義にもなをおとれり国はこくし
にしたがいしやうはりやうけのまゝなりけれはく
じざうじにかりたてられてやすいこゝろも候
はすかれらにりやうじをだにもくだしたふづ
る物ならはよろこひをなしてはせ参り平家をほろ
ほしきみをくらいにつけまいらせん事時日は
めつらし候ましさだにも候はゝ入道こそ年老て候へ
わかき子ともあまた候へはひきぐして参候はんと
そ申けるみやは此事いかゞせんとおほしめしわつ」一六オ

らはせ給ひてしはしは御せうゐんもなかりけるが
そのころあこまの大納言むねみちのきやうのまご
びんごのぜんじすゑみちが子せうなごんこれなが
はならひなきさうにん也けれは時の人さうせうな
ごんとそ申けるそのせうなこん此みやを見奉て
君はくらいのさうわたらせ給ふあひかまへて天下
の御事おほしめしすてさせ給なと申たり
しにあはせて三位入道かやうに申ければこれ
ひとへに天照太神正八幡の御つげやらんとてひし
〳〵とおほしめしたゝせ給ひけりまづ熊野に候
十郎よしもりをめして蔵人になさる行家とかい
みやうしてりやうしの御つかいにとうこくへ」一六ウ

くだされけれ四月廿八日都を立て近江の国より
はしめてみの尾張の源氏どもにつげしらせてこそ
とをりけれ五月十日伊豆の国に下付流人さきの
右兵衛のこんのすけ頼朝にりやうしを奉るせん
じやうよしのりはあに成けれはたはんとてひたち
の国へそくだりける木曾よしなかはおいなりけれ
はとらせんとてさんだうへこそおもむきけれ其比
熊野のへつたうたんそうは平家に重おんの身なり
しか何としてかもれきいたりけんしんぐうの
十郎よし盛こそ高くらのみやのりやうし給はつて
すでにむほんをおこすなれなち新宮の者共は定而
源氏のかたうどをせんすらんそうは平家の　」一七オ

御おんをあめ山とかうむりたれはいかてかそむき
奉るべきなちしんくうのものともに矢一いかけて
其後都へしさいを申さんとてひた甲一千よにん
舟にとりのりしんぐうのみなとへはつかうすしん
ぐうにはとりゐの法げん高ばうの法げん侍には
うゐすゝきみつやかめのこうなちにはしゆ行
法けん以下つかう其せい二千よ人時作り矢あはせ
してげんしのかたにはとこそいれ平家のかたには
こうこそいれと矢さけびのこゑのたいてんもなく
かぶらのなりやむひまもなく三日がほどこそたゝ
かふたれおほへのほうけんたんそうはいゑの子郎
どうおほくうたせわか身手をいからきいのちいき」一七ウ

つゝなく〳〵ほんぐうへこそにけのほりけれ

付いたち

さる程に法皇は俊寛なりちかなんとかやうにとを
き国はるかの島へも流しうしなはんするにこそと
おほしめされけれともさはなくてたゝ鳥羽殿に
して今年は二とせにならせおはしますおなじき
五月十二日のとりのこくばかりに鳥羽殿には
大きなるいたちのをびたゝしうなひて御所中を
はしりありきけれは法皇御うらかたあそはして
近江のかみながかぬか其時は未つる蔵人とめされ

けるをめしてこれをんやうのかみあべのやすちか
かもとに持てゆき急度かんがへさせてかんじやう」一八オ
をとつてまいられとぞ仰けるながかぬ畏て承り
やすちかがもとに行むかふ折節宿所にはなかり
けりしら川なる所へといふそれよりたつね行て
ちよくぢやうのをもむき仰すれはやすちかやがて
かんかへてかんちやうをまいらせけり仲かぬいそ
ぎ帰り参りけれとも夜ははやふけぬしゆごのぶし
きびしうしてもんをもあけさりけれは仲かぬあん
なひはしつたりついぢを上りこへ大ゆかのしたを
くくつて切いたよりかんしやうを奉る法皇ひらい
てゑいらんあるに三日かうちの御よろこび幷に御
なげきとこそうらなひ申たれ法皇これ程の御身
になりても御よろこびは然べし又いかなる御めに」一八ウ
かあわせ給ふべきやらんとそおほせけるさる程に
さきの右大将むね盛のきやう法皇の御事をたり
ふし申されけれは入道相国おもひなをつて同き
十三日より鳥羽殿をいたし奉り八条からすまるび
ふく門ゐんの御じよへ入奉らるかゝりける所に
熊野の別たうたんそうひきやくをもつて高くらの
みやの御むほんの事を申たりけれは京中さう
とうす法皇此よしをきこしめして三日かうちの御
よろこひ幷に御なげきとやすちかかけんしやうを
まいらせたるは是を申つるなりとそ仰けるむね
もりのきやう大きにさわいて福原へ此由を申され
たりけれは入道聞もあへずいそきみやこへはせ　」一九オ
のぼり高くらのみやをとり奉てとさのはたへ流し
奉れとそいかられける上けいには三条の大納言
さねふさしきじにはとうのへん光まさぶしには
ではの判官みつ長源大夫の判官かねつなをさきと
してつかうそのせい三百余騎三条高くらへこそ
むかひけれこの源大夫の判官かねつなと申すは
三位入道の次なんなりしかるをこの人数にいれ

られけるは高倉の宮の御むほんをさんみ入道すゝ
め申たりと平家未しらさりけるによつてなり
　　のぶつらかつせん
みやは五月十五夜のくもまの月をながめさせ
給ひてなんの御行末も思食よらさりけるに三位」一九ウ

入道のつかいとて文もつたるおとこ一人いそかは
しげにて参りたり宮の御めのと子六条のすけの太
いふむねのふこれをよむ御むほんすてにあらはれ
させ給ひて六波羅よりくはんにんともがべつたう
せんをうけたまはつて御むかひに参り候とう
〳〵御しよ中を出させ給ひて三井寺へ入せ給ふ
べし入道も子ともらうじう引ぐしてやがてまいり
候はんとそかいたりける宮は此事大きにおほし
めしわつらわせ給ふところにみやの侍に長兵衛の
せうのふつらといふものありかれか申けるは別の
やうや候べきたゝ女房のしやうそくをからせ給ふ
へしと申たりけれはみやはかさねたる御衣に」二〇オ

いちめかさをそめされける黒丸と申すわらはに
つゝみに物入ていたゝかせらるすけの太ゆふむね
のふはひたゝれにたまたすきあけからかさもつて
御供仕るたとへはせいしが女をむかへてゆくがこ
とくにて高くらをもての小門より出させ給ひて高
くらをのぼりにこのゑをひがしへ過させ給ひける
に大きなるみぞのありけるをいと物かるやかに
さつとこえさせ給ひけれはみち行人かたちとゝ
まつてあなはしたなの女房のみぞのこえやうかな
とあやしげに見とかめまいらせけれはみやはいと
どあしはやにこそすきさせ給ひけれ宮はなに事
もとりあへぬ御さまにてさしものてうほうともを
とりわすれさせ給ひける中にせみおれ小ゑだ
とて二の御ふゑをつねの御まくらにとりわすれさ
せ給ひたりけるをたちかへつてもとらまほしくそ
おほしめされけるさる程に御しよの御るすには
のふつら一人候ひけるか女房たちをばかしこ爰へ
」二〇ウ

しのばせ見くるしきものあらはとりしたゝめんと
て御所中をはしりめくつて見けるにこの御
ふゑを見つけ奉てあなあさまし是は君のさし物御
ひさうにてあんなるものをとて五町がうちにて
をつつきまいらせけれはみやなのめならす御かん
あつてわれ死なは此ふゑを御くはんにいれよとそ
仰けるやがてなんぢ御供に候へかしとおほせけれ」二一オ

はのふつら畏て申けるはあの御所にのふつらか
候事をは京中の上下みな存ぢの事にて候にそれ
もその夜はにけてなかりけりなんといはれん事
むけにうたてしうおほえ候ゆみやとりはかりにも
名こそおしう候へ官人ともよせ候はゝ一あひし
らいあひしらい一はう打やふつてやがてまいらん
する候とてはしり帰るのぶつらか其夜のしやう束
にはとくさのかりきぬのしたにもよきのはら巻
をきゑふの太刀をそはいたりける三てうおもての
そうもんをも高くらおもての小もんをもともに

ひらひてそ待懸たるあんのごとくその夜の夜はん
ばかりに六波羅のつはものとも三百余騎にてをしよ」二一ウ

せたり中にも源大夫の判官かねつなは存するむ
ねありてはるかの門前にひかへたり出羽の判官光
長は馬にのりながら御門のうちにかけいり大に
わにひかへあぶみふんはりついたちあかり大をん
じやうをあけてみやの御むほんすでにあらはれさ
せ給ひて六波羅より官人ともかへつたうせんを承
はつて御むかひに参りて候とう〳〵御所中を出
させ給ふへしとそ申けるのふつら大ゆかに立
てたうじは御所にても候はす御物まふての御る
すにて候何事そ事の子細を申されよといひけれ
は光長なん条此御所ならてはいつくにかわたらせ
給ふべきそのぎならは下べとも参つてさがし奉れ」二二オ

とそ申けるのふつら大きにいかつて物にもこゝろ
へぬ官人ともかものの申やうかなたとひ君のてう

てきとならせ給ひて一天下をかたきにうけさせ給
はんからに馬にのりながら御門のうちへ参るた
にもきくわひなるにあまつさへ下べども参つて
さかしたてまつれとはいかてか申すそ御前には
左兵衛のせうはせべの信連が候なりまちかふ依て
あやまちすなとそ申けるはるかのもんぜんにひ
かへたりける源大夫の判官かねつな此由をきひて
おめいて返入かねつなか郎とうにかなたけと
いふやつはきこゆる大力のかうの者也けるかうち
物のさやをはつしのふつらを目にかけて大ゆかの」二二ウ

うへゑきつとのぼりとうれい十四五人つゝひたり
のふつら此よしを見るよりもかりきぬのおびひぼ
ひつきつてなげのけゑふの太刀とはいへとも身を
はすこしこゝろへてつくらせたりけるをぬきあはせ
てうちあふたりかたきは大太刀大なぎなたにてふ
るまへとも信連がゑふの太刀にきりたてられて
あらしに木のはのちるやうに庭へさつとそおり

たりけるころは五月十五夜の一村雨の雲間より
有明の月のあらはれ出てあかゝりけるに信連は
安内者なりかたきはぶあんない也ければ爰のめん
らうにをつかけてははたときりかしこのつまりに
おつつめてはちやうどきるせんじのおつかひをは」二三オ

いかてかくは仕るそといひければせんじとは
なんそとてさん〳〵にこそ切たりけれ太刀ゆがめ
ばおとりのきふみなをしおしなをしもみにもふ
でそ切たりけるたちところにくつきやうの兵共十
四五人となりふせたる其後太刀のさき五寸ばかり
うちおつてすてけりはらをきらんとてこしの刀を
さくりけれ共さやまきおちてなかりければちから
をよはす大手をひろげもんぜんのかたへと行程
にこゝに手束の八郎が長刀もつて出来りのぶつら
なぎなたにのらんととんでかゝるいかゞはしたりけん
あしうのりそんじもゝをぬいさまにつらぬかれ
心はたけうすゝみけれとも大ぜいのなかに取こめ」二三ウ

られていけどりにこそせられけれ其後御所中を
さがし奉りけれともみやわたらせ給はさりければ
信連はかりをからめ取て六波羅へこそ帰りけれ次
の日さきの右大将宗盛の卿大ゆかにたつて信連を
おつぼのうちにめし出しまことにわおとこはせんじ
とはなんぞとて切たるかのぶつらさん候このほと
あの御所を夜な〳〵ものかうかゝひ候をなんてう
事のあるべきと思ひあなつつてようじんをも仕候
はぬところに此夜の夜はんはかりに何かはしらす
よろふたるものか三百騎はかりうち入て候あひだ
なにものそととうて候へはせんじのおつかひと
なのるたうじはせつたうかうだうさんそくかい　」二四オ

そくらなんといふやつはらあるひはせんじのお
つかひあるひはきんだちの御出となのるよしかね
〳〵うけたまはつていかほどにせんじとはなんそ
とて切た候右大将せんしのお使あつこうしちやう
のしもべにじやうせつかいかた〳〵もつてきくわ
いなりやゝ侍ともさためてみやの御ざいしよをば
あのおとこかしりまいらせたるらんよく〳〵せめ
とふて其後河原にひきいだしかうへをはねよとそ
宣ひけるのぶつら大きにあさわらつてせんしの
おつかひあつこうしちやうのしもべにんしやう
せつかいこともおろかに候かねよき太刀だにも
もつて候はゝ三百人の官人共をは一人もあんおん」二四ウ

にては免し候はしこれはがうだうめらおどさん
ためのゑふの太刀にて候へばなにほどの事か候
べきこと〳〵しうこそ候へそのうへ宮の御ざい所
をはしりまいらせぬ候たとひしりまいらせて候共
侍程の者の申さしと思ひ切てげる事をきうもん
にをよんて申べきやはみやの御為にかうべを
はねられまいらせん事こんじやうの面目めいど
の思ひ出なるべしとて其後はものも申さず平家
のさふらひ共らうせうなみゐたりけるがあつはれ
かうの者の手ほんかなとほめけれはある者の申

けるはあれか高名はいまにはしめぬ事そかれか十六の年わうはんしうのとゝめかねたるかう」二五オ

だう六人を二条ほり川のへんにたゝ一人おつかゝり四人きりふせ二人からめとつて其時なされたりし左兵衛のぜうそかしあたらものゝきられん事のおしさよ〳〵とくち〳〵に申けれは入道相国もさすかおしうや思はれけんさらはなきつそもし思ひなをつたらばたうけに奉公をいたせといへと宣ひて伯耆のひのへそ流されける其後平家ほろひ源氏の世となつてかまうらにくだり梶原平三かげときに付て事のこんげんをくはしう申たりけれは鎌倉殿みやの御ために心さしのふかき程をかんし給ひて能登の国に御おん有とそ聞えし

きをう」二五ウ

みやはたかくらを北へこのゑをひがしへ河を渡てによい山にかからさせおはしますいつならはせ給ふべきなれば御あしかけぬはれぬちあへつゝあゆみそかねさせ給ひけるなつ草のしげみがもとのつゆけさもさこそはところせくおほしめされけめむかしきよみ原の天わう大ともの王子におそれさせ給ひて大和国吉野の山へわけいらせ給ひけん御ありさまもかくやとおほしめししられたれしらぬ山ぢにつけいらせ給ひて夜もすがらまよはせをはしますとかくしてあかつきかた三井寺へ入せ給ひけり宮大衆にむかはせ給ひてかいなきいのちのすてがたさにしゆとをたのみてこれまて来れ」二六オ

るなりと仰ければ大衆やがてたのまれ奉りほうりんゐん成所に御所しつらふていれ奉るぐごしたてて参らせけり明れは十六日高倉の宮こそ三位入道よりまさのすゝめに依て御むほんおこさせ給ひてうせさせ給ふなれと申程こそありけれ京中さわきのゝしることなのめならず年ころ日比もあれはこそありけめ今年しも三位入道かゝるむほん

をおもひたゝれけるゆへをいかにと申すにさき
の右大将むねもりのきやうのふしぎの事をのみ
し給ひけりされば人の世にあれはとていふまし
き事をいひすましきことをする事をはかね
てよくみな人のしりよあるべきことなりたとへは」二六ウ

三位入道のちやくし伊豆のかみ仲つなのもとに
聞えたる名馬ありかけなる馬のいろきなるかなを
は木のしたとそ申ける右大将此由をつたへ聞
給ひて伊豆のかみのもとへ使者を立てそれにき
こえ候木のしたを給はつて見候ばやと宣ひつかは
されたりけれは伊豆のかみさる馬をもつて候ひつ
るを此程あまりにのりつからかしていたはら
せんかために田舎へつかはして候やがてめしこそ
上せ候はめと返事せられたりけれは右大しやう扨
はとておはしける所に平家のさふらひ共老少なみ
ゐたりけるかある物の申けるはあはれ其むまは
おとゝひまても候ひつる物を昨日も候ひしけさ」二七オ
も庭のりせさせ候ひつる物をなんと申ければ右
大将さてはおしむにこさんなれにくし其馬こへとて
あるひは侍してはせさせつあるひはふみなんとし
て日々に五六度七八度そこはれける父の三位入道
此よしをきゝ給ひてあるとき伊豆のかみをよふて
たとひ金をまるめて馬にしたりといふとも左様に
人のこはんををしむべきやうやあるはや〳〵其馬
六波羅へつかはすべしとのたまへはいづのかみま
つたう馬のをしきにては候はすたゝけんいに付て
こはるゝとなれは安からす候ひてこそ今まてつかは
し候はざりつれとて力及はす六波羅へ一しゆの
うたをよふてこの下にそへてつかはされける」二七ウ

こひしくはきても見よかし身にそふる
かけをはいかゝはなちやるべき

右大将うたの返事おはせで木のしたをひきまはさ
せ見るべき程見て馬はよひ馬たゞしぬしかおし
みつる事こそにくけれやがて名乗ををかなやきに
し候へとて伊豆のかみ仲つなといふかなやきをし
てそおかれたるきやく人来て聞え候木の下を見
候はゝやと申時はあの仲つなめか事候かあれ
なかつなめひき出せなかつなめにくつははげよう
てほれなんとそ宣ひける伊豆のかみ此由をきゝ給
ひて父の三位入道に申されけるはいつか馬を
はうてとはいへこはれとはいふさしも人の身に」二八オ

かへてをしかりつる馬をけんいに付てこはるゝ
だにもやすからす候にけふ此ころなかつなか馬
ゆへに天下のわらはれくさとなり候ひぬる事
こそ返々もくちをしう候へはちをみんよりは死に
をせよと申す事の候物をなんとやう〳〵に
申されたりけれは三位入道まことに人にさやうに
せられていのちいきても何にはかせんさりながら
びんぎをうかかふみにてこそあれとておはしける
がわたくしにてはゑ思ひもたたて宮をすゝめまい
らせけるとそ承るこれにつけてもあにのおとゝ
の事をのみそいまさら忍び申けるある時おとゞ
参内のつゐてに平家の御かたへ参らせ給ひたり」二八ウ

けるに何かたよりきたれるともしらす大きなる
くちなはのおとゞのおはしけるさしぬきのひだん
のりんをはいまはりけるあひだおとゞ此由かくと
申さば女房たちもさはかせ給ひ中宮も定而おと
ろかせ給ひなんすと思はれけれはひだりの手にて
はくちなはのかしらをおさへ右の手にては尾をゝ
さへやはらなをしの袖のうちに引いれつゝ御前
をついたつてそまかり出られけるおとゞ中門にを
はして六位や候〳〵とめされけれは伊豆のかみな
かつなのいまだ其比ゑふの蔵人にて候はれけるか
仲つなとおいらへ申てまいられたりおとゞこの
くちなはをたふ仲つなたまはつてんじやうの小」二九オ

にはをへてゆばとのにいてみくらのことねりをめ
してこれ給はれとのたまへはきやつかしらをふつ
てにけさりぬ其後わたなべのきをうのたきぐちを
めして此くちなはをたふたきぐち給はつてすてゝ
けり次の日おとゞよぎ馬にくらをかせ太刀一ふり
そへて仲つなのもとへをくりつかはさるとて昨日
のふるまひこそゆふにみえられて候へ此むまは
のり一の馬なり夜ゐんにをよんでちんけよりけい
せいのもとなんとへかよはれんする時もちいらる
べう候と宣ひつかはされたりけれは伊豆のかみ六
位のことは大臣の御返事なりけれはまつ御馬畏て
承り候さてもきのふの御ふるまいはけんしやう」二九ウ

らくにこそにて候しかとぞ申されけるいかな
れは小松のおとゝはかくこそゆゝしうをはせしに
御をとゝの宗盛はさしも人のおしむ馬をこひ取て
天下の大事にをよびぬるこそあさましけれ
同き十六日このゑ河原に候ひける源三位入道より

まさ家子らうしうひきぐしてひたかふと三百余騎
たちに火かけ三井寺へこそ参りけれわたなべの
きをうのたきぐちか宿所は六波羅のうらひかきの
うちなりけれはおくれはせしてとゝまつたるよし
を右大将きゝ給ひてきをうめせとてめされけりめ
されてきをう参たり右大将やがて出合たいめんし給
ひてなとかなんちはさうでんのしう三位入道かとも」三〇オ

をはせてとゝまりたるそ存するむねのあるかとの
給はきをうさん候日比はしぜんの事も候はゝま
つさきかけてうちじに仕べうぞんじ候ひつるか
今度は何と思はれ候ひてやらん此よしかくともし
らせられ候はねはのこりとゝまり候と申右大将
年来なんぢか此へんを出入つるをあつはれめしつ
かはばやとおほしつるにたうけに奉公をいたせ
かし三位入道かおんにはすこしもおとるましき
そとよたゞしてうてき三位入道に同心をやす
べき又たう家にほうこうをいたさんとや思ふと

のたまへはきおうさん候たとひさうでんのよしみ
候ともいかててうてきとなれる人に同心をは
」三〇ウ

仕候べきぜんあくたうけに奉公をいたさうずる
候とそ申ける右大将なのめならすよろこふで入
給ふさふらひにきをうはあるか候〳〵とてあし
たよりゆふべにをよぶまてしこうす其日のくれ
がたにきをう申けるは宮丼に三位入道殿は三
井寺と承り候わたなべたうにはそんぢやう
それがしたれがしそ候らん思ふに心にくうも候
す定而夜うちなんとをもせさせられ候はんすらん
しせんの事も候はゝゑりうち仕るへう存し候
かこのほとのつてようにあひぬべき馬をもつて
候ひつるをしたしきやつにぬすまれて馬一ひき
ももち候はすあはれさもしかるべう候はゝ御馬一
」三一オ

ひきくだし給り候はゝやと申たりけれは右大将
いかにもしてあらせつけばやと思はれけれはしら
あしげなる馬のなをばなんりやうとつけてひさう
せられける名馬にきんふくりんのくらおゐてそ
たふたりけるきをう御馬給つて宿所にかへりあは
れさらは日のとふしてくれよかし此馬にうちのつ
て三井寺へはせ参り宮ならびに三位入道殿のまつ
さきかけて打死にせんとおもひけるこそおそろし
けれ次第にくらふもなりしかはさい子ともをは
しのはせて水にちとりをおしたるひやうもんの
ひたゝれにきくとぢ大きらかにしてそきたりける
ぢう代のきせながひおとしのよろひをきくかた
」三一ウ

うつたる五まいかぶとのおゝしめいか物つくりの
太刀をはき廿四さいたる大中くろの矢おひぬり
籠籐のゆみもつてたきくちかこつはうをわすれじ
とたかのはにてはいたりけるまと矢一手ぞさし
そへたる下人のおとこにたてわきばさませたる
に火かけ三井寺へこそ参りけれ六波羅にはきをう
か宿所より火出きたりとてさうどうす右大将まつ

きをうはあるか候はすと申すてのべにしてきや
つにだしぬかれつる事こそやすからねしやつ
おつかけていけどりにせよとのたまへは平家の侍
ともらうせうなみゐたりけるかいや〳〵きをうは
きこゆる大力のかうの者にてつよゆみせいびやう　」三二オ

なり廿四の矢にてはまつ廿四人は射ころされなん
すおとなせそとてむかふ者こそなかりけれさる程
に三井寺にはきをうか沙汰あつてあつはれその
もの一人をはめしくせらるへう候ひつる物をくち
〳〵に申あはれけるは三位入道かねてよつて
きをうか心のそこおやしり給ひたりけんいたづらに
そのものとらへからめられはよもせし見よたんた
いまこれへまいらふずるものをとの給ふところに
きおうつつと参りたりされはこそとそ宣ひけるき
おう申けるは伊豆のかうの殿の木の下がかはり
に六波羅のなんりやうをこそとつて参りて候へと
申たりけれは伊豆のかみなのめならずよろこび　」三二ウ

給ひてやがて其むまをきをうにこうて尾かみを
切すてさせむかしはなんりやう今は平のむねもり
入道といふかなやきをして同き十八日のまた朝
六波羅の惣門のうちへおひ入られたりければ平家
のさふらひとも是を見付てさうとうす右大将いよ
〳〵はらをたて今度三井寺へよせたらんには人を
はしるへからすまつきをうめをいけどりにせよ
のこきりにてくびきらんする物をとておとりあか
り〳〵いかり給へどもなんりやうかおかみもおひ
ずかなやきも又うせざりけり

三井寺より山門へのてうじやう

さる程に三井寺にはみやいらせ給ひて後大　」三三オ

ぜき小ぜきほり切てかいかねならし大衆をこつて
せんぎすきんじつせいしやうのていを見るに仏法
のすいびわうほうのらう籠只此ときにあたれり
いま清盛入道かぼあくをきんぜすんは何れの日を
かごすへきしかるに高倉の宮たう寺へじゆ御の

事これひとへに天照太神正八幡しんら大明神の
みやうじよにあらずや天照ぢるいもやうがう
をたれ仏力神力も定而かうふくをくはへ給ふべし
そも〳〵ほくれいはゑんとん一みのけう文なり南都
は又げらうとく度のかいちやうなりてつそうの所
などかくみせらるべきとてならへも山へもてうじ
やうをこそ送りけれまつ山門へのじやうにいはく」三三ウ

おんじやう寺てつす延暦寺のかことにかうり
よくをいだしてたうじのふつほうはめつをた
すけられんとこうじやう
右入道じやうかいがために仏法をほろほしわう
ぼうをかたぶけんとす内につけけにつけなげき
おなしうらみをなすあひだしうたんきわまりなき
所に今月十五日の夜一院たい二の御子ふりよ
のなんをのかれんかためにひそに入寺せしめ給ふ
所なり爰にゐんぜんとかうして出し奉るべきむ
ねしきりにせめありといへともしゆと一かうこれ
をおしみ奉るよつてかのぜんもんぶしをたう寺
へいれんとすたうしのふつほうのすいびまさに」三四オ

此時にあたれりしゆ諸なんぞしうたんせさらん
やそれゑんりやくおんじやうりやう寺はもんせき
二にあいわかるといへ共かくする所はおなじく
ゑんどん一みのけうもん也たとへばとりのふたつ
のつはさのことし又はくるまの二のわにたり
一はうかけんにおゐてはいかてかそのなげきなる
らんやていりことにかうりよくをかうむつてとう
じのふつほうはめつをたすけらるべくんば年来
のいこんをわすれてぢうせんのむかしにふくせん
しゆとのせんぎかくのことし
治承四年五月の日大しゆらとぞ書たりける

南都へのてうじやう」三四ウ

山門の大衆此じやうをひけんしてこはいかにたう
ざんのまつ寺てありなからとりの左右のつはさの

ことく又くるまのりやうわににるとおさへて書
条これもつてきくわいなりとてへんてうにもをよ
はす其上入道相国天だい座主めいうん大そう正に
しゆとをしつめらるべきよし宣ひければ座主い
そきとう山して大衆をしつめ給ふかかりし程に
みやの御かたへはふちやうのよしおそ申ける
又入道相国近江ごめ二万ごく北国のおりのべきぬ
三千ひき山門へわう来の為によせらる是をたに
〳〵みね〳〵へひかれけるにには か事てあり
けれは一人してあまた取大しゆもあり又手をむな」三五オ

しうして一もとらぬしゆともあり何者のしわざに
やありけんらくしよをそしたりける
　山法師おりのべころもうすくしてはぢ
　　をはえこそかくさざりけれ
又きぬにもあたらぬ大衆のよみたりけるやらん
　おりのべを一きれもいぬわれらさへうす
　　はぢをかく数に入かな

次に南都へのじやうにいわく
　をんじやうじてつすこうふく寺のがことに
　　かうりよくをかうむつてたう寺のふつほうは
　　めつをたすけられんとこふじやう
右仏法のさかんなる事はわうほうによるわう法　」三五ウ

又ちやうきうなる事もかならず仏法による爰
にしきりの年よりこのかた平の相国ぜん門しやう
かいがためにふつほうをほろほしてうせいをみ
たるないにつけげにつけなげきをなしうらみを
なすあひたしうたんきわまりなき所に今月十
五日の夜一院たい二の御子ふりよのなんをのかれ
むかためにには かに入寺せしめ給ふ所なりこゝ
にゐんせんとかうして出し奉るべきむねしきりに
せめ有といへともしゆと一かうこれをおしみ奉る
よつてくはんぐんをはなちつかはさるべきむね其
聞えありふつほうといひわうほうといひ一時に
まさにはめつせんとすそれたうのゑしやう天子　」三六オ

はくはんぐんをおこして仏法をほろほさしめんとせし時しやうりやうぜんのしゆとかつせんをいだして是をふせぐいはんやむほん八きやくのともがらにおゐてをや就中南とはれいなくしてつみなき長者をはいるせらる此ときにあらすんはいつれの日かくわひけいをとけんやしゆとねがはくはうちには仏ほうはめつをたすけほかにには又あくぎやくのばんるいをしりぞけは同心の至り本ぐわいにたんぬべししゆとのせんぎかくのことし

治承四年五月の日　　大しゆら

とそかいたりける

南都よりおんじやう寺へのへんてう　」三六ウ

其後南都には此じやうをひけんして東大こうふくりやう寺のたいしゆしゆゑしてせんぎすせんき事終てのちやがて参べきよしのへんてうをこそ送りけれそのじやうにいはく

こうふく寺てつすおんじやう寺のがことに来てう一しにのせられたり

右さきの太政大臣平のあつそん清盛か為にき寺のふつほうをほろほさしめんとするよしの事てつすぎよくせんきよく花りやう家のしうきをたつといへともきんしやうきんくこれみなおなじく一人のけうもんより出たり就中南京北きやうともにもつて如来のでしたりし寺他寺たかひにでう　」三七オ

だつかましやうをふくすへしそも〳〵清盛入道はへいじのさうかうぶけのちんがいなりそぶ正盛蔵人五位の家にめしつかへて諸国じゆりやうのむちを取大くらのきやうためふさかしうしし

いにしゑけび所にふししゆりの大夫あきすゑ播磨の太しゆつたりしむかしうまやの別たうしきにんすしかるを忠盛せう殿をゆるされんとせし時とひのらうせうほうこのかきんをおしみないげのゑいかうをの〳〵馬たいのしんもんになく忠盛せいかんのつばきをかいつくらうといへとも世の

たみなをはくおくのたねをかろむし名をおしむせ
いし其いゑにのそむ事なし然るに清盛入道　　」三七ウ

去ぬる平治元年十二月に太上わう一せんの
こうをかんじてふ次のしやうをさつけられ給ひし
よりこのかたたかく相国にあかりかねてひやうぢ
やうを給はるないしあるひはたいかいを忝くしあ
るひはうりんにつらなり女子あるひは中宮しき
にそなわりあるひはじゆんごうのせんをかうふり
くんていそしみなきよくろにあゆみそのまこか
のおい悉ちくふをさくしかのみならすきうしを
とうりやうしはくしをしんだいしてみなぬびぼ
くじうとなす一まう心にたかへばわうこうといへ
ど是をとらへへんげんみみにさかふれは公卿とい
へとこれをからむしかりといへ共あるひは一たん」三八オ

の身みやうをのひむかためあるひはへんしのれう
しよくをまぬかれんと思ひてばんぜうのせいしゆ
なをめんてんのこびをなしてぢう代のかぐんかへ
つてしつかうのれいをいたす代々さうでんのけり
やうをうばうといへともしやうさいもおそれてし
たをまき宮々さうぜうのしやうゑんを取といへと
もけんいには丶かつて物いふ事なしかつに
のるあまり其年のふゆ十一月に太上くわうの
すみかをついふくしてはくりくこうの身をおしな
かすほんきやくのはなはたしき事まことに古今に
たえたり其時我らすへからくそくしゆに行む
かつてそのつみをとふへしといへともあるひは神　」三八ウ

りよにあひは丶かりあるひはわうげんをしやう
するによつてうつたうをさへて光いんをおくる間
かさねて一ゐんだい二のしんわう宮をうちかこみ
奉る所に八幡三所春日の大明神ひそかにやうがう
をたれせんひつをさ丶げきじに送りつけしんら
のとぼそにあつけ奉る所なりわう法つくべから
さるむねあきらけししたかつてき寺しんみやうを

すてて守護し奉る条かいじきのたぐひたれかすい
きせざらんや其時我らゑんいきにあつて其なさけ
をかんする所に清盛入道なをきへいをおこして
き寺にいれんとするよしの事ほのかにつたえ
承りをよぶに依てかねてそのよふいをいたす十
」三九オ

七日に大衆にふれ十八日たつの一てんに諸寺
にてつそうし末寺に下ぢしぐんしをえて後
あんないをたつせんとする所にせいてうとび来
てはうかんをなけたり数日のうつねん一時にげ
さんすかのたうかしやうりやう一山のひしゆなを
ふそうのくはんびやうをかへすいはんやわこく南
北両もんのしゆといかてかばうしんのじやるいを
はらはさらんやよつてりやうもんさうのぢんをあ
はせてよろしくわれらしんはつのつけをまつ
へしはやくじやうをさつしてきたいなす事な
かれしゆとのせんぎかくのことし

治承四年五月の日　　大衆ら
」三九ウ

とかいたりける

大衆そろへ

三井寺にわかひかねならひて又大衆せんぎすそも
〳〵山門は心かわりしつ南都はいまだ参す此事
のびてはあしかりなんいさや六波羅におしよせ
夜討にせん其儀ならばらうせう二手にわけてまつ
らうそうともはによいがみねよりからめ手にむ
かふべしあしかるどもを四五百人さき立てしら川
のざいけに火をかけやきあげはざいきやうにん
六波羅のぶしどもあわや事出来りとてはせむ
かわんすらん其時黒坂さくら本のへんにひつかけ
〳〵しはしささへてたゝかわんまに大手は松　」四〇オ

坂より伊豆のかみを大将軍にてあくそう共六波羅
にをしよせ風おもてに火かけやきあけ一もみもん
てせめんになどか太政の入道やき出してうたさる
べきこそせんぎしたりける其中に平家のいのりし
ける一によばうのあじやりしんかいで子同じゆく

数十人ひきくしてせんきのにわうすすみ出て
申けるはかう申せは平家のかたうどとやおほし
めされ候らんたとひさ候ともいかゝしゆとのきを
やふり我らの名をもおしまて候べきかむかしは源
平左右にあらそひて朝家の御かためたりしか
ともちかころは源氏のうんかたぶき平家世を取て
廿余年天下になひかぬ草木も候はすされはたい
たいのたちのありさまもこ勢にてはたやすふせめ
がたしされはよく〳〵はかり事をめくらし勢
をもよほし後日によせさせ給ふへうもや候はん
と程をのばさんかために長々とそせんぎしたり
ける爰にぜうゑんばうのあじやりきやうしう衣
のしたにはらまきおき大きなるうちかたなをしく
つろげてさすまゝにせんきの庭にすみ出せう
こをほかにひくへからすわか寺の本ぐわんきよみ
原の天わうは大ともの王子におそれさせ給ひて
大和国吉野のおくへわけいらせ給ひし時うたの

」四〇ウ

こほりを過させ給ふには其御せいわつかに十七騎
されとも伊賀伊勢にいてみの尾張の御勢をもつて」四一オ
大ともの王子をほろほしついに御位につかせ
給ふきうてうふところに入じんりん是をあはれ
ふといふ本もんありじ余をはしるへからすきやう
しうかもんとにおゐては今夜六波羅にをしよせて
うち死にせよやとそ申けるゑんまんゐんの太
いうげんかくせんきはしおほしいそけやすゝめ夜
のあくるにとそ申けるまつによいがみねへむ
かふらうそうともの大将軍には源三位入道より正
ぜうゑんばうのあじやりきやうしうじつざうばう
のあじやり日印そつのほうげんぜんちぜんちかで
しぎほうせんやうをさきとしてつかう其せい一
千よ人かふとのおゝしめてそうつたりけるまつ坂」四一ウ
よりむかふあくそうともの大将軍にはゑんまん
院のたいうげんかくじつざうばうの伊賀のきみ法

りんゐんのおにどさかれら三人はうちものとつて
はおににも神にもあはんといふ一人たうぜんの兵
なりびやうどうゐんにはいなばのりつしやこは
だいぶじやうきゐんのあらさとすみの六郎ばう
つゝ井ほうしにきやうのきみあくせうなごん北の
院にはこんくわうゐんの六てんぐ太ゆふしきぶ
能登加賀さどびんごらなりがやのちくごおほやの
しゆんちやうひをのぢやうおん四郎ばう松井の
肥後五ちゐんのたじまぜうゑんばうのあじやり
きやうしうがはうに六十人のうちかゞくわうせう」四二オ

ぎやうぶしゆんしうほうし原には一らいほうしそ
すすんたるだうじゆにはつゝゐのじやうめうめい
しゆん小倉のそんぐわつそんゑいぢけいらくしゆ
かなこぶしのげんゑいばうぶしには伊豆のかみ
なかつな源大夫の判官かねつな六てうの蔵人なか
いゑその子の蔵人太郎なかみつしもかうべの藤
三郎きよちかわたなべたうにははぶく播磨の次
郎さづくさつまの兵衛の尉つゞくの源太きをうの
たきぐち長七となふあたふの右馬の允きよすゝむ
さばくむつあをさきとしてつかうそのせい一千五
百余人てんでにたいまつをそもつたりけるさる程
に三井寺には宮いらせ給ひてのち大ぜき小ぜき　」四二ウ

ほり切てさかもきふさきたりければほりにはし
渡しさかもきのけんとしけるまにじこくををしう
つつてせきのにわとりこと〳〵く鳥羽院あひぬ伊豆
のかみこゝにてとり給ひては六波羅へははくちう
にこそよせんずれこはいかゞせんとの給ふところに
ゑんまん院のたいうげんかく前のごとくにすゝみ
出てしはしとよいこくにさるためしありかんの
せうわうの御ときまうしやうくんいましめをかう
むりたりしにきさきの御たすけによつて逃まぬ
かれんとせしときかんこくのせきに至るにはとり
のなかざる程はせきのとあけてとをす事なしまう
しやうくん三千のかくのなかにてんかつといへる　」四三オ

兵有あまりにはとりのなくまねをよくしけれ
ば人けいめいとそ申けるいまだうしのこくはかり
の事なりにけるかのけいめいたかき所にはし
りあかりいむけの袖を二三度ほと〳〵とうちたゝ
きにわとりのなくまねをゆゝしくしたりければ
せきのにわとりきゝつけてなきあひぬとりのそら
ねにばかされてせきのとあけてとをす事あり是
もさだめてかたきのはかりことにてもやなりすらん
たゝよせよやといひけれとも五月のみじか夜
なりけれはほの〳〵とそあけにける伊豆のかみ夜
うちにはさりともとこそおもひしにひるいくさ
にてはいかにもかなふましさらはうつ手ともよひ」四三ウ

かへせやとて大手は松坂よりとつて返しからめ
手はによいがみねよりひつかへす伊豆のかみせん
するところこれは一によばうがながせんきによつ
てこそ夜はあけたれにくしそのばうきれとておし
にをしよせさん〳〵にこそせめたりけれふせく所
の弟子とうじゆく十余人うちころさる一によはう
もいたでおふてはう〳〵六波羅にまいり此由申
たりけれ共平家は軍兵数万騎はせあつまりたれは
いとさはくけしきもましまさす同き廿三日源三位
入道よりまさ宮の御まへに参つて申されけるは夜
討にはさりともとこそ存候ひつるにひるいくさ
にてはいかにもかなひ候ましいまは南都へいらせ」四四オ

給ふべうもや候らんと申されたりければみや今
はの時にもなりしかはよろつ御心ぼそくやおほし
めされけんせみおれ小ゑだとてふたつの御ふゑを
さしも御ひさうありけるか中にもせみおれ
をばこんだうのみろくにこめまいらつさせ給ひ
けりそも〳〵この御ふえと申は鳥羽院の御時そう
てうの御門へ金を千両をくらせおはしましたり
ければその御へんほうかとおほしくてしやうじん
のせみのごとくにふしつきたりけるかんちくを
一よをくらせおはしましたりけるを御かとかほど

のてうほうをいかてかたゝはえらせらるべきとて
大納言の法印かくそうにおほせてだんじやうに　」四四ウ
たて七日かぢしてゝらせられたりし御ふゑ也
されはをほろけの御ゆうにはとりも出されさり
けるを有時の御ゆうに高松の中納言さねひらの
きやう承つてこの御ふゑをふかれけるにたゝよの
つねのふゑのやうにこゝろへておもひわすれてひざ
より下におかれたりければふゑやとがめけんせ
みをれにけりそれよりしてこそせみをれとは名付
られけれ然を此宮ふゑのきりやうたるによつてつ
たはらせ給ひていつの世までも御身をはなたしと
おほしめされけれ共みろくへ参らつさせ給ふりう
げのあかつきちぐの御為かとおほえてあはれなり
し御事なりぜうゑんばうのあじやりきやうしう　」四五オ
はとのつえにすがりみやの御前に参つて申
けるはいつくのうらはまても御とも仕るへう存
候へとも七しゆんにあまりぎやうぶもかなひかたふ
候へは弟子にて候ぎやうぶしゆんしうをまいらせ
候このしゆんしうと申すはさがみの国の住人山
の内のすとうきやうぶのぜうとしみちが子にて候
なり父ぎやうぶのせうは去ぬる平治によしとも
に同心して六条河原にてうちじに仕候ひぬこの
しゆんしうはきやうしうにいさゝかゆかりあるに
よつてようせうよりあとふところにておほしそだ
てゝ候へはこゝろのおくまても能ぞんじして候い
つくのうらはまてもめしぐせらるべう候となみた」四五ウ
もせきあへす申たりければ宮いつのよしみにか
かくは申すらんとて御なみだにむせはせおはし
ますこれをはじめとして老僧ともはみないとま
申て残とゝまりぬあくそうともはみな御ともに
ぞ候ひけるみやの御せいわづかに一千余人は
過ざりけりみやはいつか御馬にもめしならはせ
給ふべきなれば寺と宇治とのあひたにて六度まて

御らくばありこれは去ぬる夜うちとけ御しんなら
さりつるゆへなりとてうぢのびやうどう院へいれ
奉つてしはらく御きうそくありけり
　　はしかつせん
さる程に三位入道なりつな以下のぶしともはうち」四六オ

はしの中三間ひかせてかいたてにかき馬ひやさせ
なんどしける程に平家のかたには此由をきひてす
はや高倉のみやこそ南都へをもむかせ給ふなれ其
ぎならばおつかけてうちたてまつれやとて大将軍
には右兵衛のかみとももり中宮のすけみちもり
さつまのかみたゝのりさふらひ大将には上総守
たゞきよ其子太郎判官たゞつなひだのかみかげ家
其子大夫の判官かけたか河内の判官ひでくにたか
はしの判官ながつな越中のぜんじもりとし次郎
兵衛もりつき武蔵の三郎左衛門有国をさきとして
つかうそのせい二万八千余騎同き五月廿三日の
むまのこくはかりにこわた山をうちこえてうち」四六ウ

はしのつめにぞおしよせたるむかひのびやう
どうゐんにかたきありとみてければ平家の侍
つはものともゑびらのほうたて打たゝき天もひゞき
大地もゆるぐばかりにときつくる事三か度なり
平家のさふらひともあまりにいさみほこつて渡る
ほとにせんぢんがはしをひいたそあやまちすな
はしをひいたそあやまちすなといひけれ共ちか
きものこそきゝつけけれごちんはこれをきゝつけ
ずたゝをしにをしてわたるほどにせんぢん二百
余騎おしおとされ水におほれてうせにけり其後
源平たかひにはしの左右のつめにうつたつて矢
あはせす源氏の方には渡辺とうの射る矢そ物には」四七オ

つよくとをりける三位入道はちやうけんのひたゝ
れにしなかはおとしのよろひをきゆみをつよくひ
かんとてわざとかふとはき給はすちやくし伊豆の
かみなかつなはこんぢのにしきのひたゝれにくろ
いとおとしのよろひをきけふをさいごとたゝかは

むとてこれもかぶとはきさりけり五ちゐんのたじ
まはむくらんぢのひたゝれにひおとしのよろひを
いくわがたうつたる五まい甲のおをしめしらゑの
大なぎなたのさやをはつしはしのつめにすゝみ
出てむかひのきしよりさしつめひきつめさん〳〵
にいけるにあがる矢をはついくぐりさがる矢をは
おどりこえむかふてくる矢をはなぎなたにてきつ」四七ウ

て落すそれよりしてそ矢切のたじまとは申ける
つゝゐのじやうめうめいしゆんはかちのひたゝれ
にくろかはおとしのよろひをきくわがたうつたる
五まい甲のおをしめいかもの作の太刀をはき廿四
さいたる大中くろの矢おひぬりごめとうのゆみ
にこのむしらゑの大なぎなたをそとりそへたるはし
のつめにすすんで大おんじやうをあけて物その者
にてはなけれとも宮の御かたにつゝゐのしやう
めうめいしゆんとておんじやう寺におゐてはその
かくれなし平家のかたに我と思はむ人々はすゝめ
やむかへ見参せんとて矢たはねとひてをしくつろ
げさしつめひきつめさん〳〵にいけるに矢には　」四八オ

にかたき十二騎射おとし十一騎に手おふせたれは
ひとつはのこつてゑびらに有さて弓をもからと
なげすてゑびらをもとひて川へなげいれつらぬき
ぬいてはだしになり甲のおをそつよふしめけるか
たき味方あれはいかにと見る所にはしのゆきげた
をさらさらとはしり渡る人はおそれてわたらぬを
じやうめうが心ちにはたゝ一条二条の大路とこそ
はふるまひけれまづむかふかたきを長刀にて四人
切ふせ五人にあたる時長刀うちおつてすてゝけり
次に太刀をぬひて切けるが三人きりふせ四人にあ
たる時あまりにかふとのはちにつよう打あて目ぬ
きのもとよりちやうどおれくつとぬけて川へざぶ」四八ウ

いりにけるたのむところはこし刀ひとへにし
なんとのみそくるひけるこゝにぜうゑんばうのあ

じやりきやうしうが下ほうしに一来ほうしとて
しやうねん十八さいになりけるがむくらん地のひ
たゝれにもよぎのはらまきをき三まい甲のおを
しめうちものぬいてかたになけかけはしのゆき
げたをさら〳〵とはしりわたるにじやうめうは
たつたりよぐべきやうこそはなかりけれ爰をせん
とゝたゝかひけるしやうめうかかふとのてつさき
に手うちかけあしう候そじやうめうばうとて肩を
ゆらりとおどりこえてそたゝかひけるしやうめう
は一らいをうたせしとつゝく一らいはかたきのな」四九オ

かにわつて入さん〳〵にたゝかひぶんどりあま
たして我身もうちじにしてけりそのまにしやう
めうははしのゆきげたをはう〳〵びやうどう院
のしばに帰りものゝくぬぎをきよろひにたつたる
矢目をかぞふれば六十三うらかく矢は五所なりさ
れともいた手ならねばかしらをつゝみじやうゑを
きゆみきりおつてつえにつきあみたふ申て南都の

かたへそまかりける其後じやうめうかわたつたる
を手本にしてかたき味方はしのゆきけたをはしり
わたり〳〵せうぶをすとをきをはゆみにて射ちか
きをば太刀にてきるくまでにかけてとるもあり
とらるゝもありひつくんでさしちかへて河へ入者」四九ウ

もありはしのうへのいくさ火いづるほどにぞみえ
たりける侍大将かづさのかみたゝきよ大将軍の御
まへに参つて申けるははしのうへの軍火い
つる程にみえて候今は川をわたさんとするにて候が
折節五月雨のころにて水かさはるかにまさりた
りければよどいもあらひ河内ぢへやまはり候へき
と申ける所にこゝに下野の国の住人あしかゞ
の太郎としつなが子に又太郎たゞつなとてしやう
年十七さいになりけるかくちばのあやのひたゝれ
にもよきおとしのよろひをきくわかたうつたる五
まいかふとのおをしめあしじろの太刀をはき廿四
さいたるきりうの矢おひしげとうの弓もつてれん」五〇オ

ぜんあしげなる馬のふとうたくましきにきんぶく
りんのくらおひてのつたりけるかすゝみ出て申
けるはあしうも申させ給ひたるがづさどのかな
よといもあらひ河内路をばてんぢくしんだんの武
士かまいつてわたすへきかそれもおもふに我等
こそわたさんずれ目のまへなるかたきをのばし
奉つて南都へいれまいらせなば吉野とつかはの御
せいか参りてはいよ〳〵味方の御大事なるべし東
国にとね川と申す大河ありこか長井のわたりと
てともに大事のわたりありせんねんちゝぶと
あしかゝ中をたがひ合戦を仕候ひしにあし
かゞ新田の入道をかたらふて大手はこが長井の」五〇ウ

わたりすきのわたりへは新田の入道からめ手に
まはり候ひしにすきのわたりにいくらもよういし
たりし舟ともをちゝぶが方よりわられて新田
の入道の申しは川をへたゝてたるいくさにふねがな
ければとてふちせをきらふやうやある水におぼ
れてしなばしねいざわたらんとて大せいが馬いか
だをつくつてわたせはこそとね川をも渡しけめ
此川のていを見るにとね河にはいくほとまさ
じをとらじなどのばらいざわたらんとてたつな
かいくり大せいかまつさきにこそうちいれたれ
つゞくつはものたれ〳〵そ大ご大むろふかず山かみ
なはの太郎ひろすみさぬきの四郎大夫小野寺の」五一オ

せんじ太郎へやこの七郎らうとうにはとねの
六四郎きりやた五郎うぶかた次郎大おかの安五郎
をさきとしてつかうそのせい三百余騎くつばみ
をならべてうちいれたりあしかゞあぶみふんはり
ついたちあがり大おんじやうをあけて下知しける
はつよからん馬をは上手にたてよよはからん馬
をは下手にふせよ馬のあしをよはん程はたつなを
くれてあゆませよはつまはかいくつておよかせよ
さがらん武者は弓のはずにとりつかせよさきなる
馬のおに取つけくらつぼに水しとまばさうづに

のりさかつてむまにはよはく水にはつよくあたる
へしくらつほにのりさだまつてあふみをつよくふ」五一ウ
め馬のかしらしつまばひきあげよいつたふひいて
ひつかづくな河中にて弓ひくなかたき射る共あひ
引すな甲のしころをかたぶけよいつたふかたぶけ
てへんいさすなかねにわたひてあやまちすな水
にしなうてわたすべしわたせや〳〵と下知し
つゝ三百余騎を一騎もながさずさつとわたひてむ
かひのきしにうちあけたり

みやのさいご

其後あしかゞ高きところにうちあかりむちにて
よろひの水なでくだしあぶみふんはりついたちあ
がり大おんじやうをあけて是はむかしてうてきを
たいらげてけいしやうかうむつたりしたわら藤太」五二オ
ひでさとに十代のはつよう下野の国の住人あし
かゞの太郎としつなが子太郎たゞつなとて
しやう年十七さいにまかりなるかやうにむくはん
むゐなる者のみやにむかひ奉てゆみをひき矢を
はなつ事みやうけんにつけて其おそれすくな
からす候へ共ゆみも矢もみやうがの程も平家太政
の入道殿の御身のうへにそ候らん宮の御かたに我
と思はん人々はすゝめやむかへげんざんせんとて
びやうどうゐんのしばにおしよせ火いつるほど
にそたゝかひける是をはじめとして二万八千余騎
の兵ともみなうちいれ〳〵渡しければさしもに
はやき宇治川なれとも馬人にせかれて水はかみ」五二ウ
にそたゝへたるをのづからはつるゝ水にはなん
にもたまらすをしながさる其中に伊賀伊勢の兵六
百余騎馬いかだをしやぶられ水におぼれてなかれ
けりもよぎひおとしあかおとし色々のよろひ甲
のうきぬしづみぬなかれけるはかみなみ山の紅葉
ばのみねのあらしにさそはれて立田の川の秋の
くれゐせきにかかつてなかれもやらぬにことなら

ずひおとしのよろひきたりける武者三人宇治のあじろにかかつてゆられけるを伊豆のかみ見給ひて

伊勢武者はみなひおとしのよろひきて
うぢのあじろにかゝりぬるかな

これは日野の源三鳥羽の源六黒田の五平四郎と申」五三オ

ものなり中にもくろ田はふるつはものなりければ
ゆみのはずを岩のあひにねぢたて我身もあかり
残る二人をもたすけけるとそ聞えしさる程に
三位入道は味方のいくさまけ色にみえしかば
かなはじとや思はれけん若大衆あく僧とも廿余人
つけ奉つて宮をば南都へさきたて奉り我身は子
共らうじう残とゝまつてふせぎ矢射けり三位入道
のじなん源大夫の判官かねつなはあか地のにしき
のひたゝれにくろいとおどしのよろひをきくわ
がたうつたる五まいかぶとのおをしめいか物作の
太刀をはき廿四さいたる大中ぐろの矢おひぬりご
めとうのゆみにしらゑの大長刀のさやをはついて」五三ウ

父の三位入道殿にかかりけるかたきに返しあわ
せ〳〵たゝかはれける所にかづさのかみただきよ
よつひいて射ける矢に内甲をしたゝかに射させて
ひるむところを上総守がわらは落やうて源大夫の
判官とむずとくむ判官手はおはれたりけれともき
こゆるしたゝか人にておはしけれはとつておさへ
わらはかくびかききつてなげのけおきあからん
とし給ふところをかづさのかみがらうどうあまた
落あひて源大夫の判官のくびをとる三位入道この
よしを見給ひてよろづこゝろぼそくや思はれけん
弓矢になつつうち物になつつたゝかはれけるが
かたき四五騎切ておとし我身も弓手のひざぐちを」五四オ

射させていた手なりけれはびやうとうゐんのしば
に帰りものゝぐぬきおき渡辺の長七となふをめし
てはや〳〵なんちかたきの手にかけでわかくひ
うてとの給へばとなふしうの御くびたまはつつ共
存候はす御じかいだにも候はゝ其後こそ御くび給り

候はめとなみだせきあへず申たりけれは三位
入道さらばとてにしにむきかうしやうにねん
ぶつ数百へんとなへ給ひけるがねんふつをとゝめ
さいごのことはぞあはれなる
　むもれ木の花さくこともなかりしに
　　身のなるはてそかなしかりける
さて太刀のきつさきをはらにおしあてうつぶしに　」五四ウ

ふしつらぬかつてぞうせられける今年は七十五
にそなられけるかならすそこにて歌よむきには
あらね共わかふよりあながちにすかれたりければ
さいごまでも忘さりけりとあはれ也となふなく〳〵
御くびをたまはつてひたゝれにつゝみ大きなる
いしにくくりあはせて宇治川のふかき所にしつめて
けりさる程に三位入道のちやくし伊豆のかみなか
つなははしの上にてたゝかはれけるかかたき七八
騎切ておとし我身もいた手おひけれはびやうとう
ゐんのしばに帰り物のぐぬきじがいしてこそ
うせられけれ其くびをは下河べの藤三郎きよちか
とつてひやうとう院のつり殿のしたへそなげいれ　」五五オ

たる六条の蔵人仲家その子蔵人太郎仲光は大せい
の中にわつて入さん〳〵にたゝかひかたき四五騎
きつておとし一所にうちじにしてけり此くらんど
と申は故六条の判官為義か次なんこたてわきの
せんじやうよしかたがちやくし木曾のくはんじや
にはあになりけり三位入道ようせうよりふちして
くらんどにもなしたりしかばそのおんをわすれじ
と今度同心してうちしにしたりけるこそあはれ
なれ中にも渡辺のきをうたきくちをはいかにも
していけとつて右大将殿のげんさんにいれんと
おもひけるにきをうさきにこゝろへてければ手
にもたまらすかけまいる大勢の中にわつて入西　」五五ウ

より東へ一わたり北より南へ一わたりとつてはか
へしわつてはとをりさん〳〵にたゝかひかたき

十五騎切て落し我身はふか手もうす手もおはす
してびやうどうゐんのしばにかへり三位入道のむ
くろのへんにちかつき日比は一所にと契り奉りし
事なれはとてはら十文字にかききつて同まくらに
ふしにけりゑんまんゐんのたいうげんかくはつり
殿にたつたりけるがなぎなたのえくきみじかに
取なし大せいの中にわつて入さん〳〵にたゝかひ
一方うちやふつてうらへつつと出川へざぶとぞ飛
入けるかたき味方あはやげんかくこそじがいして
けるはと申けるに物のぐをもぬがすぐそくひとつ」五六オ

もすてすして水のそこをくぐつてむかひのきしに
わたり付きだんにあかりなぎなたうちふりいかに
平家の人々是までは御大事かようとて寺のかた
へぞまかりけるひだのかみかげいゑはふるつはもの
なりければ今はさだめて宮は南都へそさきたゝせ
給ふらんとて五百余騎にておつかけ奉るあんの
ごとく光明山のとりゐの前にておつつき奉りさし

づめひきつめ射奉るにたが射る矢ともみえずしら
ばの矢一すちきたつて宮の御そばはらにたちけれ
はやがて御馬より落させ給ひけり平家の兵あまた
落あひてみやの御くび給りけり黒丸と申わらは
もうちじにすぎやうぶしゆんしうもうたれにけり」五六ウ

若大衆あく僧とも廿余人つき奉りたりけるがも
るゝは一人もなかりけりみな一所にてそうたれに
ける中にも宮の御めのと子六条のすけのたいう
むねのぶは天下第一の大おくびやう者なりけれは
宮はうたれさせ給ひしかともじがいをもせずうち
じにをもせで馬にまかせて落行ほどにむまは
よはしかたきはちかつくかなはじとやおもひけん
にいのがいけに飛入てうきくさひきかづき目
はつかに見出してそゐたりけるいけのはたをうち
過〳〵しける武者の中にはるかにひきさがつて
五百騎ばかりうちとをりけるかたきのなかを見け
れはじやうゑき給へる人のくびもなきをしとみの」五七オ

もとにかいてとをるたれなるらんと見奉るに
是そわかしうの宮にてわたらせ給ひけるわれしなば
御くはんにいれよと仰なりし小ゑだと聞えし御
ふゑもいまだ御こしにそさゝれたるやがてはしり
も出てとりつき奉らはやとはおもひけれともおそ
ろしければそれもかなはすたゞ水のそこにて
かはづと共にそなきゐたるかたきみなとをりて後
いけよりあがりぬれたる物ともしほりきてゆふべ
にをよんで都へいるにくまぬものこそなかりけれ
さる程に南都の大衆みやの御むかひに参りける
がつかう其せい七千余人せんぢんはこつにすゝめ
ばごぢんはいまだこうぶく寺の南大門にそさゝへ」五七ウ

たるされとも宮ははや光明山のとりゐのまへにて
うたれさせ給ぬと聞えしかは大衆ちからをよばず
なみだをおさへて引かへす今五十町があひだを
待つけさせたまはすしてうたれさせ給ひたる宮の
御うんのほどこそうたてけれ

わかみやの出家

さる程に平家はみやならひに三位入道伊豆のかみ
以下の兵五百余人うつとつてその日の夜に入て
都へ入平家のゆかりの人々いさみのゝしり給ふ事
なのめならず中にも三位入道のくびは大きなる
いしにくくりあはせて宇治川のふかきところに
しづめたんなればなかりけり伊豆のかみなかつな」五八オ

のくびをばびやうどうゐんのへつたうつり殿の下
より取出てまいらせけり其外子共のくひをはみな
あそこ爰よりたつね出さる高倉の宮の御くび見
しり奉つたる者そなかりけるてんやくのかみさだ
なりが御りやうぢの御為にとてつねはまいりたり
ければこれそさだめてみしり奉つたるらんとて
めされけれともげんじよらうとてまいらす一とせ
宮の御かほにあしき御かさの出来させ給ひたりし
を此さだなりがやう〳〵にりやうぢ申てこそ今
までもあんおんにはわたらせ給ひしか今度あへ

なふうち奉りけるこそあさましけれ去程に伊与の
かみもりのりのむすめ三位のつぼねとて八条の女　」五八ウ
院にさふらはれけるを宮つねはめされけれはうち
つゞきみやたち三所出来させ給けり是ぞさだめて
見知り給ひたるらんとてよびいだし奉るこの女房
あるくびを一目見給ひてなみたにむせはれけるに
そ宮の御くびとはしりてける此三位のつぼねをば
なのめならす女院御いとおしみおはしけれは
御子の宮たちをもわか御子のごとくおほしめされ
てつねは御衣の御ふところにてそたて参らつさせ
給ひけり中にも今年七さいにならせ給ひける
若宮のわたらせ給ひけるを入道相国きゝ給ておとゝ
いけの中納言よりもりのきやうをもつて若宮とう
〳〵いたし参らつさせ給ふへきよしを八条の女院に」五九オ
申されたりけれはにようゐんいさとよそれはさ
やうの事の聞えつるあかつきかためのとの女房
かこゝろをさなく取奉て行方しらすうせぬる也
とそ仰ける中納言六波羅へ帰り参つてこのよし申
されたりければ入道大きにいかつて何条その御所
ならではいつくに渡らせ給へき其儀ならは御所
中をさがしたてまつれとそのたまひけるが中納言又
にようゐんの御所にまいつて此よし申されたり
けれはにようゐんなのめならすむつからせおはし
ますこのよりもりのきやうと申はにようゐんの御
めのと持明院の宰相殿にあひくせられたりけれは
日比はさしもむつましう思食れけれとも今此わか　」五九ウ
みやの御事申されけれはいつしかあらぬ人の
やうにうとましうそおほしめされけるわかみや申
させ給ひけるは是程の御事にをよび候うへは終
にのかれ候ましたゝとう〳〵出させおはしませ
と申させ給ひけれは女院いとおしや人の七八は
いまだ何事をもきゝわかぬほどそかしわれからに
大事の出来たる事をあさましうおほしめして只

とく出すべしとの給ふ事のいとおしさよなにしに
か此六七年手ならし奉つて今日はかゝるうきめ
を見る事よとて御なみたせきあへさせ給はす御
母三位のつほねの御事は中々申にをよはす
によくはんたちめにわらはにいたるまでみななみた」六〇オ

を流し袖をぬらさぬはなかりけりさてしもある
べきならねばなく〳〵御きぬきせ奉り御ぐしかきな
てゝ出しまいらつさせ給ふにもたゞゆめとのみそ
おほしめされける中納言も岩木ならねは世にも
あはれに思はれけれとも若宮うけとりまいらせて
御くるまにのせ奉りなく〳〵六波羅へくそくし
たてまつらる前の右大将むねもりのきやう此若宮
を見奉てあはれに思まいらせられけれは父のぜん
もんの御まへにおはして前世の事にて候やらん
此宮を見奉るにあまりにいとをしう思ひまいらせ
候あはれ此わかみやの御いのちをむねもりにたひ
候へかしと申されけれは入道さらばやがて御出家」六〇ウ

せさせ奉る後には東寺の一の長者安井の宮の
大僧正道高とぞ申ける又ならにも一所わたらせ
給ひけり是をば御めのと子の讃岐のかみしげひで
御出家せさせ奉りくし奉つて北国に落下たりし
か木曾これをはわか主にし奉らんとてとり奉て越
中の国みやさきといふところに御所しつらふ
て出き奉る其後木曾上落の時くそくし奉て都へ
上りげんそくせさせたてまつるさてこそげんぞく
の宮とも申又は木曾が宮とも申き後にはさがの
へん野よりといふところにわたらせ給ひけれは人
野よりのみやとそ申ける扨もせうなごんこれなが
は宮をば見そんじ奉りたる物かな中ころとう」六一オ

じやうと聞えしさう人は宇治殿大二条殿をは三代
のくわんはく御年八十と申たりしにたかはす
そつの内のおとゞをはるざいのさう渡らせ給ふと
申たりしもたがはすしやうとく大子しゆじゆん
天皇を見参らつさせ給ひて君はわう死のさうわた

らせ給ふと申させ給ひたりしかは馬子の大臣
にころされさせたまひけりむかしはさせるさう人
としもなけれともさも然べき人はみなかくこそ
ゆゝしうわたらせ給ひしに是はせうなこんこれなか
があやまりなりとそ人申けるかの兼明しんわう
くへいしんわうはけんわうせいしゆの御子にて前
中書わう後中書わうとてともにめてたふわたら」六一ウ

せたまひたりしかともいつか御むほんおこさせ
給ひたりし後三条の院の第三の王子すけひとの
しんわうと聞えさせ給しは御こゝろもかうに御
さいかくもゆゝしうわたらせ給ひしかはしら河の
ゐんいまだ春宮の御時御位の後はこのみやを位
につけまいらつさせ給へと後三条の院御ゆいせう
有しかともしら川の院何とかおもひ参らつさせ
給ひけん終にくらゐにもつけまいらつさせ給はす
さればその御こゝろをなくさめまいらせんとにや
すけひとのしんわうの御子に源氏のしやうをさづ
けまいらつさせ給ひてむゐより三位になされや
かて中将になしまいらつさせ給ひけり一世の源氏」六二オ

のむねより三位になる事はむかしさがの天皇の御
子やうゐんの大納言さだむのきやうの外は承り
及はす花そこの左大臣殿の御事なり

三井寺ゑんしやう

おなじき廿四日ぢもくおこなわれて前の右大将む
ねもりのきやうの子息侍従きよむねしやう年十
二さいになられけるか三位して三位のじじう
とそ申ける父のきやうはこのよはひにてはわづか
に兵衛のすけにてこそおはせしにさこそ代をとる
人の子ならんからにおそろしとぞ人申ける是は
源氏のもちひと三位入道以下つゐたうのしやうと
ぞきこえしおなしき廿五日源のもちひと三位入道」六二ウ

以下てうぶくの法うけ給はつておこなはれたりし
貴僧高僧たちにけいじやうおこなはれけり此源の

もちひとゝ申は高倉の宮の御事なりまさしう
一院第二の御子にてわたらせ給ひけるに九重のうち
をおひいだし奉てうしなひ奉るのみならすほん人
にさへなしまいらせぬる事こそくちおしけれ
日比は山門の大衆いさゝかの事もあればみたりか
はしきうつたへ仕るが今度はおんびんのきを存し
ておともせすしかるに南都三井寺にはあるひは宮
をふちし奉りあるひは御むかひに参る是ひとへ
にてうてきなりとてならをも寺をもせめらるべし
とそ聞えし平家さらばまづおんじやう寺をせめよ」六三オ

やとて大将軍には左兵衛のかみとももりふく将軍
にはさつまのかみたゞのり侍大将には越中の
せんじもりとし次郎兵衛もりつきかづさの五郎
兵衛たゞみつをさきとしてつかう其せい一万余騎
同き五月廿七日おんじやう寺へはつかうせられ
けりてらにも大せき小せきほり切てかいたてかき
さかもぎひいて待かけたり卯のこくより矢あはせ
して一日たゝかひくらすふせぐ所の大衆ほうし
ばら三百余人うたれぬ夜軍に成てくらさはくらし
くわんくん寺中にせめ入て火をはなつやくる御所は
ほんがく院しんによゐんじやうきゐん大かくゐん
けおんゐんふけん院しやうりうゐんこんかうわう」六三ウ

だうけいそくばうけうだいくわしやうのほんばう
并に御本尊ごおうせんじんのしやだん八間四めん
の大かうだうしゆろうきやうざう二かいのろう門
くはんぢやうだうすべてだうじやたうべう六百三
十七宇大津のうらの西のさい家二千八百五十三宇
地をはらふ其中にこんたう一宇やけ残りけるこそ
ふしぎなれちせうの渡し給へる一切きやう七千余
巻ぶつざう二千余体たちまちにけふりとなるこそか
なしけれ法文しやうげうのやくるけふりにはぼん
てんわうのまなこもくらみしよてん五めうのたの
しみもこの時ながくばうじけんらう地神のむねも
いとゞこがれりうしん三ねつのくるしみもいよ〳〵」六四オ

さかりなるらんとぞみえし三井寺はこれ近江の
きたいりやうかわたくしの寺たりしを天武天皇
へよせ奉つて御ぐわんとなす本仏はかの御門の御
ほんそん正身のみろくとそ聞えさせ給ひしかる
をけうたいくわしやう百六十年おこなふてのち
ちせうだいしにふぞくし奉るとしたてんじやうま
にほうてんよりあまくだらせ給ひてはるかにりう
げ下しやうのあかつきをまたせ給ふとこそ聞つる
にこはいかにしづる事ともそや天知てんむ持統
三代の御門の御うぶゆをめされたりしによつて
こそ三井寺とは名付られけれかく目出度かりし
せいせきもいまはなにならすけんみつしゆゆに」六四ウ

ほろびてがらんさらにあともなし三みつのだう
ぢやうもなけれはしんれいのひゞきもたへて一
けの仏前もなけれはあかのをともせさりけりしゆ
くらうせきとくのめいしはぎやうがくにわかれ
しゆほうしやうせうの弟子父きやうげうにこそ
わかれたれ寺のちやうりゑんけいほうしんわうは
てんわう寺のへつたうをとゝめらる其外そうがう
十三人けつくはんせられて検非違使にあづけらる
あくそうともはつゝゐのしやうめうめいしゅんを
さきとして三十四人流されけりかゝる天下のみたれ
国土のさはきたゝ事ともおほえす平家の世の末
になりぬるぜんべうやらんとそ人申ける扨も三位」六五オ

入道よりまさはよしなきむほんをこされたり

ぬゑ

そも〳〵源三位よりまさ入道の一ごの高名とおほし
き事おほき中ににんへいのころほひこのゑのゐん
御ざいゐの時主上よな〳〵おひへさせ給ふ事有
けりうげんの高僧貴僧におほせて大法ひほうを
じゆせられけれともそのしるしさらになし御なふ
はうしのこくばかりの事なるに東三条のもりの
かたより黒雲一むら立来て御殿のうへにおゝへば
かならずおびへさせ給ひけり是によつて公卿せん

ぎあり去ぬるくわんぢのころほひほり川の院御
ざいゐの時しかのごとくしゆしやう夜な〳〵おひ　」六五ウ
へたまきはまらせ給ふ事有けり其時の将軍義家
のあつそん南殿の大床に候はれけるが御なうの
こくげんに及でめいけんする事三度の後かう
じやうにさきのみちのくにのかみ源のよしいゑと
名乗たりけれは聞人身のけよだつて御なうはお
こたらせ給ひけり然はすなはちそのれいにまかせて武
士におほせてけいごあるへしとて源平両家の兵共
の中をえらせられけるによりまさをゑらび出され
たり其時はいまだひやうごのかみとぞ申けるより
まさ申けるはむかしよりてうかにぶしをおかるゝ
事はいちよくのともがらをしりぞけぎやくほん
の者をほろぼさんが為也目にもみえぬへんげの物　」六六オ
仕れと仰下さるゝ事いまだ承をよはすと申な
からちよくせんなれはめしにおふしてやがて参
内すよりまさこのみ切たる郎等とうたうみの国の
住人いのはやとにほろのかざきりにてはいだる矢
おふせてたゞ一人そぐしたりける我身はふたへの
かりきぬに山鳥のおをもつてはいだりとける（けるとカ）がり
矢二すちしげどうの弓にとりそへて南殿の大ゆか
にしこうすよりまさ矢を二すぢ取そへける事はが
らいのきやうその時は未させうべんにておはし
ましけるがへんげの物つかまつり候はんずるじん
はよりまさそ候とゑらひ申されたるあひた一の
矢にへんげのもの射そんする程ならば二の矢には」六六ウ
まさよりへんのしやくびのほねをいんとなりあん
のごとく日比人の申にたかはす御なうのこくげん
に及で東三条のもりのかたより黒雲一むら立来て
御殿のうへにたなひいたりよりまさきつと見あけ
たればくもの中にあやしき物のすがた有是を射
そんする程ならは世に有べしとは思はざりけり
さりながらとがり矢取てつがひ南無八幡大ぼさつ

と心中にきねんしてよつひいてひやうどはなつ
手こたへしてはたとあたるえたりやをうと矢さけ
びをこそしたりけれ矢立ながら殿上へどうとをつ
いのはやとつつとより落るところをとつておさへ
てつゞけさまに九刀にさいたりけるそのとき上下」六七オ

手々に火をともいてこれを見給ふにかしらは
さるむくろはたぬきおはくちなわあしてはとらの
すがたにてなくこゑぬゑにそにたりけるおそろし
なともをろかなり主上御かんのあまりにしゝわう
といふ御剣をよりまさにこそくだされけれらい
てふのさふたまはりついて御殿のきざはしをなか
らはかりおりくだらせ給ひてよりまさにたまはし
けるにころは卯月十日あまりの事にてもや候
けんくわつこうのくもゐに二こゑ三こゑをと
つれてすぎければ左大臣殿
　ほとゝきす名をも雲井にあくるかな
と仰られかけたりけれはよりまさかしこまつて承」六七ウ

もとよりこのむ事なれは月をそばめにかけて
　弓はり月のいるにまかせて
と仕つて御けんをたまはつてまかりいづ其後く
だんのへんけの物をはうつほ舟に入て西のうみ
へぞなかされける其時のけいじやうには丹波の五
かのしやうをそ給りける又二条のゐんの御宇おふ
ほうのころかぬゑと申すけてうが夜な〳〵ぢん
どうにないてしば〳〵しんきんをなやまし奉る
せんれいにまかせて又よりまさをそめされける
よりまさ申けるは源平両家の中よりめしぬかれ
てまいる身の面目とは申なから射おうせん事
ふでう射そんぜん事けつでうなりたゞいまいそん」六八オ

する程ならば弓きりおつてさんりんにましはる
べしさるにても八幡大ぼさつあはれませ給へと心
中にきせいして南殿にしかうすころは五月
廿日あまりの事なれは五月雨さへにかきくれ
て目さすともしらぬやみなるにくたんのけてうか

たゞ一こゑをとつれて二こゑともなかさればいつくにありともしりがたしすがたもかたちもみえされはいつくを矢つほとさだめかたしよりまさはかりことにかぶらをとつて打つがひよつひいてひやうどいるぬゑかぶらのをとにおとろひてこくうにしばらくひゞめいたりつきに小かふらをとつて打つかひよつひきしばしたもつてひいふつとそ」六八ウ

落したる御なうやがておこたらせ給ひけり主上御かんのあまりに御衣を一りやうよりまさにこそくだされけれ今度はおほいの御門の右大臣きんよしこう給はりついで御てんのきざはしをなからばかりおりくたらせ給ひてよりまさにかつけさせらるとてむかしのやうゆうは雲の外なるかりを射いまのよりまさは雨の中にぬゑを射えたりとぞ仰けるやがて右大臣殿

五月やみ名残あらはせるこよひかな

と仰られかけたりけれはよりまさかしこまり承り

たそかれときもすぎぬと思へは

とつかまつて御いをかたにうちかけてまかりいづ」六九オ

よりまさ弓矢をとつて天下に名をあくるのみならず歌道にもゆふにやさしかりけりときんちうさゞめきあへりその時のけんしやうにはわかさのとうみや川をそたまはりけるこのまよりさのきやうと申はつのかみらいくわうに五代のそん前の三河のかみよりつなのまごひやうごのかみなかまさの子なりけり保元にさきかけたりしかともさせる御おんにもあづからす平治におほくのしんるいをすてゝ味方に参じたりしかともおんしやう是おろそかなり重代のしよくなれば大内の守護うけたまはつて年ひさしされともせうてんをはゆるされざりしかばはるかに年たけよはひかたぶひて　」六九ウ

後しゆつくわいの和歌一しゆようでこそせうでんをはゆるされたりしか

人しれずおほうち山の山もりは　（遊紙）
　木かくれてのみ月を見るかな　」七一オ
とつかまつつて四位してしはらく候ひけるが又
三位をこゝろにかけて　（遊紙）
　のぼるべきたよりなければ木のもとに
　しゐをひろひて世をわたるかな　」七一ウ
と仕つて三位になされ出家して法名しやうれんと
そ申ける丹波の五かのしやうわかさの藤宮川伊豆
の国をも知行して子息なかつなじゆりやうに
なしさてあるべかりし人のよしなきむほん思ひ　」七〇オ

たち宮をもあへなふうしなひ奉り我身もしそんも
悉ほろびぬるこそあさましけれ

平家物語巻第四終　」七〇ウ

八坂板平家物語　共十二冊　」表紙裏

（遊紙）　」一オ

（遊紙）　」一ウ

平家物語巻第五目録

みやこうつし
月見
もつけ　付大ばはや馬
てうてきそろへ
かんやうきう
もんがくくはんじんちやう
もんがくくながされ
伊豆ゐんぜん
ふじ川
五節の沙汰　あい奈良ゐんしやう

」二オ

（白紙）　」二ウ

平家物語巻第五

みやこうつし

治承四年六月三日福原へ行幸なるへしと聞ゆ此日比みやこうつりあるへしと聞えしかともたちまちに今朝の程とは思はさりしものをとて京中の上下さはきあへりあまつさへ三日とさだめられたりしが今一日ひきあけて二日になりにけりしゆしやうをさなふわたらせ給ふ時の御とうよにはぼこうこそまいらせ給ふに是は其儀なし御めのとそつのすけどのぞひとつ御こしにはまいられけるしやうくわうも御幸なるせつしやうとのをはじめ奉つて太政大臣以下けいしやううんかく」三オ

我も〳〵とぐぶせらる平家は太政入道を始て一門の人々みなまいられけり三日ふく原へいらせ給ふ入道相国のおとゝいけの中納言よりもりのきやう

のさんわうくわわうきよとなる四月より盛のきやう
いゑのしやうとて正二位し給ふ九条殿のをん子左
大将よしみちのきやうかかいこえられさせ給ひけ
りせうろくのしんのきんだちのぼんにんにかかい
こゑられさせ給事是はじめとそうけ給はる入道
相国やう〳〵思ひなをつて法皇を鳥羽の北とのを
出しまいらせてみやこへくはんきよなし奉られたり
しか共高倉のみやの御むほんによつて大きに
いきとをりふくはらへ御幸なし奉り四めんにはた」三ウ

いたしてくち一あけたる内に三間のいたやをつ
くつておしこめ奉るしゆごのぶしには原田の大夫
たねなをはかりぞ候ひけるたやすく人の参かよふ
事もなければわらんべはふくはらのろうの御前
とそ申けるきくも世におそろしうあさましかりし
御事なりさるまゝには法皇ばんきの御まつり
ことをばつゆしろしめさずたゝ山々てら々しゆ
ぎやうして心のまゝになくさまばやとそ仰ける

入道相国のあくぎやうにおゐてははやみなきはま
りぬくわんばく流し奉て我むこをくはんはくにをし
なしあまつさへ一院第二の御子高倉の宮をば九重
の内をおいいだし奉つてうしなひ奉るのみならず」四オ

はんじんにさへなしまいらせぬる事こそくち
おしけれ今残るところとては都うつしばかりなり
けれはかやうにし給ふにこそとそ上下さゝやき
あへりけるみやこうつしはこれせんじようなき
にあらずしんむてんわうは地神五代のていひこ
なきさだけうがやふきやわせずのみことの第四の
王子御母はたまよりひめかい神のはじめ也天神七
代地神五代神の代十二代のあとをうけにんたい
百わうのていそなりかのとのとりの年ひうがの
国みやさきのこほりにしてくわうわうのほうそを
つき五十九年といつしつちのとのひつじの
年十月にとうせいしてとよあしはら中つ国に　」四ウ

と、まつて此ころ大和国と名付たるうねひの山を
てんしてていとをたて梶原の地をきりはらつて
きうしつを作り給ふ是をかぢはらのみやと名付ら
れけりしかつしよりこのかた代々の御門のみやこ
を他国たしよへうつさるゝ事三十度にあまり
四十度にをよへりじんむてんわうよりけいかう天
わうまで十二代はやまとの国こほり〳〵にみやこ
をたてゝたこくへはうつされす然るをせいむてん
わう元年に近江の国にうつつてしがのこほりに
都をたつちうあいてんわう二年に長門の国に
うつつてとよらのこほりに都をたつ其国のかの
都にして御門かくれさせ給ひしかはきさき神宮　」五オ

皇后御ゆつりをうけさせ給ひて女体としてしん
らはくさいかうらいけいたんまてせめしたがへさ
せ給ひけりいこくのいくさをしづめさせ給ひてき
朝の後筑前の国みかさのこほりにして王子御誕生
ありそれよりしてそそのところをうみのみやとも
申なる御くらいの後はおうじんてんわうと申
きかけまくもかたじけなくまします八幡の御事是
なり其後神ぐうくわうこうはやまとの国にうつ
つていわねわかざくらのみやにおはしますをう神
てんわうは同国かる島明宮にすませ給ふにんとく
天皇元年につの国なんはにうつつて高づの
みやにすませ給ふりちうてんわう二年に又　」五ウ

大和国にうつつてとうちの里にすませ給ふ反正
天皇元年に河内の国にうつつてしばがきのさとに
みやいし給ふいんぎようてんわう四十二年に又
やまとの国にうつつてとぶとりのあすかのみやに
すませ給ふゆうりやく天皇廿一年に同き国はつ
せあさくらにみやこをたつけいてい天皇五年
に山しろの国つゞきにうつつて十二年其後を
とぐにすませ給ふせんくわてんわう元年に
又大和国にうつつてひのくまの入野のみやにす
ませ給ふきんめいびたつようめいしゆじゆんすい

こじよめいくわうきようまて七代は同き国に都を
たてて他国へはうつされずしかるをかうとくてん」六オ

わう大くわ元年につの国ながらにうつつてとよざ
きのこほりにみやこをたつさいめいてんわう二年
になを大和国にうつつておか本の宮にすませ
給ふてんちてんわう六年に近江の国にうつつ
て大津の宮を作給ふてんむ天皇元年になを大和国
にかへつておか本の南の宮にすませ給ふ是をきよ
み原のていと申き持統文武二代のせいてうは同
きくに藤原のみやにすませ給ふげんめいけんせい
しやうむかうけんはたいせいとくくわうにんま
で七代は同き国ならの都にすませ給ふ然をくはん
むてんわうゑんりやく三年十一月一日ならの
京春日の里より山城の国長おかにうつつて十年」六ウ

此都にすみ給ふ同き十三年正月三日大納言藤
原の小黒丸さんき左大べんきのこさひをつかはし
てたうこくかと野のこほりうたのむらをみせし
むるにりやうにんともにそうしていはくこの地の
体を見候にさしやうりううびやつこぜんじゆしや
くごげんむ四神さうをうの地なりもつともてい
とをもとむるにたれりよつてをたぎのこほりに
おはします賀茂の大明神に申させ給てゑんりやく
十三年十一月廿一日ながおかの京より今の平
安城にうつつてていわう三十二代せいざう三百
八十余歳の春秋を送りむかへてぞまし〳〵けるし
かつしよりこのかた代々の御門のみやこを他国」七オ

他所へうつされしかともかゝるせうちはいまだ
なしとてくはんむ天皇ことにしつし思食てまづ
長久なるべきしゆつとて大臣くぎやうしよたうの
さいじんに仰てつちにて八しやくのにんきやう
を作らせくろかねのよろひかぶとをきせおなしう
くろかねのきうせんをもたせてひがし山のみねに
西むきに立てそうつませられけるすゑの世にこの

みやこをたこくへうつすものあらはかならすしゆ
ごしんとなるべしとの御やくそくありけるされは
天下に事のおこんとて此つかかならすめいどう
す将軍がつかとていまにありくはむむ天皇は平家
のなうそにてそまし〳〵ける中にもへいあん　」七ウ

じやうと名つけてはたいらやすきみやことかけり
もつとも平家のあがむべきみやこそかしむかしさ
がの天皇の御時平城のせんてい内侍のかみのすゝ
めに依て世をみたらんとせさせ給ひしにみやこ
を他国他所へうつさんとせさせ給ひし時大臣く
きやう諸国のにんみん悉くおこつてそむき申
せしかば終にうつされてやみにき忝くも一天のきみ
ばんぜうのあるしだにもたやすくうつしえ給はぬ
都をなんそ太政の入道じんしんの身としてたやす
くうつされけるこそふしぎなれいかさまにも是は
しよこくのいぞくせめのぼり平家みやこのうちを
おい出されさんりんにましはるべきぜんへうか　」八オ

とそ上下さゝやきあへりけるあはれきうとはめて
たかりし都そかしわうじやう守護のちんしゆは
四方に光を和げれいげんしゆせうの寺々は上下に
いらかをならべたり百姓はんみんわつらひなく五
き七道もたよりあり人々の家々をはさんぬるなつ
賀茂川かつら河にこぼち入れいかだにくみうかへ
しざいそうくを舟につんでふくはらへはこびくだ
されけりけれははなのみやこもたゝなりに田舎と
なるこそかなしけれ辻々ほりきりさかもぎふさぎ
たりけれはくるまなんどのたやすくかよふ事も
なしたま〳〵ゆく人はみなにくるまに乗てみち
をへてこそとをられけれふるき都の内裏のはしら」八ウ

に何ものかしたりけん二しゆの歌をそかき付けり

百年を四かへりまでに過来にし
をたぎの里もあれやはてなん

さきいづるはるのみやこをふりすてゝ
風ふくはらのすゑそあやうき

されともふくはらには新都の事はじめあるへし
とて奉行のべんには蔵人の左小へんゆきたか
とうの右中へんみつまさ官人共あひぐしてたう国
和田の松原の西の野をてんじ九城の地をわられ
けるに一条よりはしめて五条まではありしか
ともそれより下はなかりけり行事くはん帰り
参つて此よしをそうし申たりけれはさらは播磨の」　九オ

印南野かなをたう国こや野かかなんと沙汰ありし
かともとみに事行へしともみえさりけりきう
とをはすでにうかれぬ新都はいまだ事ゆかすあり
としある人はみな身をうき雲のまよひとなしもと
そのところにすむ人はちをうしなつてうれへいま
うつりくる人はみな土木のわつらひをそなげかれ
ける中にも土御門の宰相の中将とうしんのきやう
の申されけるはいこくには三条のくわうろをひら
いて十二のとう門をたつといへりいはんや我朝は
五でうまであらんみやこになどか内裏をたてざる
べきとて五条の大納言くにつなのきやうのりんじ
にすあふの国を給はつてさとだいりさうしんせら」　九ウ

るこのくにつなのきやうと申はならびなき大福長
者にておはしけれは里内裏ざうしんせらるべき事
左右に及はすとは申ながらまづさしあたつて
行はるべき御けい大じやうゑをばさしをかれて
かゝる世のみたれのなかにせんとざうだいりすこし
もさうおうせずいにしへのかしこかりける御代
には内裏をはかやにてふきのきをだにもとゝのへ
られすたみのかまどのけふりのともしきを御らん
じてはかぎりある御つき物をもゆるされけりこれ
ひとへに国をたすけたみをはごくみ給ふに依て也
かのたうの太そうのりさんきうを作られしにたみ
のつゐゑをやはゞからせ給けんかわらに松おひ」　一〇オ

かきにこけむすまでりんかうなかりけるには
さをいかなそしやうくわのたいをたてれいみん

あらけしんあはうの殿をおこして天下みたるとも
いへりばうしきらすさいてんけづらずしゆうしや
かざらすいふくあやなかりける世もありけん物を
おそろし〳〵とそ人申ける

月見

同き六月九日ふくはらには新都の事はじめ
あつておなしき八月十日御むねあげ同十一月
十三日せんかうとそさだめられけるきうとはあれ
ゆけば今の都ははんじやうすあさましかりしなつ
もすぎ秋もなかばになりにけり福原におはしける」一〇ウ

人々は名所の月を見んとてあるひは源氏の大
将のむかしのあとをたつねつゝすまより明石のう
らつたひあわぢのなだをおしわたりゑしまかいそ
の月を見るあるひはしらゝふきあげ和歌のうら
住吉なにはえたかさご尾上の月のあけほのを
ながめてかへる人もありきうとに残る人々は伏見
ひろさわの月を見る中にも福原におはしけるご

徳大寺の左大将しつていのきやうは旧都の月を
見んとて入道相国にいとまこひ八月十日あまり
にふるき都へかへりのぼられけるがみちすからも
名所〳〵の月を見給へりすゞめの松原みかげの松
いく田こや野の月を見る雲井にさらすぬのびきの」一一オ

たきのしらたまひかり合ていとゞさやけき月を
見るこれやこのもとめつかと名付しはかの島のほ
とりなりこひゆへ身をうしなひし二人のおとこの
はかとかやいなみのみなとのあけほのにきりたち
渡るなにはがたおとこ山の月かげはいはしみづに
やどるらん六田の夜はのむしのこゑいなばにそ
よぐ風のをと秋の山の紅葉の色心をくだくたより
となる大将きうとに帰り見給へは人々の家々をは
去ぬるなつ賀茂川かつら河にこほちいれいかだに
くみうかべしざいざうぐをふねにつんで福原へ
はこびくだされたりけれは何事もみなかはりはて
けりたま〳〵残る家々は門前草ふかくていしやう」一一ウ

つゆしけしよもぎがそまあさぢが原鳥のふしどと
あれはてゝたゞくわうきくしらんの野べとそ成に
ける今ふるきみやこの御名残とては近衛河原の大
みやの御前ばかりなり大将かれへまいらせ給ひて
ずいじんをもつて惣門をたゝかせらるれば内より
女房のこゑにてたそやこのよもぎうのつゆうちは
らふ人だにもまれなるところにとゝがむれば是は
福原より大将殿の御参りにて候と申す御さふらは
ばそう門はしやうのさゝれてさふらふそひんがし
の小門よりまいらせ給ふべしと申たりければ
大将さらばとて東の小門よりぞまいられける折節
大宮は月にめてさせ給ひてみなみのたいにして御」一二オ

びは御はちのをとあざやかにこそあそばされけれ
かの源氏の宇治の巻にはうばそくの宮の御むすめ
秋のなごりをおしみつゝびはをしらべて夜もすが
ら御心をしまさせ給ひしに有明の月の山のはより
出けるをなをたへずやおほしめされけんはちして

まねかせ給ひしも今こそ思食しられけれ大みや御
ばちさしおさめさせ給ひていかにや大将是へ〳〵
と仰けれは大しやう御前ちかふまいらせたまひて
やゝはるかに御物語あり其後大将待よひの小侍従
をよびいたさせ給ひてむかしいまの事どもよも
すからかたりそあかさせ給ひけるそも〳〵此女房を
待よひの小じじうとめされける事はある時大宮」一二ウ

侍従をめしてまつよひとかへるあしたはいづれか
あはれはまされるかと仰けれは侍従取あへす
　まつよひのふけ行かねのこゑきけは
　　あかぬわかれの鳥はものかは
と申たりけるに依てこそまつよひの小侍従とは
めされけれ大将はるかに小夜ふけ人しづまつてのち
やうでうねとりさう〳〵かれなんとすむしの思ひ
ねんごろなりといふらいゑいしてふるき都のあれ
ゆくやうを今やうにこそうたはれけれふるき都を
きて見れはあさぢが原こそあれにける月のひかり

はくまなくて秋風のみそ身にはしむとこれを二三
べんうたひすまされたりければ大宮をはじめまい」一三オ
らせて侍従以下の女房たちみな袖をそぬらされけ
る明けれは大将いとま申て福原へこそくだられ
けれ侍従大将の御名残をおしみ奉つてくるまよせ
まで立出御うしろをはる〳〵と見送り奉りなみ
だをおさへてとゞまりけり大将御供にめしく
せられたりける蔵人をめして侍従が何と思ひてや
らん世にもなごりおしげにみえつるになんちゆき
てよきやうにいひてこよかしとのたまひければ
蔵人はしりかへり是は大将殿の申せと候とて
　ものかはと君がいひけんとりのねの
　　けさしもなどかかなしかるらん
侍従とりあへす　」一三ウ
　またばこそふけゆくかねもつらからめ
　あかぬわかれの鳥のねそうき

蔵人帰り参り此由申たりければされはこそなんち
をはつかはしたりつれとて大将大きにかんせられ
けり其よりしてこそ物かはの蔵人とはめされけれ
　もつけ
都を福原へうつされてのち平家の人々ゆめ見もあ
しうつねはこゝろさわぎのみにしてへんげの物共
おほかりけり有夜入道のふし給ひたりける所に
一間にはゞかる程のもののおもて出来てのぞき
奉る入道ちともさはがすちやうどにらまへておは
しけれはたゞきえにきゑうせぬおかの御所と　」一四オ
申は新しうつくられたりけれはしかるべき大木
もなかりけるにある夜大木のたをるゝをとして
人ならは二三百人がこゑにてこくうにとつとわ
らふをとしけりいかさまこれはてんぐのしよいと
云さたにて夜百人ひる五十人のばんしゆをそろへ
ひきめのはんと名付てひきめを射させられけるに
てんぐの有方へむかふて射たるとおほしき時はを

ともせずない方へむかつて射たるとおほしき時は
とつとわらひなとしけり又ある朝入道相国ちやう
だいより出てつまとをおしひらきつぼのうちを見
給へは死人のどくろともがいくらといふ数もしら
ずつぼのうちにみち〳〵てよりあひよりのきころ」一四ウ

びあひころびのき中なるははしへまろび出はし
なるは中へまろび入おひたゝしうがらめきあひ
けれは入道相国人や有〳〵とめされけれとも折節
人もまいらすかくしておほくのどくろとも一つに
かたまりあひつぼの内にはびこるほどになつて
高さは十四五ぢやうもあるらんとおほゆる山のご
とくになりにけりかの大かしらにいきたる人のま
なこのやうに大の目ともか千万出きて入道相国を
はたとにらまへてまたゝきもせず入道ちともさは
がすちやうどにらまへて立れれはかの大かしら
あまりにつよふにらまれ奉てしもつゆなどの日に
あたりてきゆるやうにあとかたなく成にけり其上」一五オ

入道相国一のむまやにたてあさゆふひまなくなで
かはれける馬の尾に夜のまにねすみすをくらい子
をそうみたりけるこれ只事にあらす御うらある
へしとて神祇くわん七人のおんやうじをめして
うらないせらるれば重き御つゝしみとうらなひ申
この馬はさかみの国の住人大庭の三郎かげちか
が東八ケ国一の馬とて入道相国へまいらせたりけ
るとかやくろき馬のひたいしろかりければ名をは
もちつきとそいはれけるおんやうのかみあべのや
すちかこれを給はつてけりむかしも天知天皇の御
時れうの御馬のおに一夜のうちにねすみすをく
い子をうんたりけるにはいこくのけうぞくほうき」一五ウ

したりと日本きにはみえたり又源中納言がれいの
きやうのもとにめしつかはれけるせいしが見たり
ける夢こそおそろしけれたとへは大内の神祇くはん
とおほしき所にそくたいたゞしきじやうらう
たちあまたおはしてきじやうのやうなる事有し

にばつざなるじやうらうの平家の方人し給ひける
とおほしきを其中よりおつ立らるかのせいしゆめ
の中にあれはいかなるじやうらうにてまし〳〵候
やらんと、ひ奉ればいつく島の大明神とこたへ
給ふ其後ざしやうにけたかげなる御しゆくらううの
まし〳〵けるがこの日比平家のあつかりたりつる
せつとをは今は伊豆の国の流人前の右兵衛のすけ」一六オ

よりともにたばんするなりとそ仰けるその御かた
はらになを御しゆくらうのまし〳〵けるが其後は
我まごにたび候へとおほせらるゝとおほしくて是
を次第にとひ奉るせつとをよりともにたはふと仰
られつるは八幡大ぼさつ其後は我まごにたひ候へ
とおほせられつるは春日大明神かう申らうおう
は武内の大明神とこたへ給ふとおぼしくてゆめ
さめぬ是を人にかたる程に入道相国もれきゝ給て
源大夫判官すゑさだを以てがらいのきやうのもと
へそれに候ゆめ見のせいしいそぎこれへたび候へ
たつぬべき事ありとのたまひつかはされたりけれ
はかのゆめ見たりけるせいしやがてちくてんして」一六ウ

けり其後がらいのきやう入道相国のていにおはし
てまつたうさる事候はすとちんじ申されけれ
は其後は沙汰もなかりけり何よりも又ふしぎなり
し事には清盛こそいまだあきのかみたりし
時じんばいの次にれいむをかうむりていつく島の
大明神よりうつゝに給はられし銀のひるまきし
たる小長刀つねのまくらをはなたずたてられたり
けるかある夜にはかにうせにけるこそふしぎなれ
平家日比は朝家の御かためにて天下を守護せしか
とも今はちよくめいにもそむきぬればせつとをも
めしかへさるゝにやこゝろほそう聞えし中にも
高野におはしける宰相入道せいらい此事ともつ」一七オ

たへ聞てあははや平家の代はやう〳〵末に成ぬる
はいつく島の大明神の平家の方人し給ひけると云

はそのいはれありたゝしいつく島の大明神はしや
かつらりうわうの第三のひめみやなれは女神と
こそうけ給はれ八幡大ぼさつのせつとをよりとも
にたはふとおほせられつるはことはりなり春日
大明神の其後はわかまごにたひ候へと仰られける
こそこゝろへねたゞしそれも平家ほろひ源氏の代
つきなんのち大しよくはんの御すゑしつへいけの
きんだちの天下の将軍になり給ふべきかなとそ
のたまひける折節ある僧の来りたりけるか申ける
はそれ神明は和光すいしやくのはうべんまち〳〵」一七ウ

にましませはある時はぞくたいにもけんしある時
は女神ともなり給ふまことに此いつく島の大明神は
三明六つうのれいたいにておはしませばそくたい
とけんじたまはん事かたかるべきにあらず
とぞ申けるうき世をいとひまことの道に入ぬれは
ひとへに後世ぼだいの外は世のいとなみあるまじ
き事なれともぜんせいをきいてはかんじうれへ
をきいてはなげくこれみな人間のならひなり

付大庭はや馬

去程に同き九月二日さがみの国の住人大ばの三郎
かげちか福原へはや馬をもつて申けるは去ぬる
八月十七日伊豆の国の流人前の右兵衛のすけより」一八オ

ともしうと北条の四郎ときまさをつかはして伊豆
の目代いづみの判官兼高を八まきがたちにて夜
うちにうち候ぬ其後土肥土屋おかさきをはじめと
して三百余騎さかみの国いしはし山にたて籠て候
所にかげちか御方に心ざしを存る者共一千余騎を
いんそつして二十三日のとりのこくにおしよせてよ
もすからさん〳〵にせめ候し程に兵衛のすけわつ
かに七八騎に打なされ大わらはにたゝかひ成てと
いのすき山へにけこもり候ぬ明る廿四日畠山五百
余騎にて御方を仕三うらの大すけが子共三百余騎
源氏がたをしてゆゐこつぼのうらでたゝかふ畠山
いくさにまけて武蔵の国へ引しりそく其後畠山が」一八ウ

一ぞく河越いなげ小山田江戸かさゐそうじて七
だうの兵とも悉おこりあひつかうそのせい三千余
騎を相ぐして廿六日にみうらきぬがさの城におし
よせてせめたゝかふあひだ大すけ義明うたれ候ぬ
子ともまごともくりはまのうらよりふねにとり
のり兵衛のすけのあとをたづねてあわかづさへわ
たり候ぬとこそ申たれ

てうてきそろへ

さる程に福原には平家の人々こはいかにとてさ
はぎあへりされば都うつりもはやけうさめぬ入道
相国のいかられけるさまなのめならす若き公卿殿
上人はあはれさらは源氏かとふしてよせこよかし」一九オ

我うつ手にむかはんなんと云そはかなき其比福原
に候ひける東国の大名には畠山のしやうじ重能弟
小山田のべつたう有重うつの宮の左衛門ともつな
なり是等は折節大はんやくにてざい京す入道相国
かれら三人をめしてなんちらが子共は東国にあん
なれは源氏に定而同心すらんなとのたまへはこれ
らかしこまつて申けるは北条はしたしうなつて
候へばさやうの御事もや候らんじよの者ともは
いかてかてうてきが方人をば仕候べき只今きこし
めしなをさんする物をと申たりけれはけにもと
いふ人もありいや〳〵大事にをよびなんずと
さゝやくものもおほかりけり入道さらはなんぢら」一九ウ

きしやうもんにをよべりとのたまへはをの〳〵
畏てうけたまはり熊野のごわうを申をろしまつ
たう源氏に同心仕候ましきよしのきしやうもんを
かいて奉る入道此上は子細なしとてさしをかれ
けり入道のたまひけるはかの兵衛のすけよりとも
は去ぬる平治に父よしともがむほんによつていけ
とりにせられすでにちうせらるべかりつるをこ
いけのぜんにのたりふし宣ひしあひだしざい
をるざいにしゆする所なりしかるにそのおんを
わすれてたうけにむかつてゆみをひき矢をはなつ

にこそあんなれ神明三ほうもいかてかゆるし
給ふべきたゞいま天のせめかうむらんするよりとも」二〇オ

なりとそ宣ひけるたうじこそわうゐもむげに
かるけれむかしはせんじをむかへてよみしかば
かれたる草木にもはなさきみなり飛鳥もしたかひ
奉る中ころの事そかしゑんぎのせいたいしん
ぜんゐんに行幸成ていけのみぎはにさぎの
候ひけるを六位をめしてあのさきとつてまいらせ
よと仰けれはいかでか取べきとはおもひけれとも
りんげんなれはあゆみむかふさぎはねつくろひを
してたたんとすいかにせんじそまかりたつなと
仰すればさきひらみてとびさらずかれをいだいて
御前へ参りたりければ御門なのめならす御かん
成てなんちせんじにしたがひまいらせて参たる　」二〇ウ

こそしんべうなれやがて五位になせとて五位に
なさる今日より後さぎの中のわうたるへしと云

御ふだをあそばしてさきのくびにかけてそはな
たせおはしましけるまつたふ是はさき御ようには
あらずたゞわうゐのほどをしろしめさんがため
也きそれてうてきの始にはやまといわれひこの
尊の御宇四年きいの国名草のこほり高尾のむら
に一のちゝう有あし手ながく身みしかく力人に
すくれたりにんみんおほくがいせられしかはくはん
ぐんはつかうしてせんじをよみかけかつらの
あみをむすびて終にこれをおほひころすしかつ
しよりこのかた野心をさしはさんててうゐをほろぼ」二一オ

さんとせしもの大いしの山丸大山の王子大どもの
まとりもりやの大臣曾我のいるか山田のいし河文
屋の宮田伊予の親王たざいの小貳ひろつき左大臣
ながや右大臣とよ成ゑみの大臣をしかつひがみの
かわ次さあらの大子井上のくわうこうたちばなの
いつせい藤原の仲成たいらのまさかど藤原のすみ
ともえべのさだたうむねたう武平家平つしまの

かみ源のよしちかあくさふあく衛門のかみにいた
るまでつかう其れい廿余人なりされともこれらは
いつれかそくわいをとげたりしかはねをれうもん
げんじやうの土にうつみかうべをこくもんに
かけられしものなりき　」二一ウ

かんやうきう

とをくゐてうのせんじようをとふらふにむかし
ゑんの大子たんはしくはうていにとらはれていま
しめをかうぶる事十二年あるとき太子たんし
くわうてに申けるは我にしばらくのいとまを
給はれける里に一人の老母あり本国にかへつて今
一度はゝを見んと申けれはしくわうてい大きに
あさわらつてなんちにいとまたばん事馬につ
のゝおいからすのかしらのしろくならんを待へし
とそのたまひける時に太子たん天にあふぎ地に
ふしてねがはくはみやうけんの三ほうかう〳〵の
心さしをあはれませ給ひて馬につのおいからすの　」二二オ

かしらしろくなし給へわれ本国に帰て今一度はゝ
をみんとそいのりけるかのめうをん大士はりやう
ぜんじやうどにけいしてふけうのともがらをいまし
めこうしがんくわいはしなしんだんに出てちう
かうのみちをはじめ給ふみやうけんの三ほうかう
〳〵の心さしをあはれませ給ふ事なれ共馬に
つのおいて宮中に来りからすのかしらしろく
なつて庭前の木にいたるしくわうていおうとうば
かくのへんにおどろきりんげんかへらさる事
を思食て太子たんをながめて本国へこそかへされ
けれしくわうてい太子たんをゆるして本国へかへ
されける事をくやしくみ給ふさまなのめならす　」二二ウ

しんの国とゑんの国のさかいにそこ〳〵と申す
国ありかの国に大河ながれたりかの川にわたせる
はしをはそこ〳〵のはしとそ申けるしくはう
ていかれへ人をつかはして太子たんがわたらん
とき落べきはかりことをめくらされたりければ

なしかはよかるべき中の程にて落にけりされ共
水にもおぼれず子細なくむかひのきしにつく太子
たん大きにふしぎのおもひをなしうしろを帰り
見ければ大きなるかめがごうにのせてぞ渡し
けるこれもたゝかう〳〵の心ざしのふかかりける
によつてなり太子たんこれにうらみをふくんて
又しくわうていにしたがはすしくわうていし　」二三オ

かいにせんじをくだし大子たんをうつべき
はかりことをめくらされたり太子たんけいかど云
者をかたらふて大臣になすこれをはじめとして兵
あまたかたらはれけり爰に田光せんせいといへる
つはもの有けいかかれをめしよせてかたらいけれは
せんせいか申けるはきりんは千里をとへりといへ
とも年老ぬればどばにもをとれり君はこの身の
わかうさかんなつし事を思食てかやうにたのみ
仰候がいかさまにも兵をかたらつて奉らんとて出
けれはけいかかれが袖をひかへてあなかしここの
事天下にもらし給ふなよせんせいたちかへつ
て何よりも人にうたがはれぬるに過たるはぢは　」二三ウ

なしわれいはすとも此事天下にもれなはさだめて
うたがはれなんず心やすふおもひ給へとてけいか
がまへなるすもゝの木にかしらをつきあて打くた
いてこそうせにけれ又爰にはんゑきと申す兵
あり是はもと秦の国の者成けるがおやおぢきやう
だいをしくはうていにほろぼされてゑんの国に
にけこもりたりしくわうてい四かいにせんじを
くだしはんゑきがかうべ丼にゑんのさしづもつて
まいりたらんする者には五百こんの金を与へしと
ふれられたりけいかかれがもとにゆいてわれきく
なんぢがかうべ五百こんのきんにほうぜられたん
也まことになんちしくわうていほろぼすべき心さし」二四オ

ならはなんぢがかうべ我にかせしくわうの内裏に
もつてゆきゑいらんをへられん時剣をむねにさ

さんはやすかるべしといひければはんゑきおどり
あがりいきをついで申けるはわれおやおぢきやう
たいをしくわうていにほろほされ夜るひるこれを
思ふにこつずいにとをつて忍びかたしまことに
なんぢしくわうていほろほすべきはかりことなら
すわかかうべなんぢにあたへん事ちりはいより
もなをやすかるへしとてけいかゞまへにてみづ
からくびかき落してうせにけり又こゝにしんぶ
やうと申つはものあり是もしんの国の者なりけるが
十三の年おやのかたきをうつてゑんの国ににげ　」二四ウ

籠りたりかれがいかつてむかふ時は大のおとこも
せつじゆす又わらふてむかふ時はみどり子もいた
かれける是にはんゑきがかうべをもたせけいかは
ゑんのさしづの入たりけるひつをもつて秦の国へ
むかふある里にしゆくしたりける夜そのへんに
くわんげんするを聞ててうしをもつてほんいの
事をうらなふにかたきのかたは水なり我かたは
火なり天もあけぬ蒼天ゆるし給はねばはつこう
日をつらぬいてとをらすすればわかほんいとげが
たしとそ申けるさりながら帰べきにもあらねは
しくはうの都かんやうきうにいたりぬはんゑきが
かうべ幷にゑんのさしづ持て参りたるよしをそう　」二五オ

もんすしくわうてい人してうけとらんとの給ふ人
しては叶はじちきに奉るべきよしを申たりけれは
しくわうていさらはとてにはかにせちゑのきを
とゝのへてゑんの使をそめされけるかんやうきう
と申すは都のめぐり一万八千三百八十里につも
れり内裏をは地より三里たかくつき上くろかねの
ついぢを高さ四十ちやう方四十里につかせ其内に
作られたり殿の上にもおなしうくろかねのあみを
そはつたりける是はめいどのつかひを入じとや
秋はたのむのかり春はかならずみやこより越路へ
かへるものなれは飛行じざいのさはりありとて
ついぢにはがんもんといへる門をあけてそとを　」二五ウ

されける銀をもつて月をつくり金をもつて日をつくれりしんしゆの沙るりの沙こかねの沙を敷みてり長生殿有ふらうもん有四十八殿の其中にあばうきうとてしくはうていのつねにすまれけるてんありくち六しやくのあかかねのはしら高さ三十六ぢやうにたてさせ東西へ九町南北へ五ちやうに作られたり大床の下には五ぢやうのはたほこを立たれともなををよはぬ程なりうへはるりのかわらをもつてふき下は金銀にてみがけりかしこに玉のきざはしありしんぶやうこれをのぼるほどにあまりに内裏のおびたゝしきを見ておくしてもや有けんひざのふしわな〳〵とふるつてのぼりわつ」二六オ

らふしんかあやしみをなしてぶやうはむほんの心さしあり君はけんじんに近つかずけんじんをは君のかたはらにおかずけんじんに近付はすなはち死をかろんする道也といひけれはけいか立帰つてぶやうはむほんの心さしなしゑんの国のいやしきにならつてかゝるくわうきよをはじめて見るあひだめいわくすといはれてしんかをの〳〵しづまりぬ其後しくわうはんゑきがかうべ丼にゑんのさしつともにひけんせらるさしつの入たりけるひつのそこに剣のこほりなんどのやうにみえけれはしくわうてい大きにおそれおのゝひていそきにげんとし給ふけいか御衣の袖をむんずとひかへ」二六ウ

奉つて剣をむねにさしあて奉るすでにかうとそみえたりける万千のつはものとも庭上にひざをつらねけれともすくがんとするに力なしたゞこのきみぎやくしんにおかされ給はん事をかなしみあへりしくわうていは三千人のきさきをもち給へり其中にくわやうぶにんとてならびなきことの上手おはしけりしくはうていけいかにむかつて我にへんしのいとまをえさせよさいあひの后のきんのねを今一度きかんとのたまへはけいかゆるし奉るきさきは七しやくのびやうぶをへだてゝきん

をしらべ給ひけりおよそ此きさきのきんのねは
武士のいかれるもしづまり飛鳥もおちくさ木もな」二七オ
びく計也いはんやけふをかぎり只今ばかりのゑい
ふんにそなへんとしらべ給ひけれはさこそはお
もしろかりけめけいかもばうしんの心うせはてゝ
かうべをうなたれみゝをそばたてゝこれをきく其
とききさき始て一きよくをそなふ七せきのびやう
ぶ高くともおとらはこえぬべし一定のらこくはつ
よく共ひかばたえぬべしとしらべ給ひけるをけい
かはきゝ知ずしくわうていはきゝしつてまし〳〵
けれはひかへたりける御衣のたもとをふつつと引
ちぎつて七しやくのびやうぶをおどりこえあかゞ
ねのはしらのかげにかくれ給ふけいかいかつて
つるきをなげかけ奉る御前にばんのいしの候ひ」二七ウ
けるがけいかか剣にくすりのふくろをなげ合たり
つるきくすりのふくろを懸られながらくち六しや
くのあかゞねのはしらをなからまでこそきつたり
けれけいかはつるぎがあまたなければつゞいても
なげずしくわうてい立帰御けんをめしよせてけい
かを八ざきにこそし給ひけれしんぶやうもうたれ
にけり其時くわんぐんをつかはしてゑんたん終に
ほろほさるおんを忘契りをへんせし者はみなかく
こそ有けめされは今の兵衛のすけよりとももさこ
そはあらんすらめとしきだいする人おほかりけり
もんがくのくはんしんちやう
そも〳〵かの兵衛のすけよりともといつは年十四」二八オ
と申しゑいりやく元年三月廿日伊豆の国
北条ひるしまへなかされて廿余年の春秋を送り
むかへとしは三十四にそなられける年ごろ日比も
あれはこそありけめ今年しもかゝるむほんを思
立れけるゆへをいかにと申すにたかをのもんがく
上人のすゝめなりけるとそ聞えしこのもんかく上
人と申すは渡辺のゑんどう左近のしやうげんもち

とをか子にゑんどう武者もりとをとて上西門院の
しゆなり十九の年あさからす思ひける女にお
くれけんこの道心おこし出家してしゆぎやうにい
てんとしけるがしゆぎやうといふはいかほどの大
事そためいてみんとて六月の日の草をゆるがす」二八ウ

てつたるにかた山のやぶの中にはいりあほの
けにふすあぶかはちありなといふどくちうともが
身にひしと取付てさしくひなとしけれともちとも
身をばはたらかさず七日までこそふしにけれ八日
といふにおきあかつてしゆぎやうといふは是程の
大事かと人にとへばそれ程ならんにはいかでか
いのちもいくべきと云あひだ扨は安平ごさんなれ
とてやがてしゆぎやうにこそ出にけれ熊野へ参り
なち籠せんとしけるがまづぎやうのこゝろみな聞
ゆるたきにしはらくうたれんとてたきもとへこそ
参けれころは十二月十日あまりの事なるに岩
なみこほりつらゝいて谷の小河もをともせすみね」二九オ

のあらしさへわたりゆきうちふつて四方のこすゑ
もしろたえなりしかるにもんかくたきつぼにをり
ひたりくびきはつかつてじくのしゆを見てけるか
二三日こそありけれ四五日にもなりしかはこらへ
ずしてもんかくうきあがりにけり数千ぢやう
みなぎり落るたきなれはなしかはたまるべきさつ
とおしおとされてさしもさがしきいわかとの中
をうきぬしつみぬ五六町こそ流けれ時にうつ
くしげにびんつらゆふたるどうじ一人来てもん
がくが左右の手をとつて引あげ給ふ人きどくの思
をなして火をたきあふりなどしければでうごう
ならぬいのちでは有もんがくほどなくいき出ぬ少」二九ウ

人心ち出来て大のまなこをいからかし我此たきに
三七日うたれてじくの三らくしやを見てふと思ふ
大くはんあり今日はわづかに五日に成来七日だに
も過ざるに我をは爰へ何者かとつて来れるそと云
けれは見るひと身のけよだつて物いはす又たきつほ

に帰立てそうたれける三日といふにはかなく成ぬ
たきつぼをけがさしとやひんつらゆふたるてん
どう二人たきの上よりおりくだりよにあた丶かに
かうはしき御手をもつてもんがくがちやうじやう
よりはじめて手あしのつまさきたなうらに至る
までなでくだし給ふとおほえてもんかく夢の心ち
していき出ぬ少人心ち出来ていか成人にてまし」三〇オ

ませはかくはあはれみ給ふらんととい奉る我は是
大しやうふとうみやうわうの御使にこんがらせい
たかといふ二とう也もんがくむしやうのくわんを
おこひてゆみやうのきやうをくわたつ力を合よと
みやうわうのちよくに依てきたれるなりとこたへ
給ふもんがくこゑをいからかひて扨みやうわうは
いつくにましますぞ物そつてんにとこたへて雲井
はるかに上り給ふもんかくされはこそわか行を
は大しやうふとうみやうわうまでもしろしめされ
て有けりとたなこ丶ろを合てはいし奉りいよ〳〵

たきつぼにおりたつてそうたれける其後はまことに
目出度ずいさうともありけれはふきくる風も身に」三〇ウ

しますおちくる水もゆのごとしかくて三七日の大
くはん終にとげにけりなちに千日籠りけり大みね三度
かづらき二度高野こかわきんほうぜん立山はく山
ふじのだけ伊豆はこねしなの丶とがくし出羽のは
くろそうして日本国残所なく行まはり故郷やこ
ひしかりけん都へ上りたりけれはをよそ飛鳥をも
いのりおとす程のやひばのげんじやとそ聞えける
さる程にもんかくたかを山のおくに行ひすまし
てそゐたりけるかのたかをにじんご寺と申山
寺ありせうとくてんわうの御ときわけのきよ丸が
たてたりしがらん也久敷しゆざうなくしてくわう
はいせりとぼそは風にたをれてむなしくらくゑう」三一オ

の下にくちのきばは雨におかされてふつだんさら
にあらはなりぢうじの僧もなければまれに

さし入ものとてはたゞ月日の光計也もんがく我
たま〳〵人間にしやうをうけ奉に出家とんせいの
身となれり新しうだうたうをたてんより古をこん
りうしたらんにはしかしと大きやうにもみえたりさ
ればしゆざうせばやとおもひくはんじんちやうを
書て十方だんなをすゝめありきけるがある時院の
御所ほうぢう寺殿へ参りほうがのよしを申けれは
人々けうなるひしりの御坊かな御いうの折節そ後
日に参れと仰ければもんがく是は申せとも人
がそうせぬそとこゝろへてふてき第一のあくひしり」三一ウ

ではありせひなく御つぼの内にやふりいり大おん
じやうをあけて大じ大ひのきみにてわたらせ給
へはなどか御ほうがなかるべきとてふところより
くわんしんちやうをおつとりいだしひきひろげた
からかにこそようたりけれ
　沙弥もんがくうやまつてまうすまことに十
方だんなの御じよしやうをかうむつてたかを
山のれい地に一ゐんをこんりうしけんたう
二世あんらくの大りをこんぎやうせしめんと
こふくはんしんのじやう
それおもんみれはしんによくはう大なり正仏のけ
みやうをたつといへとも法性すいまうの雲あつく」三二オ

おゝつてはるかに十二いんゑんのみねにたなひ
きしよりこのかた本有しんれんの月の光かすか
にしていまた三どく四まんのそらにあらはれず
かなしきかな仏日はるかにぼつして生死るてん
のちまたみやう〳〵たり色にふけりかにほこる
たれかきやうざうてうゑんのまとひをしやせん人
をはうし法をはうすあにゑんらごくそつのせめ
をまぬかれんや爰にもんかくたま〳〵ぞくぢんを
うちはらつて法衣をかざるといへどもあくぎやう
なを心にたくましうして日夜につくりせんべう又
みゝにさかつててうほにすたるいたましきかな
ふたゝび三つのくわきやうに帰つて重てしやうじ」三二ウ

のくりんをめぐらん事を此ゆへにむ二のけん
しやうせんばんぢく〳〵にぶつしゆのいんをあら
はしすいゑんしじやうの法みなもつてほだいのひ
がんにいたらすといふ事なしかるがゆへにもん
がくむ二のくはん門になんたを落し上下しんぞく
のけちゑんをもよほし上ほんれんだいにあなうら
をはけましてとうみやうかくわうのれいぢやうを
たてんと也それたかを山は山うづたかうしてじゅ
ほう山のこすゑをまなひたにしづかにしてしやう
山とうのこけをしくがんせんむせんてぬのをひき
れいゑんさけんでゑだにあそぶ人里とをふして
きようちんなくしせきことんなふしてしん心のみ」三三オ

ありちけいすくれたりもつとも仏天をあがむへし
ほのかにきくじゅしやゐぶつたうくどくたちまち
にふついんをかんすいはんや一しはんせんのほう
ざいにおゐてをやねがはくはこんりうじやうしゆ
してきんけつほうれき御ぐはんゑんまんないし
とひをんごんりんみんしんそともにぎようしんぶ
ゐのくわをうたひちんようざいくわのゑみをひら
かんことには又しやうりやうゆふぎ前後大小共に
一仏しんもんのうてなに入てかならず三身万どく
の月をもてあそはんよつてくはんしんしゆぎやうの
おもむきけのたしもつてかくごとし

治承三年三月の日　　文学法師敬白」三三ウ

とぞよみあげたる

もんがくのなかされ

さる程にほうぢう寺殿にはめうおん院の太政大臣
もろながこう御びわあそばひてらうゑいめてたう
せさせおはしますあぜちの大納言すけ方のきやう
ひやうしを打てふうぞくさいはらうたはれけり源
少将まさかたわごんをしらべ四位の侍従もろさだ
いまやうとり〳〵にうたふて玉のすたれにしきの
ちやうの内れい〳〵としてまことにおもしろかり
けれは法皇も御かんのあまりに御つけ歌をせさせ

おはしますそれよりもんがくが以外の大こゑに
てうしもはや悉みたれぬ法皇あれ何ものそらう　」三四オ

せきなりおい出せと仰下さるゝほどこそありけれ
あはれ何事かな事にあはばやとおもふはやりお
の者どもはしりよつていかにけふのひしり御ゆう
の折節そ後日にまいれとおほせけれはもんがく
あなこと〳〵したかをのじんご寺において国にて
もしやうにても一しよよせ給はさらんほかはまつ
たうまかり出まじとそ申ける其時すけゆき判官
文学がそくびつかんとてよりけるをもんかくくはん
しんちやうをは左の手におつとりなをし右のうて
をさし出しすけゆき判官がゑぼしをうつてうち落
しむねをばくとついてのけにつきたをすすけゆき
判官はもんかくにゑほしうちおとされおめ〳〵と」三四ウ

成て大床の上へそにげのぼりける其後もんかくは
馬の尾にてつかまいたる刃のそのたけ七寸ばかり
ありけるがよそよりはこほりなんとのやうにみえ
けるをぬきもつてよりくる者あらはつかんとこそ
はまちかけたれもんかく左の手にはくはんしん
ちやうをもち右の手には彼かたなをもつてはしり
ありきけれは思ひもかけぬにわか事ではあり人目
には只左右の手にかたなを持たるやうにそみえし
法皇もゑいりよをおとろかさせおはします其外公
卿殿上人つぼねの女房たちに至るまでこはいかに
とさはかれて院中のさうどうなのめならすこゝ
にしなのゝ国の住人安藤右宗かたうしよくにて　」三五オ

武者所に候ひけるが太刀をぬいてつつと出けれは
もんがくよろこふでよんでかゝるみきむねくはん
しんのひしりを切てはせんなしとや思ひけんもん
がくが刀もつたるかたのかひなを太刀のむねにて
かたかけてしたゝかにうつうたれてひるむところ
をえたりやおふと太刀をなげすてはしりかかつ
てむずとくむもんかくはだかれながらみぎむねが

かいなをそついたりけるみぎむねはつかれながら
そしめたりける文学もつよしみぎむねもつよかり
ければたがひにうへになり下になりころびあふ所
をこゝかしこへにけちつたりつる者ともわか高名
がうにちきり木さいばうをもつてよりもんがくが」三五ウ

はたらくところのぢやうをさん〳〵にがうして
けりされとももんかくはちつともいろもへんせず
わるびれたるけしきもなくゐなをりいよ〳〵あつ
こうほうげんをぞしけるたとひほうがをこそじ給
はさらめ是程にくはんしんのひしりにからき目を
見せ候ひぬれはたんだいまおもひしらせ申さん
する物を三かいはみな是くわたく也わうぐうとて
ものかるべからすたとひ今こそ十ぜんのてい位に
ほこつたうともくわうせんのたびにおもむき給ひ
なん後はごづめつのくるしみをはよにしまぬかれ
たまはじものを〳〵とおどりあかり〳〵そ申ける
其後もんがくをはちやうの者にたふちやうのもの」三六オ

給はつて七八人が中にひつたてゝ出けるがちやう
の者ともはもんがくをひつたてゝて出ると思ひけれ
共人目にはたゞちやうの者ともがもんがくにひつ
立られて出るとそみえしもんかくをはやがてごく
でうせらるすけゆき判官はもんかくにゑぼしうち
落され面目なくや思ひけんしばしは出仕もせさり
けり安藤右宗はもんかくにくんだるけんじやうに
たうざに一らうをへずして右馬のぜうにそなされ
ける其比びふく門院にはかにかくれさせ給ひし
かは大しや行はるゝ事有てもんがくやがてごく
をは出されけり文学なをもこりぬさまにて又くはん
じんちやうを書て十方だんなをすゝめありきける」三六ウ

がさらはたゞもなくしてあつはれ此世の中は只
今みたれて君もしんも共にほろひうせんする物
をなとかやうにおそろしき事をのみ申ありく
あひだこの法師都におゐてはかなふまじおんるせ
よとて伊豆の国へそ流されける源三位入道のちや

くし伊豆のかみなかつな其時はいまだたうしよく
にておはしけるが其沙汰としてとうかい道より舟
にて下さるへしとて伊勢の国へ出まかるにはう
へん両三人をそつけられけるこれらがいひけるは
ちやうの下べのならひかやうの事に付てこそ
をのつからゑこも候へいかにひしりの御坊知人は
もち給はぬかこれ程の事にあふておん国へなが　」三七オ

され給ふにとさんらうりやうこときの物をもこひ
給へかしといひけれはもんがくわらつてほうしは
さやうにようじを云べきとくゐをもたず但東山
のへんにそとくゐはあれいてさらはふみをやろうふ
といひけれはけしかるかみをたづねてえさせたり
もんかく大きにいかつてかやうのかみに物書やう
なしとてなげかへすさらばとてこうしをたつね
てえさせたりもんがくわらつてかうしはものをゑ
かゝぬぞさらはをのれらかけとてかゝする様文学
こそたかをのじんご寺ざうりうくやうの心ざし有
てすゝめありき候程にしよくわんをこそじやう
じゆせさらめあまつさへおんるせされて伊豆の国　」三七ウ

へなかされ候ゑんろのあひたで候へはとさんらう
りやうごときの物も大切に候この使にたへといひ
けれはいふやうに書てさてたれ殿へとかき候はん
そといへは清水のくはんおんばうへとかけといふ
是はちやうの下へをあさむくにこそといひけれは
さりとてはもんかくはくわんおんをこそふかくた
のみ奉たれさらではたれにかようじをもいふ
べきとぞ申ける去程に伊勢の国阿野のつよりふね
にのせてくたすほどにとうたうみの国てんりうの
なた九十九正のこまがたなんと申すあく所を過
行とき折節大風ふき大波たつてふねすでにじゆ
かいせんとす水主梶取共ろかいかぢをたてなをせ　」三八オ

どもかなはねはあるひはくはんおんのみやうがう
をとなへあるひはさいごの十ねんに及へりされ

とももんがくはちつともさはかすふなそこに高
いびきかいてぞふしたりけるすいしゆかんどり共
いかにひしりの御坊是程に大風ふき大なみたつて
ふねすてにしゆかいせんとするになときやうをも
よみねんぶつをも申てりう神にたむけいのち
たすからんとはおもひ給はぬそといひけれはもん
かくけにもとや思ひけんかつはとおきふなはたに
あゆみ出大のまなこを見いからかしかいしやうを
はつたとにらまへ大おんじやうをあけてりうわう
やある〳〵是程に大ぐはんおこしたるもんかくを」三八ウ

いかてしつめてみんとはするそてんのせめかうむ
らんずるりう神どもかなとよばはつたりけれは
りう神このことばにやおそれけん波風しつまつて
ことゆへなく伊豆の国にそつきにけるもんかく大
ぐはんをおこす事ありわれふたゝび都にのぼり
たかをのじんご寺をしゆざうすべくは死ぬまし
さらずはしぬへしとて都を出し日より伊豆の国に
つくまで廿一日があひだゆみづをたにものみ入ず
だんじきしてこそくだりけれされともきりよく
すこしもおとろへずざぜん行法おこたらすして
伊豆の国にそつきにけるその外たゞ人ならす
とおもふ事ともおほかりけり」三九オ

伊豆ゐんせん

去程にもんがくをはたう国のざいちやう近藤四郎
くにたかうけとつてなごやがおかにそおいたり
けるそれより兵衛のすけのおはするところもほど
近かりけれはつねはよりあひ京田舎むかし今の事
ともをかたりあはせてたがひになぐさみあはれ
けり有時もんがく兵衛のすけに云けるはへいじ
には小松殿はかりこそ御心もかうに御さいかくも
ゆゝしうわたらせ給ひたりしがされはそれは平家
のうんめいの末に成やらん去年の八月に
かうじ給ぬいまは源平両家のなかを見るに御へん
ほと将軍のさうもちたる人もおはせぬははや〳〵」三九ウ

むほんを思立て平家をほろほし天下をしづめて日本の将軍となり給へかしといひけれは兵衛のすけそれおもひもよらぬ事なり我はこれ去ぬる平治にいけどりにせられてすでにちうせられるべかりしをこいけのぜんによにいのちこひうけられしかば其ほうし忘がたさにまい日ほけきやう一部ようで父母けうやうせんにたむけ奉るより外は又たじなしとぞのたまひけるもんかくかさねて申けるは天のあたふるをとらされはかへつて其とがをうけ時いたつておこなはさればかへつて其わざはひをうくといふ本文あり御へんに心さしのあるかなきかをば是にてしり給へとてぬののふくろに入たる」四〇オ

しやれかうべをふところよりとりいたいてなけ出す兵衛のすけあれはいかにとのたまへは是こそ御へんの父前左馬のかうの殿のかうべよ去ぬる平治にごくしよのへんのこけにうつもれておはしけるをもんかくあまりのいたはしさにほりおこし奉つて廿余年があひた身をはなたずとぶらひ奉りぬれば今はさだめて一こうもぞうかひ給ひぬらんさればもんかくはこさまのかうの殿には奉公の者にて候なんとうやう〳〵に申たりけれは兵衛のすけまことゝは思はさりけれ共ちゝのかうべときくがなつかしさに左の袖にすへてまづなみたをそ流されけるそれよりしてそむほんやう〳〵思立れ」四〇ウ

けるとかや兵衛のすけ宣ひけるはたとひさやうの事おもひたつともちよくかんゆるされまいらせずしてはいかがあるべきとのたまへは文学それは心やすふおもひ給へ我都にのほつて申ゆるし奉らん兵衛のすけあさわらつて御坊も流人の身として人のちよくかん申てゆるさんとのたまふは大きにまことしからずとのたまへはもんがくやらそれはわかゆりんと申さばこそ人のちよくかん申てゆるしたてまつらんは何かくるしかるべきこれより福原の新都へのぼらふに三日ゐんせんう

か丶わふに一日上下七日八日にはよも過さらし相
かまへてそのあひだ待給ふべしとてさせるりやう　」四一オ
しやうはなけれともつゐ立てばうにかへり弟
子ともにいひけるは我伊豆の御山に七日参籠の
しゆくぐはんあり人たづぬるともこのよしかくと
かたるへからすとてばうを出ひるは山道に入夜は
大道に出のぼるほどにふじ川に水出ておしなが
されんとせしときもありたかしのふもとにてさん
ぞくらにうしなはれんとせし事もありとかくして
三日と申とりのこくはかりに福原のしんとにつき
右兵衛のかみ光義のもとにいさ丶かゆかり有けれは
そこに落ついて光義にいひけるは伊豆の国のる
にん前の右兵衛のごんのすけよりともちよくかん
ゆるされまいらせてゐんせんをだにも下され候はゝ」四一ウ
東八ケ国の家人共をもよほしあつめて平家をほろ
ぼさんと申候なりと申けれは光義たうじは君も
平家におしこめられさせ給ひて月日のひかりを
だにも御らんせず我身も三くはんともにとゝめ
られてこゝろくるしきおりふしなりけれはいかゞあ
らんすらんさりながらうかかふてみんとて御前へ
まいり此よしそうし申されたりけれは法皇なのめ
ならす御かんあつてやがてゐんぜんをこそ下され
けれもんかくゐんせんたまはりなのめならすよろ
こふでそくだりける兵衛のすけあはれこのひしり
のなましひなる事申いたいて又いかなるうき
目にかあはんすらんなんと思ひのこす事もなふ　」四二オ
あんしつゝけておはしけるが文学伊豆の北条を出
て七日と申いぬのこくばかりに帰参してくはや殿
ゐんぜんよとてくびにかけたるふみぶくろより取
出いて奉る兵衛のすけゐんせんと聞てかたしけな
さにあたらしきじやうゑをちやくし三度はいして
ゐんせんをそひらかれける其じやうにいはく
しきりの年よりこのかた平氏わうくわをべつ

じよしてせいたうにはゝかる事なし仏法を
ほろほしてういをみたさんとすしれ我朝は神国也
そうべうあひならんで神とく是あらたなりける
かゆへにてうていかいきの後数千歳の間てい位
をかたぶけ国家をあやふめんとせし者みなもつて」四二ウ

はいほくせすといふ事なししかれはすなはちか
つうは神道のみやうじよにまかせかつうはちよく
せんのししゆをまもりはや平氏の一るいをほろぼ
して朝のおんできをしりぞけよふたいきうせんの
ひやうりやくをついてるいそほうかうのちうきん
をぬきんで身をたて家をおこすべしていりゐん
ぜんかくのごとしよつてしつたつくだんのごとし

治承四年七月十四日右兵衛のかみ光義が
うけたまはつて

きん上前の兵衛のすけ頼朝へとぞ書れたる

ふじ川

兵衛のすけかのゐんせんをばにしきのふくろに」四三オ

入ていしはしのかつせんの時もくびにかけられ
たりけるとかや去程に福原には公卿せんぎあつて
源氏にせいのつかぬさきにいそぎ東国へうつ手を
くたすへしとて大しやうぐんには小松のごんの
すけ少将これもりふく将軍にはさつまのかみたゝ
のり侍大将にはかづさのかみたゞきよ都合其せい
三万余騎九月十八日に新都をたつて十九日に
きうとにつきあくる廿日に東国へこそ下られけれ
大将軍ごんのすけ少将これもりは生年廿三ようぎ
たいはいゐに書共筆もをよびかたし重代のよろひ
からかわと云きせながをばからうとに入てかゝせ
らる道内はあか地のにしきのひたゝれにもよき」四三ウ

おとしのよろひきてれんぜんあしげなる馬にき
ぶくりんのくらおいて乗給へりふく将軍さつまの
かみたゞのりはこんぢのにしきのひたゝれにひ
おとしのよろひきて黒き馬のふとうたくましいに
いつかけぢのくらおいて乗給へり馬くらよろひ甲

弓矢太刀かたなに至るまでてりかゝやくほとに
いてたゝれたりしは目出たかりし見物なりさつま
のかみたゞのりは年来あるみやばらの女房のもと
へかよはれけるがこの女房のかたより小袖を一か
さねつかはすとて千里のなごりのかなしさに
一首の歌をぞそへられける
　あつま路のくさばをわけん袖よりも　」四四オ
　たえぬたもとのつゆそこほるゝ
　さつまのかみの返事には
　わかれぢをなにかなげかんこえて行
　せきもむかしのあとゝおもへは
せきもむかしのあとゝよめる事は平将軍さだ
もり将門ついたうのために東国へ下向せしを思出
てよみたりけるにやいとやさしうそ聞えしむかし
はてうてきをたいらけにくわいとへむかふ将軍
はまづ参内して切刀を給るしんき南殿に出御成て
近衛かいけとうにぢんを引ないべんげべんの公卿
さんれつしてちうぎのせちゑおこなはる大将軍
ふく将軍をの〳〵礼儀をたゞしうしてこれをたま　」四四ウ
はる承平天慶のせうせきも年久しうなつてなぞら
へかたしとて今度はほり川の天皇の御とき讃岐の
かみ正盛が未因幡の守にて前のつしまのかみ源の
よしちかついたうの為に出雲の国へ下向せられは
とてすゝばかり給はつてかわのふくろに入てざう
しきが首にかけさせてそくだられけるてうてきを
ほろぼさんとて都をいづる将軍は三の存知有切刀
を給る日家を忘れ家を出るとてさいしをわすれ
せんぢやうにしてかたきにたゝかふ時身をわする
さればいまの平氏の大しやうこれもりたゞのりも
さだめてかやうの事をは存知せられたりけんあはれ
なりし事とも也さる程に平家は九重のみやこを　」四五オ
立て千里のとうかいにおもむき給ふたいらかに
帰りのぼらん事もまことにあやうき有様ともにて

あるひは野原のつゆにやどをかりあるひは高ね
のこけにたびねして山をこへ河をかさね日数ふ
れは十月十六日にするがの国きよみがせきに
つき給ふ都をば三万余騎で出しかど路次の兵めし
ぐして七万余騎とそ聞えしせんぢんはかんばら
ふじ川にすゝみけれは後ぢんはいまだ手越うつの
やにさゝへたり大将軍ごんのすけ少将これもり侍
大将上総守たゞきよをめしてたゝこれもりがぞん
ぢにはあしがらを打こへばんとうにていくさを
せんとおもふなりとはやられけるをかづさのかみ」四五ウ

申けるは福原をたゝせ給ひし時入道殿の御でう
には軍をはたゞきよにまかせ給へとおほせ候し
そかし八ケ国の兵ともみな兵衛のすけにしたかひ
成て候なれはなん十万騎か候らん御方の御せいは
七万余騎とは申せとも国々のかり武者共なり馬も
人もせめふせられて候伊豆するがのせいのまいる
べきだにもいまだみえ候はす只ふし川を前にあ
てゝみかたの御せいをまたせ給ふべうもや候らん
と申ければちから及はてゆらへたり去程に兵衛の
すけはあしがらの山をうちこへてするがの国きせ
川にこそつき給へかいしなのゝ源氏はせ来て
ひとつになるうきしまがはらにてせいそろへ有」四六オ

廿万騎とぞしるしたるひたち源氏さたけ太郎が
ざうしき主の使に文もつて京へのぼるを平家の
せんちん是をとゝめて持たる文をうはい取あけて
見れば女房のもとへのふみなりくるしかるまし
とてとらせてけりそも〳〵兵衛のすけどのゝせいは
いか程あるそとゝへはをよそ八日九日の道にはた
とつゝいて野も山もうみも河光武者で候げらうは
四五百千までこそ物の数をはしつて候へそれより
うへはしらぬ候おほいやらうすくないやらふをは
しり候わす昨日きせ河にて人の申つるは源氏の
せい廿万騎とこそ申つれと申さつまのかみたゞ
のりこれを聞てあつはれ沙汰ののひたる程くち」四六ウ

おしい事はなし入道相国の今一日もさきにうつ
手をくだし給ひたらばよからんする物を其ゆへは
あしがらの山うちこへて八ケ国へ出なば畠山が一
ぞく大庭兄弟なとかまいらであるべきか是等たに
も参りなはばんどうにはなひかぬ草木もあるまじ
物とこうくわいしたまへどかいそなき又将軍ごん
のすけ少将これもり東国のあんないしやにめしく
せられたる長井のさいとうべつたうさねもりを
めしてやゝさねもりなんち程のつよ弓せいびやう
は八か国にいかほどあるそとゝひ給へはさいとう
べつたうあさわらつて申けるはさ候へばきみは
さねもりを大矢とおほしめし候かさねもりはわづか」四七オ

に十三ぞくこそ仕候へさねもり程の者は八か国に
いくらも候大矢と申ちやうのものゝ十五そくに
おとつてひくは候はすゆみのつよきもしたゝか成
もの五六人してはり候かゝるせいひやうともが射
候へはよろひの二三両をもかさねてたやすう射とを
し候なり大名一人と申はせいのすくなひちやう五
百騎におとるは候はす馬にのつつれは落る道を
しらずあく所をはすれとも馬をたをさすいくさは
又おやもうたれよ子もうたれよ死ぬれはのりこへ
〳〵たゝかひ候西国のいくさと申はおやうたれ
ぬればけうやうしいみあひてよせ子うたれぬれば
そのおもひなげきによせ候はすひやうらうまいの
」四七ウ

つきぬれは田作りかりおさめてよせなつはあつし
といひふゆはさむしときらひ候東国にはすべて其
義候はすかいしなのゝ源氏共あんないはしつたり
ふじのこしよりからめ手にやまはり候らんかう申
せば君をおくせさせまいらせんとて申とや思食れ
候らんさやうでは候はす軍はせいによらすはかり
ことによるとこそ申つたへて候へさねもり今度
の軍にいのちいきてふたゝび都へ参るへしとも
おほえ候はすと申けれは平家のつはものとも是を
聞てみなふるひわななきあへりさる程に十月

廿三日にもなりぬあすは源平ふし川にて矢あわせとさだめたりけるに夜に入て平家の方より源氏の」四八オ

ぢんを見わたせは伊豆するがの人みん百性等が軍におそれてあるひは野に入山にかくれあるひは舟にとりのつてうみ川にうかひいとなみの火のみえけるを平家の兵ともあなおひたゝしと源氏のとを火のおほさよまことに野も山もうみも川も光みなかたきで有いかゞせんとぞあはてけるその夜の夜はんばかりにふしのぬまにいくらもむれゐたりける水鳥共が何にかおどろきたりけんたゞ一度にはつとたちけるはをとの大風いかづちなとのやうに聞えけれは平家の兵ともすわやげんじの大せいのよするはさいとうへつたうか申つる様にさだめてからめ手もやまはるらん取籠られてはかなふまじ」四八ウ

こゝを引て尾張河すのまたをふせけやとて取物もとりあへす我さきにとそ落行けるあまりにあわてさはひて弓とるものは矢をしらず矢とるものは弓をしらす人の馬には我のり我馬をば人にのらるあるひはつなひたる馬に乗てくいをめくる者もありあるひはさかさまに乗てうしろへ馬をあかゝする者もありちかきしゆく〳〵よりむかへとつてあそひけるゆうくんゆうぢよともあるひはかしらけわられあるひはこしふみおられておめきさけぶこゑなのめならす明る廿四日の卯のこくに源氏の大せい廿万騎ふし川におしよせて天もひゞき大地もゆるぐほど時をそ三ケ度作ける平家のかたには」四九オ

をともせす人をつかはして見せけれはみな落て候と申あるひはかたきのわすれたるよろひ取て参るものも有あるひはかたきのすてたる大まくとつてまいる者もありかたきのぢんにははいだにもかけり候はすと申兵衛のすけ馬よりおり甲をぬきてうづうかいしてわうしやうの方をふしおがみこれはまつたく頼朝がわたくしの高名にあらす八幡大ぼ

さつの御はからひなりとそ宣ひけるやかてうつ取
ところなれはとてするがの国をば一条の次郎たゝ
よりとうたうみをは安田の三郎よしさだにあづけ
らる平家をはつゝいてもせめへけれともうしろも
さすがおほつかなしとてうきしまが原より引しり」四九ウ

ぞきさかみの国へそ帰られける平家はたゞにげに
にげのぼるかいだうしゆく〳〵のゆうくんゆう女
ともあないま〳〵しうつ手の大将軍の矢一だにも
射すして逃上り給ふうたてさよ軍には見にけと
いふことをたに心うき事にするにきゝにけし
給ひたりとわらひあへり落書ともおほかりけり都
の大将をは宗盛と云うつ手の大将をはごんのすけ
といふあひた平家をひらやとよみなして

ひらやなるむねもりいかにさはくらん
はしらとたのむすけを落して
ふじ川のせゝのいわこす水よりも
はやくもおつる伊勢平氏かな　」五〇オ

上総守たゞきよがふし川によろひすてたりける
をよめり

ふし川によろひはすてつすみそめの
ころもたゞきよ後の世のため

たゝきよはにけの馬にそいりてける
かづさしりかいかけてかいなし

同き十一月八日大しやうぐんごんのすけ少将これ
もりふくはらの新都へのぼりつく入道相国大きに
いかつて大将軍こんのすけ少将これもりをばき
かいが島へ渡すべし侍大将かづさのかみたゝきよ
をば死ざいにおこなへとそのたまひける同き九日
平家の侍とも老少さんくわいしてたゝきよしざい」五〇ウ

の事いかゝあらんとひやうでうす其中に主馬の判官
守国すゝみ出て申けるはたゞきよはむかしより
ふかく人とはうけたまはり及はすあれが十八歳
とおほえ候時鳥羽殿のほうざうに五畿内一のあく
たう二人にげこもつて候しをよつてからめうと

申もの候はざりしに此たゝきよはくちうにたゞ
一人つゐぢをこへはね入て一人をはうつとり一
人をはいけとつて後代に名をあげたりし者にて候
今度のふかくは只事共おほえ候はす是につけても
能々ひやうらんの御つゝしみ候べしと申たりけれ
は入道けにもとや思はれけんこれ盛のるざいをも
たゝきよが死ざいをも思そとゞまり給ひけり　」五一オ

五せつのさた

同き十日ごんのすけ少将これもり右近衛の中将に
成給ふうつ手の大将と聞えしかともしいたしたる
事もおはせずこれはされば何事のけんじやうそ
やと人々さゝやきあへりむかし将門ついたうの為
に平将軍さたもりたはら藤太ひでさと承つてばん
どうへはつかうしたりしかともまさかどたやすふ
ほろびがたかりしかばかさねてうつ手を下すへしと
公卿せんぎ有て宇治のみんぶきやう忠文きよはら
の重藤ぐんけんといふくはんを給て下られけりする
がの国きよ見かせきにしゆくしたりける夜かの
しげふぢまん〳〵たるかいしやうをゑんけんして」五一ウ

きよしうの火のかけさむうしてなみをやきゑきろ
のすゝのこゑよる山をわくと云から歌をたからか
にくちずさみ給へばたゞふんゆうにおほえてかん
るいをそなかされけるさる程に将門をはひでさと
つゐにうつとつてけりそのかうべを持せてのぼる
ほどにきよ見がせきにて行あふたりそれより
ぜんごの大将軍うちつれてしやうらくすさだもり
ひでさとにけんじやうおこなはれける時忠文重藤
にもけんじやうあるべきかとくぎやうせんきあり
九重のうせうじやうもろすけこうの申させ給ける
はばんどうへうつ手はむかふたりといへとも将門
たやすふほろびかたき所に此人ともおほせをかう」五二オ

むつてせきのひがしへおもむく時てうてきすでに
ほろひたりなとけんしやうなかるべきと申させ

給へともそのときのしつへい小野の宮殿うたかはしきをはなす事なかれとらいきの文に候へはとてつゐになさせ給はすこれをくちおしき事にして小野の宮殿の御末をばやつ子に見なさん九条殿の御すゑには何れの世までも守護神とならんとちかいてひ死にこそしに給ひけれされば九条殿御すゑはめてたふさかへさせ給へとも小野の宮殿の御すゑにはしかるべき人もましまさす今はたえはて給ひけるにこそ去程に入道相国の四なんとうの中将しげひら左近衛の中将に成給ふ同き十一月」五二ウ

十三日福原には内裏作り出して主上御せんかう有大じやうゑあるべかりしか共大じやうゑは十月の末東河に御幸して御けいあり大内の北の野にさいちやうじよを作てじんぶくじんぐうをとゝのふ大こく殿のまへれうびだうのだんかにくわいりう殿をたてゝ御ゆをめす同きたんのならびに大じやうぐはんをつくつてしんぜんをそなふしんゑんあり御いうあり大こく殿にて大れいありせいしよだうにて御かぐら有ぶらくゐんにてゑんくわいあり然を此福原の新都に大こくてんもなけれはたいれいおこなふべきところもなしせいしよだうもなければ御かくらそうすべきやうもなしふらく院」五三オ

もなけれはゑんくわいもおこなはれす今年はたゞしんしやうゑ五せつばかりて有べきよし公卿せんきあつてなをしんじやうのまつりごとをきうとの神祇くはんにてとげられけり五せつは是清見原のそのかみ吉野の宮にして月しろくあらしはげしかりし夜御こゝろをすましつゝことをひき給しに神女あまくだつてまひけるを御門御らんしてをとめ子がをとめさびずもからたまをたもとにまきてをとめさひずもと五へんうたはせ給へは神女五度袖をひるかへすこれそ五せつのはじめなる今度のみやこうつりをば君もしんも御なげきあり山ならをはじめて諸寺諸社に至るまでしかるべ」五三ウ

からさるよし一とうにうつたえ申間さしもよこ
かみをやらるゝ太政入道もさらば都帰りあるへし
とてひしめきあへり同き十二月二日にはかにみや
こ帰りありけり新都は北は山々そびへて高く南は
うみちかくしてくたれりなみのをとつねにはかまび
すしくしほ風はけしきところなりさればしんゐん
いつとなく御なうのみしげかりけれはいそぎ福原
を出させ給ふ中宮も一院ものぼらせおはします
せつしやう殿をはじめ奉て太政大臣以下の公卿殿
上人我も〳〵とくぶせらる入道相国を始として
平家一門のくぎやう殿上人我さきにこそのほられ
けるたれか心うかりつるしんとにかた時も残る」五四オ

べき去六月より屋もほこちよせしざいざうぐは
こびくだしてかたのごとく取立たりつるに又もの
くるはしうみやこかへりありければなんの沙汰
にも及はすうちすてゝのほられけりをの〳〵すみ
かもなくして八幡賀茂さがうつまさ西山東山の方

ほとりについて御だうのくわいらう社のはいてん
なとにたち屋とつてしかるべき人々もまし〳〵
ける今度のみやこうつりのほんいをいかにといふ
にきうとは南都ほくれいちかくしていさゝかの事
にもあるひは春日の神木をさゝげてしやうらくし
あるひは日吉のしんよをさゝげてけらくしみたり
かはしき所なり福原は山へたゝり江かさなつて」五四ウ

程もさすがとをければさやうの事にたやすから
じとて入道相国はからひ出されたりけるとかや

あひ

同き十二月廿三日近江源氏のそむきしをせめん
とて大将軍には左兵衛のかみ知盛さつまのかみ
たゝのりつかう其せい二万余騎で近江の国へはつ
かうして山本かしはきにしこりなと云あふれ源氏
共一とにみなせめ落しやがてみの尾張へ趣給ふ

ならゐんしやう

みやこには高倉の宮おんじやう寺へ入御の時南都

の大衆同心してあまつさへ御むかひに参るでう是
もつててうてきなりさらば南都をもせめらるべし」五五オ

といふほどこそ有けれ南都の大衆おびたゝしく
ほうきすせつしやうとのよりしゆとをめして存る
むねあらはいくたびもそうもんに及べと仰けれは
大衆さん候平家太政の入道にあふて死にたふ候
とそ申ける其後うくわんのべつたう忠盛を御使
にくだされたりけれはしやのりものより取てひき
おとせもとゞりきれと大しゆさうどうするあひた
忠盛いろをうしなつてにげのぼる次に右衛門の
すけちかまさを下さるこれをももとゝりきれと大
しゆひしめきけれはちかまさ取物もとりあへす逃
のぼり其時はくはんがくゐんのざうしき二人かもと
どりきられにけりさてなんとには大きなるぎつ　」五五ウ

ちやうの玉を作てこれは平相国のかうべと名付て
うてふめなとそ申ける又大きなるにんぎやうを
つくつてはんにや寺の大そとばにくぎ付にして是
は平家太政入道をはつつけに合するなとそ申ける
ことばのもらしやすきはわざはひをまねくなか
だちなりことはのつゝしまざるはやぶれをとる
道なりといへり此入道相国と申はかけまくも忝
なくたうきんのくわいそにておはしますそれをか
やうに申ける南都の大衆こそおそろしけれをよそ
はてんまのしよゐこそみえたりける入道相国加様
の事共つたへ聞給ていかてかよしと思はるべき
かつ〳〵南都の狼藉をしづめんとて備中の国の　」五六オ

住人せのをの太郎かねやすを大和国のけんび所に
ふせらるかねやす五百余騎でなんとへはつかうす
入道あひかまへてしゆとはらうせきをいたすとも
なんちらはいたすべからず物のぐなせそきうせん
なたいしそとてむけられたりけるに大衆かゝる
内義をはしらずしてこつ川のはたに出むかひかね
やすがせい六十余人からめとり一とにみなくびを

切てさるさわのいけのはたにそかけならへたる
入道相国大きにいかつてさらは南都をせめよやと
て大将軍にはとうの中将しげひらふくしやうくん
には中宮のすけみちもりつかう其せい四万余騎で
なんとへはつかうすなんとの大衆も老少きらはす」五六ウ

七千余人なら坂はんにや寺二ケ所の道をほり切て
かいたてかきさかもぎ引て待かけたりくはんぐん
は四万余騎を二手にわけてなら坂はんにや寺二
か所のじやうくわくにおしよせ時をとつと作る
大衆はみなかちだち打物なりくはんくんは寺にて
かけまはし〳〵あそこ爰におつかけ〳〵さしつめ
ひきつめさん〳〵に射けれはふせく所の大衆数を
つくいてうたれにけり卯のこくより矢合して一日
たゝかひくらす夜に入てならさかはんにや寺二か
所のじやうくわくともにやぶれにけり落行しゆ
との中にさかの四郎ばうやうかくといふあく僧
あり打物取ても弓矢をとつてもちからのつよさも」五七オ

七大寺十五大寺にすくれたりもよきおとしのはら
まきのうへに黒いとおとしのよろひをかさねてそ
きたりけるほうし甲に五まい甲のおをしめ左右
の手にしらゑの大なぎなたこくしつの大太刀をもつ
まゝに弟子同じゆく十余人前後に立てんがいの門
よりうつて出たり是そしはらくさゝへたるおほく
のくはんくん馬のあしなかれてうたれにけりされ共
くはんくんは大せいにて入かへ〳〵せめければ
やうかくか前後左右にふせくところのでしどう
じゆくみなうたれぬやうかくたゞひとりたけけれ
とうしろあらはになるけれは南をさして落ぞ行
夜軍に成てくらさはくらし大将軍とうの中将はん」五七ウ

にや寺の門のまへにうつ立て火を出せとのたまふ
程こそ有けれ平家のせいの中に播磨の国の住人
福井のしやうのけし次郎大夫ともかたといふ者
たてをわりたいまつにしててんがいの南なるざい
けに火をそかけたりける十二月廿八日の夜なり

けれは風はけしくしてひもとはひとつなりけれ
はふきまよふ風にくろけふりおほくのがらんに
ふきかけたりはちをもおもひ名をもおしむほどの
ものはならさかにてうちじにしはんにや寺にて
うたれにけりぎやうぶにかなへるものは吉野
とつかわへそおち行けるあゆみもえぬ老僧は庭
に出みなじがいしてけりしんじやうなるちご共や」五八オ

しゆがくしや女わらんべは大仏殿山しな寺の内へ
われさきにとそにげこもりける大ふつでんの二
かいの上には一二千人のぼり上りかたきのつゝく
をのぼせしとはしをはひいてけりみやうくわは
まさしうおしかけたりおめきさけぶこゑせうねつ
大せうねつむけんあびほのをのそこのざい人も是
にはすきじとそみえしこうぶく寺はたんかい
こうの御ぐはん藤氏るいたいのてらなりとうこん
だうにおはします仏法さいしよのしやかのざう
さいこんだうにおはしますしねんゆしゆつのくはん
ぜおんるりをならべし四めんのらうしゆたんを
ましへし二かいのろう九りんそらにかゝやきし」五八ウ

二きのたうたちまちにけふりと成こそかなしけれ
東大寺はじやうざいふめつしつほうじやくくわう
の生身の御仏と思食なすらへてしやうむくわうて
い手づからみつからみがきたて給ひしこんどう十
六ちやうのるしやなぶつしつたかくあらはれて
はん天の雲にかくれひやくかうあらたにおがまれ
給しまん月のそんやうも御ぐしはやけおちて
大地にあり御しんはわきあひて山のごとし八万
四千のさうかうは秋の月はやく五ぢうの雲に
おほれ四十一地のやうらくは夜のほしむなしく
十あくの風にたゞよふけふりは中天にみち
〳〵てほのをはこくうにひまもなしまのあたり」五九オ

に見たてまつるものはさらにまなこをあてすはる
かにつたへきく人はきもたましゐをうしなへり

ほつさう三ろんのほうもんしやうげうすべて一巻
も残らすくわいろくしたにことにしてかんやう
一てうのけふりとなる我朝は云にをよはすてん
ぢくしんたんにもこれほどのほうまつあるへし
共おほえすうでん大わうのしまわうしんをみがき
びしやかつまかしやくせんたんをきざみしもわつ
かにとうしんの御ほとけ也いはんやこれなんゑん
ぶだいのうちにはゆい一ふさうの御ほとけなが
くさうそんのごあるべしともおほえざりしに
いまどくゑんのちりにましはつて久しくかな」五九ウ

しみを残し給へりほんじやく四王龍神八ぶみやう
くはんみやうしゆもおどろきさわぎ給ふらんこそ
みえし法相をうごの春日大明神いか成事をか思し
けん去ば春日野の露色かはりみかさ山の嵐の音う
らむるさまにそ聞えけるほのをの中にてやけ死ぬ
る人数をしるいたりけれは大仏殿の二かいの上に
は一千七百余人山しな寺には八百余人ある御だう
には五百よ人ある御だうには三百よ人つふさにし
るいたりけれは三千五百よ人也戦場にしてうた
るゝ大衆一千よ人はんにや寺の門の前に切懸少々
は持せて都へ上り給ふ廿九日とうの中将南都ほろ
ほして北京へ帰り入入道相国はかりぞいきとをり」六〇オ

はれてよろこばれける中宮一院上皇摂政殿以下の
人々はあく僧をこそほろぼす共がらんをはめつす
べしやとそ御なげき有けるしゆとのくび共本は大
路を渡してこく門の末にかけらるへしと聞えし
か共東大寺こう福寺のほろびぬる浅ましさに沙汰
にも及ずあそこ爰のみづやほりにそすておきける
しやうむ皇帝しん筆の御きもんには我等こうふく
せは天下もこうふくすへし我寺すいびせば天下も
すいびすべしとあそばされたりされば天下のすい
びせん事うたがいなしとそ見えたりける浅まし
かりつる年も暮治承も五年に成にけり

平家物語巻第五終　」六〇ウ

（遊紙）　」六一オ

（遊紙）　」六二ウ

（遊紙）　」一オ

（遊紙）　」一ウ

平家物語巻第六目録

しんゐんほうぎよ
紅葉　付あをひのまへ
こかう　あひひきやくたうらい
入道のしきよ
じしんばう
祇園女御
くにつなのしきよ
すのまたかつせん
しわがれこゑ
よこ田河原合戦

」二オ

（白紙）　」二ウ

平家物語巻第六目録

しんゐんほうぎよ

治承五年正月一日内裏には東国のひやうがく南都のくわさいによつてこでうはいもおこなはれず物のねもふきならさすぶがくもそうせず吉野のくずもまいらすとうしの公卿一人も参内せられすこれはうぢ寺ぜうせつに依てなり二日殿上のゐんれいもなしなんにようちひそめてきんちういま〳〵しうそみえけるふつほうわうほうともにつきぬる事こそあさましけれ法皇おほせなりけるは我十ぜんのよくんによつてばんぜうの宝位をたもつ四代のていわうを思へは子也まごなりいかな」三オ

ればばんきのせいむをとゞめられて年月を送るらん心うしとぞ御なげき有ける同き五日南都のそうがうらけつくはんせられてしやうゐんまつじもつしゆせらるしゆとは老たるもわかきもあるひは射ころされあるひはきりころされけふりのうちを出すほのほにむせんでおほくほろびにしかばたま〳〵残るともがらはさんりんにましわりあとをとゞむるものそなかりけるこうぶく寺のへつたうけりん院のそうじやうやうゐんはぶつざうきやうぐはんのけふりとなりけるをみてあなあさましとむねうちさはぎ心をくだかれけるよりやまいつき程なふうせ給ひぬ此僧正はゆうになさけふかき」三ウ

人なりある時ほとゝぎすのなくを聞て

きくたびにめつらしければほととぎす

いつもはつねの心ちこそすれ

とよんてはつねの僧正とぞいわれ給ひける今年御さいゐはあるべきとて僧名の沙汰ありしに南都のそうがうはけつくはんせられぬ北京のそうかうばかりをもつておこなわるべきかと公卿せんぎ有さればとて南都をすてはてさせ給ふべきならねは三ろんじうの学生成法いかうかくはんじゆ寺にしのひつゝかくれゐたりけるをめし出されて御

さいゑかたのごとくおこなはる上皇は去々年法皇
の鳥羽殿におしこめられさせ給ひし御事去年　」四オ
高倉の宮のうたれさせ給ひし御ありさまみやこ
うつりとて天下のさはき東国のひやうがくよろつ
御心くるしうおほしめされけるより御なうつかせ
給ひてつねはわつらはしう聞えさせ給ひしか東大
寺こうぶく寺のほろびぬるよしをきこしめされて
は御なういよ〳〵おもらせ給ふ法皇なのめならす
御なげきありけるに同き正月十四日六波羅の
いけ殿にて上皇終にほうぎよなりぬ御年廿一に
ならせおはしますある女房君かくれさせ給ひぬと
聞てなく〳〵かうそよまれける
　雲のうへに行すゑとをくみし月の
　　ひかりきえぬときくそかなしき　」四ウ
やがて其夜ひがし山のふもとせいがん寺へをくり
奉るゆふべのけふりにたゝへ春のかすみと立のほ
らせ給ひぬ八歳より御位につかせ給ひて御宇十
二年とくせい千万たんししよ仁儀のすたれたる
道をおこしりせいあんらくのたえたるあとをつき
給ふしひの御めぐみは一天をてらしびやうだうの
いつくしみは四かいの外になかれたり三明六つう
のらかんもまぬかれすげんしゆつへんげのこん者
ものかれぬみちなれはうゐむじやうのならひなれ
ともことはりすきてそおほえたるうちには八十かい
をたもちほかには五じやうをみたし給はす礼義能
しろしめされて末代のけんわうにてわたらせ給ひし」五オ
かば世のおしみ奉事は月日の光をうしなへるが
ことしかやうに人のかひも叶すたみのくわほう
のつたなき人間のさかいこそかなしけれ
　こうゑう
高くらの院御ざいゐの時人の思ひ付奉る事おそら
くはゑんぎてんりやくの帝と申ともこれには
いかてまさらせ給ふべきとそ人申ける大方はけん

王の名をあけじんとくのかうをほどこさせおはします事もきみ御せいしんの後せいだくをわかたせ給ひてそのうへの事にてこそあるにむげに此君はようしゆに渡らせたまひしよりこのかた性をにうわにうけさせおはします承安のころほひ」五ウ

は御ざいゐのはじめ御かたにて御年わづかに十歳はかりにもやならせおはしましけんこうゑうをことにあひせさせ給ひけるにある時はじかひでのいろうつくしうもみちたりけるが参りたりけれはなのめならす御かんあつて北のちんに小山をつかせこれをうへさせ紅葉の山と名付てひめもすゑいらんあるになをあきたらせおはしまさす然るをある夜嵐はげしうふいて紅葉をみなふきちらしらくゑうすこふかちうせきなりとのもりのともの
みやつこあさぎよめすとて悉是をとりすて、けり残れるゑだちれる木のはをかきあつめ風すさまし
きあしたなれはぬいどのぢんにてさけあた、めて」六オ

たへたるたき、にこそはしたりけれ大ぜんの大夫のふなりかいまだそのころ蔵人にてこうゑうの奉行承つて候ひけるか御幸よりさきにかしこへゆきて見けるに一もなしいかにと、ひけれはしか〳〵とこたふのふなり大きに色をうしなつて君のしつし思食こうゑうをかやうにしつる浅ましさよしらすなんち等きんごくるざいにもをよびのふ成も又いかなるげきりんにかあつからんすらんとおそれをの、くところに主上はいと、しくいそかせ給ひつ、夜のおとゞを御出あつて御あさまつりことよりさきにかしこへ行幸なつてゑいらんあらんとするにあとかたなししゆしやういかにと」六ウ

御たすね有けれはのぶなりそうすべきやうはなしありのま、にそ申けるてんきことに御心よけにうちゑませ給ひてりんけんにさけをあた、めて紅葉をたくと云しの心をはかれらにはたかをしへけるぞややさしうも仕つたる物かなとてかへつて

ゑいかんにあつかつしうへはあへてちよくかん
なかりけり又安元二年のふゆのすゑに主上御方
たがへの行幸の成たりけるにさらでだにけい人
あかつきをとなふこゑ明王のねふりをおとろかす
ころにも成ぬればしゆしやうはいつも御ねざめが
ちにてうちとけ御しんもならざりけりいはんやさ
ゆるしも夜のてんきことにはけしきときはむかし」七オ

ゑんぎのせいたいの国土のたみどもがいかにさむ
かるらんとて夜るのおとゞより御衣をぬかせ給ひ
ておし出させ給ひし御事までもおほしめし出して
我ていこくのいたらぬことをのみなげかせおはし
ますはるかに夜ふけ人しつまつてほととをく女の
さけぶこゑのしけるを供奉の公卿てんじやう人は
きゝもいたされさりけるにしゆしやうはきこし
めし出してたゞいまさけふはなにものそきつと見て
まいれと仰けれはうへふしたるてんじやう人上
日の者に仰する上日のもの承つてはしりめぐつて
見けるにある辻にあやしのめのわらはの長持の
ふたさけたるかなくにてそ有けるじやうにちの者」七ウ

たちよつていかにとゝいけれは御さふらへはこそ
主の女房のやう〳〵にしてしたてられてさふらひ
つるをしやうぞくを御所へ持てまいりさふらふを
只今おそろしげ成おとこ二三人出来てうばひ取て
まかりぬるぞやいまはおしやうぞくがさふらはゝ
こそ御所にもわたらせ給はめ又はか〳〵しうたち
よらせ給ふべきをしたしき人もましまさねば是を
思ふになくなりとそ申ける上日のものかめの
わらはをぐそくして御所にかへりまいり此よしを
そうしたりけれはしゆしやうあなむざん何
ものゝしわざにてかありつらんげうの代のたみは
けうのこゝろをもつて心とするゆへにみなすなほ」八オ

也今の代のたみはちんか心をもつて心とするゆへ
にかたましきもの朝にあつてつみをおかすこれ

わかはちにあらすやとそおほせける扨そのとられ
つるきぬはなに色そと仰ければしか〳〵のいろと
申中宮の御かたにさやうの色したる御衣や候と
おほせつかはされたりけれはさきのよりはるかに
いろうつくしきか参りたりけるをしゆしやうかの
めのわらはにくだし給はすとていまだ夜ふかし
又もさやうのめにもやあふとて上日のものあまた
つけさせおはしましてしうの女房のつぼねまで送
らせ給ふそかたしけなきさればあやしのしつのお
しつのめに至るまでたゝ此君のせんしうばんせい」八ウ

のほうさんをいのりたてまつる

付あをひのまへ

なによりもそのころゆふにやさしきためし申
はんへりしは中宮の御かたにさふらはれける
つぼねの女房たちのめしつかはれけるしやうとう
あをひのまへと申女房れうがんにしせきし
奉る事ありたゞあからさまの事にてもなふて
主上まめやかに御心さしふかゝりければしうの
ねうばうもめしつかはすかへつてしうのごとくに
そいつきもてなしけるそのかみのやうゑいにい
はく女をうんでもひたんする事なかれなんをうん
でもきくはんする事なかれなんはこれこうにだ」九オ

にもほうせられず女はひたりとてきさきにたつと
いへりしらす此人によごきさきともやいはれたま
はんすらんとて内々はあをひねうごなんとそさゝ
やき申けるしゆしやうこのよしをつたへきこし
めされて其後はあへてめされざりけりこれはまつ
たふ御心さしのつきさせ給へるにはあらすたゝ世
のそしりを思食はゝからせ給ふに依てなりされ
ども御心さしのつきさせ給はざりしかばつねは
御ながめがちにて供御をもつや〳〵きこしめされず
夜のおとゞにのみ入せおはします其時のせうろく
松殿このよしを聞給ひてさては左様に御心くる
しき御事のわたらせ給ふにこそ参つてなぐさめ」九ウ

奉らんとていそぎ御參内あつてさやうにゑいりよ
にかけておほしめされんする御事を御はゝかり
あつてなんのさんか候べきたゞくだんのじんをめ
さるべしぞくしやうあひたつねらるゝに及はす
やがてもとふきがゆう子に仕るべきよしを申させ
給ひたりけれは主上仰なりけるは位をしりぞひて
後はまゝさるためしありとはきこしめせとも
まさしうざいゐの時かやうの者めされたるれい
なしわか代にはじめたらんは後代のそしり成べし
とて終にきこしめしも入させ給はねはくはんばく殿
力をよはせ給はすほいなげにて御たいしゆつあり
ある時しゆしやう御手ならひのつゐてにみどんの」一〇オ
うすやうのにほひことにふかゝりけるにふるき
歌なりけれともかゝる折節をおほしめし合て
しのふれといろに出にけり我こひは
ものやおもふと人のとふまで
御心しりの殿上人給りついてあふひのまへにたふ
あふひの前給はつてれいならぬ心ち出来たりとて
里にかへり此御書をむねにあてかほにあてかなしみ
けるがうちふす事五六日あつてつゐにはかなく
なりにけりしゆしやう此由をつたへきこしめされ
てなのめならす御なげきにしつませおはします
君が一日のおんのためにせうか百年の身をあや
まつ共かやうの事をや申べきかのたうの太宗の」一〇ウ
ていじんきがむすめを元花殿に入しめんとせし時
ぎてうかていしよすでにりくしにやくせりといさ
めしによつてでんへいれられんとせし事を
やめられたりしにもまさらせたまふ御こゝろ
はせかなとそ人申ける
こがう
主上はあふひの前かことにおほしめししつませ給ひ
て御なうと聞えさせ給ひしかばなぐさめ奉らん
とて中宮の御かたより御かいしやくの女房たち
あまたまいらせられけりその中にさくら町の

中納言しげのりのきやうのむすめこがうの殿と申
てきんちう一のびしんならびなきことのじやうず」一一オ

おはしけりれんぜんの大納言りうはうのきやうの
いまだ少将にてせちゑにまいられたりしとき見
そめられし女房なり少将はじめは歌をよみ文を
つくし年月こひかなしまれけれどもなひく
けしきもなかりしにさすがなさけによはる心にや
終にはなひき給ひけり少将さいあひしてわりなく
思はれけれ共程なふ内へめされまいらせてあかぬ
わかれのなみたにや袖しほたれてほしあへす少将
よそながらも見奉る事もやとてつねは其事と
なく参内せられけりこかうどのゝすみ給ひけるつ
ぼねのまへをかなたこなたへ行とをりみすの外
にたゝすみありかれけれともつてのなさけをだに」一一ウ

もかけられす少将なさけなくおもひ給ひてある時
一首の歌を書てみすの内へそ入られける

おもひかねこゝろはそらにみちのくの
ちかのしほかまちかきかひなし

こがうの殿やがて返事をもせはやと思はれけれ共
かやうに君にめしおかれまいらせぬるうへは少将
いかにいふともことばをかはし返事をすべきに
あらずとて文をはしやうとうにとらせてみすのほ
かへになけ出されける少将なさけなくもうらめし
うは思はれけれともさすが人目もそらおそろしく
てこの文をふところにひき入つゝあゆみ出られ
けるかさるにてもとて又たちかへり　」一二オ

玉つさをいまは手にたにとらじとや
さこそ心におもひすつとも

いまは今生にてあひみん事もかたけれはいきて
ゐて人をこひしと思はんよりたゝ死なんとのみぞ
のたまひけるあふてあはざるこひも有あはで思ひ
ふかきうらみもありあはで思ふこひよりもあふて
あはさるうらみこそせんかたなくは思はれけれ此

れんぜんの少将と申すも入道相国のむこなり又
中宮御むすめにてわたらせ給へばふたりのむこを
こかうにとられて入道相国やすからすやおもはれ
けんいや〳〵このこがうかあらんかぎりは世の中
よかるましされは此こかうをとらへていかにもな」一二ウ

さはやとそ宣ひけるこがう殿このよしをつたへ聞
給ひて我身のともかうもならんはいかにも成なん
君の御事こそ心くるしけれとてある暮かたに
内裏をはしのひつゝまぎれ出行方しらずそうせ
られける主上はこがうが事におほしめししづませ
給ひてくごなんともきこしめさず御しんも打とけ
ならす入道相国此よしをつたへ聞給ひてきみは
こかうが事におほしめししつませ給ひたんなれ
さらんにとつてはとて御かいしやくの女房たち一
人もまいらせられす参内せられけるしんかたちを
もそねまれけれは入道のけんゐには、かつて参内
する人なしきんちうのありさまいま〳〵しき　」一三オ

ほど也主上はこかうが事におほしめししつませ
給ひてひるは夜るのおとゞにのみいらせ給ひよる
は南殿に出御なつて月のひかりに御心をすま
させおはしますころは八月十日あまりの事なれは
さしもくまなきそらなれとも御なみだにくもりて
月の光もおほろにぞ御らんせられけるしゆしやう
人や候〳〵と仰けれともおいらへ申者もなかり
けるにやゝあつてだいじやうの大ひつ仲国その夜
しも御前ちかふ御とのゐ申て候ひけるが仲国とお
いらへ申て参りたりいかになかくにちかふまい
れ仰合すへき事有とおほせけれはなか国御前ち
かふそ参りたるおもひもかけぬ事なれとももし」一三ウ

こがうがゆくゑやしりたると仰けれはいかてか知
まいらせ候べき主上まことやさがのおくかたおり
とゝやらんしたるうちにありと申す者のあるそ
とよあるじか名をはしらすともたつねてまいらせ
なんやとぞ仰ける仲国申けるはあるしか名をしり

候はではいかでかたやすくたつねまいらせ候べき
主上まことにもとてれうがんに御なみたせきあへ
させ給はす仲国此おほせ承るかたしけなさにつく
〳〵ものをあんずるにまことや其人の内裏にて
ことひき給ひし時つねはふゑのやくにめされて
まいりし物をたとひいつくにもおはせよ此月の
くまなきに君の御事思食出してことひき給はぬ」一四オ

事あらしさかのざいけいくほとなし打まはつて
たづね奉らんに其人のことの音ならばいつくにて
もきゝしらんするものをとおもひけれはさ候はゝた
つねまいらせて見まいらせ候はゝやたとひたつね
あひまいらせて候とも御書をたまはり候はてはう
はのそらにてもや候はんすらんと申たりけれは
しゆしやうまことにもとてやがて御書あそはしてそ
たふたりけるれうの御馬に乗てゆけとそ仰ける
仲国れうの御馬給はつて明月にむちをあけてそこ
はかとなくあこかれゆくおしかなくこの山里とゑ
いしけんさかのあたりの秋の暮さこそはあはれに
おもひけめかたおりどしたるところを見つけては」一四ウ

もしこれにやおはすらんとてひかへ〳〵聞けれ
ともことひく音はせさりけり此月のくまなきに
月のひかりにさそはれてもし御だうなんとへもや
参り給ひたるらんとてしやかだうをはじめとして
だう〳〵を「まはつてたつねまいらせけれ共こがう
の殿ににたる人だにもなかりけり内裏をばさしも
たのもしけに申て出ぬたづぬる人にはいまだあ
はすむなしう帰り参りたらんは中〳〵あしかり
なん是よりいつかたへも落行ばやとは思へとも
いつくか王土ならぬ身をかくすへきやどもなし
いかゞせんとおもひわつらふまことやほうりんは程
ちかけれはもしそなたのかたへもやまいりたまひ」一五オ

たるらんとてほうりんのかたへと行ほどにかめ
山のかたりちかく松の一むらあるかたにかすかに

ことぞ聞えけるみねの嵐か松かせかたつぬる人の
ことのねかおほつかなくは思へ共こまをはやめて
うつ程にかたおりどしたる内にことをそひきすま
しけるすこしもまかふべからすこかうの殿のつま
音也がくは何そとき丶けれはおとこを思ふてこふ
とよむさうふれんをそひかれけるがくしもこそ
おほきに只今此かくをひき給ふ事よいとをしや
この人もいまだ君の御事をはおほしめしわすれ
ざりけりとうれしくてやうでうすこしねとりむま
よりとんでおり門ほと〳〵とたゝきければこと　」一五ウ

をははやひきやみ給ひぬ是は内裏より仲国と申者
がお使に参つて候あけられ候へ〳〵とてたゝけ共
〳〵とがむるをとはせさりけりやゝあつて内より
人の来るをとのしけれはうれしくて待所にじやう
をはつし門をあけいたひけしたる小女房のかほ
はかりさしいたしてこれは内裏なんどより御使
給りぬべきところにてもさふらはすいかさまにも
門たがへにてもやさふらふらんと申けれは仲国
返事せはかとたてられじやうさゝれてはあしかり
なんとやおもひけんやがておしあけてそ入にける
こがうの殿のすみ給ひけるつまどのまのゑんに
よりゐて申けるはいかてかゝる御すまゐにてわた」一六オ

らせ給ひ候そや君は御事ゆへにおほしめしししつ
ませ給ひてくごなんともきこしめさす御しんも打
とけならすたゝうはのそらとおほしめされて候か
御書を給はつてまいりて候物をとてありつるねう
ばうして君の御書を奉るひらひて見給へばまことに
きみの御しよなりやがて御返事あそはして引む
すびつゝ女房のしやうぞく一重そへて出されたり
仲国ねうばうのしやうそくかたにうちかけて申
けるは余の御つかひにても候はゝ御しよの御へんし
のうへは子細候ましけれとも君の内裏にてこと
ひかせ給ひし時つねはふゑのやくにめされて参り
候ひしその御奉公をはいつしか思食ゑさせ給て候」一六ウ

やらんぢきの御返事うけたまはらさらんはくち
おしう候ひなんすと申ければこがうの殿有へし
とや思はれけんみつから返事し給ひけりそこにも
さだめてしられたるらんやうに太政の入道殿のあ
まりにおそろしき事をのみのたまふときゝしが
浅ましさにある暮かたに内裏をばしのひつゝまぎ
れ出かゝるすまゐにてありつれはことなんとひく
事もなかりつるにあすのころより小原のへんに
思立事のさふらふあひたあるじの女房がこよひ
はかりのなごりをおしみつゝ夜もはやふけぬ今は
たちきくものもあらしなんとやう〳〵にこしらへ
おくほとにさぞなむかしの事もゆかしくて手　」一七オ

なれしことをひくほどにやすくも聞出されける
よとてなみたにむせび給へは仲国も袖をそぬらし
けるなかくに申けるはあすのころより小原のへん
におほしめし立御事と候はいかさまにも御様
なんとかへらるへきにて候やらん有べうも候はす
あるじのねうばうこの人出しまいらするなとて
めしぐしたりけるめぶきつじやうなんと申すおと
こをとゞめおきそのいゑをしゆごせさせわか身は
内裏へ帰りまいりけれは夜ははやほの〳〵とぞ明
にけるれうの御馬つなかせつゝねうばうのしやう
ぞくはね馬のしやうじになげかけ今ははや入御も
はるかになりぬらんたれしてか申べきなんと　」一七ウ

おもひ南殿のかたへと行ほどにいざよひの月は
はやなんていをわたつて西の中門へさし入とも
君は夜るのおとゞへも入せたまはす仲国を御まち
かほにてゆふべの御座にそまし〳〵ける南にかけ
り北にむかふかんうんの秋のかりにつけかたし
東に出西にながるたゝせんばうをあかつきの月
によすとたからかにゑいせさせ給ふところに仲国
つつと参りこがうの殿の御返事を奉る主上なのめ
ならす御かん有て仰合すへき者もなきにゆふさり
なんちむかへよかしとおほせけれはなかくに平家

の帰りき、給はん所はおそろしう思けれ共ちよく
でうなりけれはぎつしやきよけに沙汰しさがに　」一八オ

まいりむかふこがうどのしきりに参まじきよし
申されけるをやう〳〵にこしらへくるまにとり
のせ奉り内裏へまいりけれはかすかなる所にしの
はせて主上夜な〳〵めされける程にひめ宮一所
出来させ給ひけりこのひめみやと申ははうもん
の女院の御事なり入道相国何としてかもれき、
給ひたりけんこかうがうせたりといふ事はあと
かたなきそらこと成けりとてこかうの殿をとらへ
つ、あまになしておつはなたるこかうの殿出家は
本よりののそみなりけれ共こ、ろならずあまに
なされて年廿三こきすみそめにやつれはて、さ
かのへんにそすまれけるうたてかりし事とも　」一八ウ

なりかやうの事とも御なうつかせ給ひつ、終
にほうぎよなりけるとぞ聞えし

あひ

法皇は打つ、き御なげきのみぞしげかりける去る
ゑいまんには第一の御子二条の院ほうぎよなりぬ
安元二年の七月には御まご六条の院かくれさせ
給ぬ天にすまばひよくの鳥地にすまはれんりの
ゑだとならんとかんかのほしをさして御契りあさ
からざりしけんしゆんもんゐんはゆふべのきり
におかされてあしたの露ときえさせ給ひぬ年月は
かさなれ共昨日けふの御わかれのやうにおほしめし
て御なみだもいまだつきせぬに治承四年の五月　」一九オ

には第二の王子高倉の宮うたれさせ給ひぬげんぜ
後生たのみおほしめされつる新院さへさきたゝせ
給ひぬれはとにかくにかこつかたなき御なみた
のみそすゝみけるかなしみのいたつてかなしきは
老て後子におくれたるよりもかなしきはなしうら
みのいたつてうらめしきはわかふしておやに
さき立よりもうらめしきはなしとかのあさつなの

相公の子息すみあきらにおくれて書たりけん筆の
あと今こそ思食しられけれさるまゝには一乗めう
てんの御どくしゆもおこたらせ給はす三みつ行
法の御くんじゆもつもらせ給ひけり天下りやう
あんに成しかば大宮人もをしなへて花のたもとや」一九ウ

やつれけん入道相国かやうにいたくなさけなふ
ふるまひおかれし事をさすがおそろしくや思
はれけん法皇なぐさめまいらせんとてあきのいつ
くしまの内侍がはらの御むすめ生年十八になり
給ふがゆふにはなやかにおはせしを法皇へまいら
せらる上らう女房たちあまたえらまれてまいらせ
られけり公卿殿上人おほく供奉してひとへに女御
参りのごとくにてそ有ける上皇かくれさせ給ひて
後わづかに二七日だにも過ざるにしかるべからす
とそ人々ない〳〵はさゝやきあはれける

ひきやくたうらい

そのころしなのゝ国に木曾のくはんじや義仲と云」二〇オ

源氏ありと聞えけりこれは故六条の判官為義が次
なんたちわきのせんじやうよしかたが子なりちゝ
よしかたはきうじゆ二年八月十六日鎌倉の大
くらがたちにしてあく源太よしひらがためにちう
せられぬ其時よしなか二さいなりしを母なく〳〵
いたひてしなのにこへ木曾の中三かねとをが
もとに行て是いかにもしてそだてゝ人になして
見せ給へといひけれはかねとをうけ取てかい〳〵
しう廿余年やういくすやう〳〵長大するまゝに
ちからも世にすくれてつよく心もならびなくかう
なりけりありかたきつよゆみせいひやう馬のうへ
かちだちすべて上古の田むらとしひと与五将軍

」二〇ウ

ちらいほうしやうせんそらいくわう義家の朝臣と
いふともいかてかこれにはまさるへきとそ人申
けるかねとをにぐせられてつねは都へのぼり平家
の人々のふるまひ有様をも見うかゝひけり十三で
げんぶくしけるも八幡へ参り八幡大ほさつの御前

にて我四代のそぶよしいゑの朝臣は此御神の御子
と成て名を八まん太郎とかうしきかつうはその
あとを思ふへしとて八まん大ほさつの御宝前にて
もととりあけ木曾の次郎よしなかとこそついたり
けれある時めのとのかねとをめして宣ひけるは
兵衛の佐頼朝すでにむほんをおこし東八ケ国を打
したかへてとうかいだうよりせめ上り平家をおい」二一オ

おとさんとするなりよしなかもとうせんほくろく
両道をしたかへて今一日もさきに平家をせめ落し
たとえは日本国のふたりの将軍といはればやと
ほのめかしけれは中三かねとを大きによろこふて
そのれうにこそ君をば今まてかういくし奉りつれ
かう仰らるゝこそまことに八まん殿の御末共おぼゆ
れとてやがてむほんをくわたてけりかねとをくわ
いふん候べしとてしなのゝ国にはねの井の小野
太しげのゝゆきちかをかたらふにそむく事なし
これをはじめてしなの一国になひかぬ草木もな
かりけり上野の国にはなはの太郎ひろすみをさき
としてこたちわきのせんしやうよしかたがよしみ」二一ウ

に依て田子のこほりのつはものともみなしたがひ付
にけり平家すゑになる時をえて源氏年来のそ
くわいをとげんとす木曾といふ所はしなのにとつ
ても南のはしみのゝさかひなりけれは都もむけに
程ちかし平家の人々もれ聞て東国のそむくだに
あるにこはいかにとそさはかれける入道相国の
給ひけるは其もの心にくからず思へはしなの一国
の兵ともこそしたかひつくと云とも越後の国には
与五将軍のばちよう城の太郎すけなが同き四郎
すけもちこれらは兄弟ともにたせいの者共なり仰
くだされたらんするにやすふうつてまいらせん
すると宣ひけれはいかゝあらんすらんと内々はさゝ」二二オ

やく者もおほかりけり二月一日越後の国の住人
城の太郎すけなが越後のかみにんずこれは木曾

ついたうせられんするはかりこと、そ聞えし同き
七日大臣以下の家々にてそんせうたらにふどう
明王のじくのしゆを書くやうせらるこれ又ひやう
らんつ、しみのためなり同き九日河内の国いし河
のこほりにきよぢうたりける武蔵のごんのかみ
入道よしもと子息いし河の判官代義兼平家をそむ
いて兵衛の佐頼朝に心をかよはしてすでに東国へ
落行べきよしきこえしかは入道相国やがてうつ
手をつかはさるうつ手の大将には源大夫の判官
すゑさだつの判官もりすみ都合そのせい三千余騎」二二一ウ

ではつかうす城の内には武蔵のごんのかみ入道義
もと子息判官代義兼をさきとしてそのせい百騎
ばかりには過ざりけり時作り矢合して入かへ〳〵
すこくた、かふ城のうちの兵共手のきわた、かひ
うち死する者おほかりけりむさしのごんのかみ
入道よしもとうちしにすしそくいし河の判官代
よしかぬはいた手おふていけどりにせらる同き十

一日よしもと法師がかうべ都へいつて大路をわた
さるりやうあんにぞくしゆをわたさる、事ほり川
の天皇ほうぎよの時前のつしまのかみ源のよしち
か、かうべをわたされしれいとそ聞えし同き十二
日ちんせいよりひきやくたうらい宇佐の大ぐうじ
」二三オ

きんみちが申けるはきうしうのものとも尾方の
三郎をはじめとしてうすきへつきまつらたうに
いたるまて一かう平家をそむいて源氏に同心の
よし申たりけれは東国北国のそむくたにあるに
こはいかにとて手を打てあさみあへり同き十六日
伊予の国よりひきやくたうらい去年のふゆより
河野の四郎道清をはじめて四国のもの共みな平家
をそむいて源氏にとうしんのあひだ備後の国の
住人ぬかの入道さいしやく平家に心さしふかゝり
けれはいよの国へおしわたり道前道後のさかい
高直のじやうにて河野の四郎みちきよをうち候ぬ
しそく川野の四郎みちのぶも父がうたれける時
」二三ウ

あきの国の住人ぬたの次郎は母方のおち成けれは
それへ越て有あわず河野の四郎みちのぶ父をうた
せてやすからぬものなりいかにもしてさいしやく
をうつとらんとそうかゝひけるぬかの入道さい
しやく河野の四郎道清をうつて後四国のらうせき
をしつめ今年正月十五日に備後のともへおし
わたりゆうくんゆう女共めしあつめてあそびたは
ふれさかもりけるが前後もしらすゑいふしたる所
に河野の四郎おもひきつたる者とも百余人あひ
かたらふてはつとおしよすさいしやくが方にも三
百余人ありけるか兵ともにわかの事なれは思も
まうけずあはてふためきけるをたてあふ者をば射」二四オ

ふせきりふせまづさいしやくをいけどりにして
伊予の国へおし渡るちゝがうたれし高直の城へ
さけもて行引すゑてくびを切たりとも聞えけり
又はつつけにしたりとも聞えけり其後四国の
つはものともみな河のゝ四郎にしたかひつく熊野
のべつたうたんぞうは平家ぢうおんの身なりしが
是をそむひて源氏に同心のよしきこえけりをよそ
東国北国悉そむきの南かい西かいかくのごとしい
てきのほうきみゝをおとろかしけきらんのぜん
べうしきりにそうす四いまちまちにおごれり世は
只今うせなんすとてかならず平家の一門ならね共
心有人々のなげきかなしまぬはなかりけり」二四ウ

入道しきよ

同き廿三日院の殿上にて公卿せんぎ有前の右大将
宗盛の卿申されけるはばんどうへうつ手はむかふ
たりといへともしいたしたる事も候はす今度は
むねもり大将軍を承てむかふべきよし申されけれ
ばしよきやうしきだいしてゆゝしう候ひなんすと
そ申されける法皇なのめならす御かんあつて公
卿も殿上人もぶくはんにそなわりきうせんにたつ
さはらん人々はむねもりを大将軍にて東国北国の
けうとらついたうすべきよし仰下さる同き廿七日

前の右大将むねもりのきやう源氏ついたうの為に
東国へむかはるべきにてすてに門出と聞えしか　」二五オ

とも入道相国いれゐの御心ちとてとゞまり給ひぬ
明日廿八日入道ぢうひやうをうけ給けりとて京中
六波羅すはしつるはさ見つる事をとそさゝやき
ける入道相国やまいつき給ひし日よりして水だに
のどへも入たまはす身の内のあつき事火をたく
がことしふし給へるところ四五間がうちへ入者は
あつささへかたしされば ちかふ参りよる者そなか
りけるたゞのたまふ事とてはあつや〳〵とばかり也
是たゞ事とはみえざりけりひゑい山より千手井
の水をくみくだしいしの舟にたゝえてそれに
おりてひへ給へは水おびたゝしうわきあかつて程
なくゆにそ成にけるもしやたすかり給ふとかけひ」二五ウ

の水をまかせたれはいしやくろかねなとのやけた
るやうに水ほどばしつてよりつかずをのづから

あたる水はほむらと成てもえけれは黒けふり殿中
にみち〳〵てほのほうずまいてあかりけりむかし
ほうざう僧都といつし人ゑんわうのしやうにおも
むいて母の生所をたつねしにゑんわうあわれんて
ごくそつを相そへてせうねつぢこくへつかはさる
くろかねの門の内へさし入はりうせいなどのごと
くにほのをそらへ立あがりて百ゆじゆんにをよび
けんも今こそおもひしられけれ入道相国の北の方
二位殿の夢に見給ひける事こそおそろしけれ
みやう火のおびたゝしくもゑたるくるまの主も　」二六オ

なきを門の内へからとやりいれたりくるまの前後
に立たる者はあるひは馬のおもてのやうなる者も
ありあるひはうしのおもてのやうなるものもあり
くるまのまへにはむといふ文字ばかりみえたる
くろがねのふだをぞ立たりける二位殿ゆめのうち
にあれはいつくよりそと御たづねあればゑんまの
ちやうより平家太政入道殿の御むかひにやしや

きじんとうが参つて候と申さてそのふだは何と云
ふだそとゝひ給へはなんゑんぶだいこんどう十六
ぢやうのるしやなぶつやきほろほし給へるつみに
よつてむけんのそこにおち給ふべきよしゑんまの
ちやうに御さだめ候がむけんのむをは書れてけん」二六ウ

の字をはいまだかゝれぬなりとそ申ける二位殿
うちおどろきあせ水にこそなられけれなによりも
おそろしかりしは春日大明神の立かけらせ給ふか
とおほしくておしかの大きなるが五つ六つ打つれ
て入道相国のふし給ひけるうへをかなたこなたへ
こゆるやうにそみえけるれい仏れい社にこんごん
七宝をなげ馬くらよろひ甲弓矢太刀かたなに至る
まてとりいたしはこび出しいのられけれともその
しるしもなかりけりなん女のきみたちあとまくら
にさしつどいていかにせんとなきかなしみ給へ共
叶べし共みえざりけり同きうるう二月二日二位殿
あつうたえかたけれ共御まくらちかふよつてなく」二七オ

〳〵の給ひけるは御ありさま見奉るに日にそへて
たのみすくなくこそみえさせ給へ此世におほしめし
おく事あらばすこし物のおほえさせ給ふとき仰
られおけとぞの給ひける入道相国さしも日比は
ゆゝしけにおはせしかともまことにくるしけにて
いきのしたにの給ひけるは我保元平治より以来
度々のてうてきをたいらけけんじやう身にあまり
忝もていそとなりくはん太政大臣にいたりゑいくわ
しそんに及今生ののそみ一事も残所なし其上
しやうをうくる物の死をのがるゝ事あらず我一人
にかきらねはすこしもおとろかぬそとよたゞし
思ひおく事とては伊豆の国の流人前の兵衛の佐　」二七ウ

頼朝がくびを見さりつるこそやすからねわれいか
にも成なんのちはだうとうをもたつべからすけう
やうをもすべからすやがてうつ手をつかはして
よりともがくびをきつて我はかのまへにかくへし
それぞけうやうにてあらんするとの給ひけるこそ

つみふかけれ同き四日ねつひやうにせめられせ
めての事にいたに水をおいてそれにふしまろび
給へ共たすかる心ちし給はすもんぜつびやくぢし
て終にあつち死にそし給ひける入道うせ給へり
といふ程こそありけれ京中六波羅に馬くるまの
はせちかふ音天をもひびき地もゆるく程なり一てん
の君万乗の主のいかなる御事おはしますとも是　」二八オ

には過しとぞみえし今年は六十四になり給ふ
老生にと云べきにはあらねどもしゆくうんたちまち
につき給へは大法ひほうのかうげんなく神明
三宝のゐくはうもきえしよてんもおうごし給はす
いはんやぼんりよにおいてをやいのちにかはり
身にかはらんとちうを存せし数万のぐんりよは
たう上たうかになみゐたれとも是は目にもみえす
ちからにもかゝはらぬむじやうのせつきなれはざ
いじもたゝかひかへさすまくらをならへふすまを
かさねしさいせうもくわうせんのたひへはとも

なはす又も帰りこぬ四手の山三づの川くわうせん
中うのたびのそらにたゞ一ところこそおもむき　」二八ウ

給ひけめ日比作おかれしざいごうばかりやごく
そつと成てむかへにも来りけんあはれなりし事
ともなりさてしもあるべきならねは同き七日お
だきにてけふりになし奉りこつをはおぢのゑん
じつほうげんくびにかけつの国へくだりきやうの
島にぞおさめけるさしも日本一しうに名をあげゐ
をふるひし人なれとも身は一時のけふりと成て
都のそらに立のぼりかばねはしはしやすらひて
はまのまさごにたいぶれつゝむなしき土と成給ふ
やかてさうそうの夜ふしぎの事あまた有玉をみ
がき金銀をちりばめてつくられたりし西八条殿其
夜にわかにやけぬ人の家のやくるはつねのならひ」二九オ

なれとも折節こそあるに浅ましかりし事共也
なにものゝしわざにや有けんほうくわとそ聞えし

又その夜六波羅の南にあたつて人ならは二三十
人がこゑしてうれしや水なるはたきの水といふ
ひやうしを出してまひおどりどつとわらふこゑ
しけり去ぬる正月には上皇かくれさせ給ひて
天下りやうあんになりぬわづかに中一両月をへだ
てゝ入道相国こうせられぬあやしのしづのをしつ
のめに至るまでもいかてかうれへざるべきこれは
何様天ぐのしよゐといふ沙汰にて平家の侍の中
にはやりおの若者とも百余人わらふこゑに付て
たつね行て見れは院の御所法住寺殿に此二三　」二九ウ

年は院も渡らせ給はす御前あつかり備前のぜんじ
もとむねと云ものありかのもとむねが相しつたる
者とも二三十人夜にまぎれて来りあつまりさけを
のみけるがはじめはかゝるおりふしに音なせそとて
のむほどに次第にのみゑいてかやうにまひおどり
けるなり六波羅の若者共ばつとおしよせてさけの
ゑい共一人ももらさす三十人はかりからめとつて
六波羅へ引てまいり前の右大将宗盛の卿のおはし
けるつほの内にそひつすゑたる事の子細を能々
たつね聞給ひてけにもそれほどにゑいたらんもの
をは切へきにもあらずとてみなゆるされけり人の
うせぬるあとにはあやしの者もあさゆふにかね　」三〇オ

うちならしれいじせんほうなとよむ事はつね
のならひなれとも此ぜんもんこうせられぬる後は
ゆいこんがらに供仏せそうのいとなみといふ事
もなしあさゆふはたゝ軍合戦のはかりことより
外はたじなしとぞみえたりける

じしんばう

入道相国をこそはさいごのしよらうの有さまこそ
うたてけれともまことにはたゞ人ともおほえぬ事
ともおほかりけり日吉の社へ参給ひしにもたう家
他家の公卿おほく供奉して摂籙のしんの春日の御
参宮氏人など云共是にはいかてかまさるべきとそ
人申ける又何事よりも福原のきやうの島つゐて　」三〇ウ

いまの世に至るまで上下わうらいの舟のわつらひ
なきこそ目出度けれかの島は去ぬるおうほう元年
二月上じゅんにつきはじめられたりけるが同
年の八月ににわかに大風ふき大なみ立てみなゆ
りうしなひてき又同き三年三月下じゅんに
阿波のみんぶ重能を奉行にてつかせられけるが
人はしら立おかるべしなと公卿せんぎありしか
どもこれはざいごうなりとていしのおもてに一切
きやうを書てつかれたりけるゆへにこそきやうの
島とは名付たれふるひ人の申されけるは清盛公は
あくにむと思へ共まことにはじゑ大僧正のさいたん
なりその故はつの国ありまのこほりにせいてう寺」三一オ

と云山てらありかの寺の住僧じしんばうそんゑと
申けるはもとはゑい山のかくりよたねん法花の
持者なりしかるに道心をおこしりさんして此寺に
年月を送けれはみな人これをきゑしけり去
承安二年十二月廿二日の夜けうそくによりかゝり
て法花きやうよみ奉りけるがうしのこくばかりに
ゆめともなくうつゝともなく年五十はかりなる
おとこのじやうゑに立ゑぼしきてわらんづはゝき
したるがきて文を持て来れりそんゑあれはいつく
よりの人そとゝひければゑんま王宮よりの御使
なりせんじの候とてたて文をそんゑにわたすそん
ゑこれをひらひて見ればなんゑんぶだい大日本国」三一ウ

つのくにせいてう寺のじしんばうそんゑ来廿六日
ゑんまらじやう大こくてんにして十万人のぢ
きやうしやをもつて十万部の法花きやうをてんど
くせらるべきなりかならずさんけいせらるへく候
ゑんわうせんに依てくつしやうくだんのごとし
承安二年十二月廿二日ゑんまのちやうとぞ書れ
たるそんゑいなみ申べき事ならねはさうなふ
りやうじやうのうけ文を書て奉るとおほえて夢は
さめにけり偏に死去の思ひをなして院主のくわう
やうばうに此事をかたるにみな人きどくの思ひを

なすそんゑくちにみだのみやうがうをとなへ心に
ゐんぜうのひくはんをねんずやう〳〵廿五日の夜院」三二オ
に及でじやうぢうの仏前にいたりれいのごとく
けうそくによりかかつてねんぶつどくきやうす
ねのこくにおよんでねふりせつなるがゆへにぢう
ばうにかへつてうちふすうしのこくはかりに又
さきのことくじやうゑしやうそくなるおとこ二人
きたつてはや〳〵参へしとすゝむるあひたゑん
わうせんをじせんとすればはなはたそのおそれ有
さんけいせんとすれはさらにゑはつなし此思ひを
なす時じやうゑじねんに身にまとつて肩にかゝり
天よりこかねのはち下る二人のどうじ二人の従
僧十人の下そう七宝の大しやじはうの前にげんず
そんゑなのめならすよろこふてそくじにくるま」三二ウ
にのる従僧等西北のかたにむかつてこくうを
かけつてほとなくゑんま王宮に至りぬわうぐうの
ていを見るにぐわいくわくべう〳〵としてその内
くわう〳〵たり其中に七宝所成の大極殿ありかう
くはう金色にしてほんぶのまなこにをよびかたし
其日のほうゑ終て後しゆぞうみな帰る時そんゑ南
方の中門に立てはるかに大こくてんを見わた
せはみやうくはんみやうしゆゑんま法皇の御前に
かしこまるそんゑありがたきさんけいなり此次で
に後生の事たつね申さんとて大こくてんへ参る
其あひだに二人のどうしかいをさし二人のじゆ僧
はこを持十人のげそうれつを引てやう〳〵あゆみ」三三オ
近付ときゑんま法皇みやうくわんみやうしゆみな
まかりむかふたもんぢこく二人のどうしにげんじ
やくわうぼさつゆぜほさつ二人のしゆそうにへん
す十らせつによ十人の下そうにげんしてすいつく
きうじし給へりゑんま法皇よそうはみな帰りさん
ぬなんち一人来れる事いかにとのたまへはそん
ゑ申されけるはそれ法花は三世のしよ仏の出世の

ほんぐわいしゆじやう成仏のぢき道なり一け一く
のくどくは五はらみつのぜんごんにもこえ五十
てん〳〵のずいきは八十ケ年のふせにもこえたり
とこそみえて候へ然は我わかふより法花てんどく
おこたらずされともいまだしやうじゆを存せず後　」三三ウ

生のざい所承度候と申されけれはゑんわうこたへ
てのたまはくわうじやうふわうじやうは人の信ふ
しんに有とみえたりぜんをしゆする者はぜん所に
生れあくをしゆするものはあく道にだすたゞし
なんぢかさぜんの文ばこ南方のほうざうにあり
取出て一しやうのぎやうけだのひもん見せんとて
みやうくはんにちよくしてこりにつるはさる
みやうくはんに承り南方のほうざうに行て一の文
ばこを取てまいりたりすなはちゑんわうふたをひら
ひてよみ聞すみやうくはん筆をそめて一々に是を
かくそんゑひたんていきうしてたゝねがはくは
しゆつりしやうじの方法ををしへせう大ぼだいの　」三四オ

ぢき道をしめし給へと申されけれはゑんわうあひ
みんけうけしてしゆ〳〵のけをじゆす
さいし王位ざいけんぞく　死去む一来相しん
じやうずいごうきけばくが　じゆくけうくはんむ
へんざい　此けをしゆし終てそんゑにふぞくせり
そんゑなのめならすよろこび日本の平相国と申
人のつの国和たのみさきをてんして四めん十余町
に屋を作り今日の十方そうゑのごとくぢきやう者
をおほくくつしやうしてばうことに一めんに座に
つけせつほうどつきやうていねいにごんぎやう
をいたされ候と申けれはゑんわうずいきかんたん
してくだんの入道はたゞ人にあらすじゑ僧正の　」三四ウ

けしんなりてんだいの仏法ごぢのために日本に
さいたんするゆへに我まい日に三度かの人をらい
する文ありすなはち此もんをもつてかの人に奉る
へしとてそんゑにわたさるそのもんにいはく
きやうらいじゑ大僧正てんだい仏法おうごしやじ

げんさいしよ将軍しんあくごうしゆじやうどうり
やくそんゑこれをうけたまはつて大極殿の南方の
中門をいつる時くわんじら十人門外に立て
くるまにのせ前後にしたかふ又こくううをかけつて
かへり来るとおほえて夢の心ちしていき出にけり
そんゑ是をもつて西八条へ参り入道相国にまいら
せたりけれはなのめならすよろこふてやう〳〵に
もてなしさま〳〵の引出物ともたふてそのけん
じやうにりつしになされけるとそ聞えし扨こそ
清盛公をはじゑ僧正のさいたん也と人しりてけり
ぢきやう上人と申はこうほうだいしのさいたん
白河の院はぢきやう上人のけしんなりされば此君
はくどくのはやしをなしぜんごんのとくをかさね
させおはします末代にも清盛公あくごうもぜん
こんもともにこうをつみて世の為人のためじたの
りやくをなすとみえたりかのだつたとしやくそん
どうしゆじやうのりやくにことならず」三五オ

祇園女御

又ある人の申けるは清盛は忠盛が子にはあらす」三五ウ
まことには白河の院の王子なりそのゆへは去ぬる
ゑい久のころほひ祇園女御と聞えしさいわひじん
おはしけりくだんの女房のすまゐし所は東山の
ふもときをんのへんにてぞありけるしら川のゐん
つねは御幸成けり有時殿上人一両人ほくめん少々
めしぐしてしのひの御幸ありしにころは五月
廿日あまりのまだよひの事なれは目さす共しら
ぬやみではあり五月雨さへかきくらしまことにいふ
せかりけるにくだんの女房の宿所近きはやしの中
を過させ給へりある御だうのかたはらに光物出来
たりかしらにはしろかねのはりをみがきたてたる
やうにきらめき左右の手とおほしきをさしあげ」三六オ
たるがかた手にはつちのやうなる物をもちかた手
にはひかるものをそもつたりける君もしんもあな

おそろし是はまことのおにとおほゆる手にもてる
物はきこゆるうちでの小づちなるべしいかゝせんと
さはがせおはしますところに忠盛そのころは未
ほくめんの下ろうでぐぶしたりけるをめしてなん
ぢそあるらんあのものいもとゞめ切もとゞめなん
やと仰けれは忠盛かしこまり承て行むかふ内々
おもひけるは此ものさしもたけきものとはみえす
きつねたぬきなとにてそ有らんこれを射もころし
切もころしたらんはむけにねんなかるへしいけ
どりにせんとおもふてあゆみよるとはかり有ては」三六ウ

さつと光とはかりあつてはさつとひかり二三度し
けるを忠盛はしりよつてむずとくむくまれてこは
いかにとさはくこゑをきけばへんげのものにては
なかりけりはや人にてそありけるその時上下手々
に火をともいてこれを御らんじ見給ふに六十
ばかりの法師なりたとへは御だうの承仕ほうしで
ありけるが御あかしまいらせんとてかた手には手
がめといふものにあぶらを入てもちかた手にはか
わらけに火を入てそ持たりける面はゐにいてふか
ぬれじとてかしらには小ばくのわらをかさのやう
にひきむすんでかづいたりかわらけのひがにむぎ
のわらにかゝやいて銀のはりのやうにみえける也
」三七オ

事の体一々にあらはれぬ院おほせなりけるは是
を射もころし切もころしたらんにはいかにねん
なからん忠盛がふるまひやうこそしりよふかけれ
弓矢取身はやさしかりけりとてそのけんじやうに
さしも御さいあひと聞えし祇園の女御を忠盛に
こそたふたりけれさてかの女御御子をはらみ給へ
りうめらん子によ子ならはちんが子にせんなん子
ならば忠盛が子にして弓矢取身にしたてよと仰
けるにすなはちなんをうめり此事そうもんせん
とうかゞひけれ共然べきびんぎもなかりけるに
ある時白河の院熊野へ御幸なりけるにきいのくに
いとが坂といふ所に御こしかきすへさせしばらく
」三七ウ

御きうそくありけりやぶにぬかごのいくらもあり
けるを忠盛袖にもり入て御前へまいり
　いもが子ははふほどにこそなりにけれ
と申たりけれは院やがて御こゝろへあつて
　たゞもりとりてやしなひにせよ
とぞ付させまし〳〵けるそれよりしてこそ我子と
はもてなしけれこの若君あまりに夜なきをし給ひ
ければ院きこしめされて一しゆの御ゑいをあそ
ばひてくだされけり
　夜なきすとたゞもりたてよすゑの世に
　きよくさかふる事もこそあれ
さてこそ清盛とは名乗れけれ十二の年兵衛の佐　」三八オ

になり十八の年四位して四位の兵衛の佐と申
せしを子細存ぜぬ人はくわそくの人こそかうはと
申せは鳥羽院はしろしめされて清盛がくわそく
は人におとらじとそ仰けるむかしもてんち天皇
はらみ給へる女御を大しよくわんに給ふとてこの
ねうごのうめらん子によ子ならばちんが子にせん
なん子ならはしんが子にせよと仰けるにすなはち
なんをうみ給へはたうのみねの本ぐはんぢやうゑ
くわしやう是也上代にもかゝるためしありけれは
末代にも平相国まことにしら河のゐんの御子にてお
はしけれはにやさばかりの天下の大事都うつし
なと云たやすからぬ事をも思立れけるにこそ　」三八ウ

くにつなしきよ
同きうるふ二月廿日五条の大納言国つなの卿うせ
給ひぬ平相国とさしも契りふかふ心さしあさから
ざりし人なりせめてのちぎりのふかさにやおなじ
日にやまひ付て同年の同月にそうせられける
此大納言と申はかねすけの中納言より八代のはち
ゑう前の右馬のすけ守国の子也蔵人にだにならす
しんしのざうしきにて候はれしが近衛の院御
ざいゐの時仁平のころほひ内裏にわかにぜうまう
出来り主上南殿に出御ありしか共近衛づかさ一

人も参られずあきれて立せおはしましたるところにこのくにつなようよをかゝせてまいりかやうの」三九オ

時はかゝる御こしにもめさるゝものにて候とそうしけれは主上是にめして出御ありなにものそと御たつねありけれはしんしのさうしき藤原のくにつなと名乗申かゝるさか〳〵しきものこそあれめしつかわるへしとて其時の殿下ほうじやう寺殿へおほせあわせられけれは御りやうあまたたびなとしてめしつかはれけるほどにおなし御門の御代に八幡へぎやうがうありしがじんちやうがさけにゑいて水にたわぶれ入てしやうぞくをぬらしさかぐらちゝしたりけるにこの国つなしんべうにこそ候はねともじんちやうがしやうそくは持せて候とて一く取出されたりければこれをきて」三九ウ

さかぐらとゝのへそうしけりほどこそすこそおしうつりたりけれとも歌のこゑもすみのぼりまひの袖ひやうしいあふておもしろかりけり物の身にしみておもしろき事は神も人もおなじこゝろなり

むかしあまのいわとをおしひらかれけん神代のことわざまでといまこそおほしめしられけれこのくにつなのせんぞに山かげの中納言と云人おはしき其子にじよむ僧都とてちゑさいかく身にあまりじやうぎやうじりつの僧おはしけりしやうたいのころほひくわん平法皇大井河へ御幸ありしにくはんじゆ寺の内大臣高藤公の御子いつみの大将さだくに小倉山のあるしにゑぼしを川へふき入」四〇オ

られ袖にてもとどりをおさへせんかたなくてたゝれたりけるに此しよむそうづ三衣のはこの内よりゑほしを一つ取出されたりけるとかや彼そうつは父山かげの中納言だざい大弐に成てちんせいへくだられける時二歳なりしをけいぼにくんであからさまにいたくやうにしてうみにおとし入ころさんとしけるを死にけるまことの母存生のとき

かつらのうかひがうのゑにせんとてかめを取て
ころさんとしけるをき給へるこそでをぬきかめに
うへてはなたれたりしがそのおんをほうぜんと
にやらんこの若君をおとしいれける水のうへに
うかれ来てこうにのせてそたすけたりけるそれは」四〇ウ

上代の事なれはいかゝありけん末代にくにつな
の卿の高名ありがたかりし事ともなり法性寺
殿の御世に中納言になるほうじやうじどのかくれ
させ給ひて後入道相国存するむねありとて此人に
かたらひより給へり大福長者にておはしければ
何にてもかならずまい日に一しゅをは入道相国の本
へ送られけりげんぜのとくいこの人に過べからず
とて子息一人やう子にして清国と名乗らせ又入道
相国の四なんとうの中将しげひらはかの大納言の
むこなり治承四年の五節は福原にておこなはれ
けるに殿上人中宮の御かたへすいさんしてある
うんかくのたけしやうほにまだらなりくもこしつ」四一オ

のあとにこなと云らうゑいをせられたりけれは
この大納言立聞してあな浅ましこれはきんきと
こそうけたまはれかゝる事きかしとてぬきあし
してにげ出られぬ此らうゑいの心はむかしげうの
帝に二人のひめ宮まし〳〵きあねをばがくはう
いもをとをばじよゑいと云ともにしゆんの御門の
きさき也しゆんのみかとかくれ給ひてさうごの野
辺へをくり奉りけふりとなし奉る時二人のきさき
名残をおしみ奉りしやうほと云所までしたひつゝ
なきかなしみ給ひし時其なみだきしのたけにかゝ
ついてまだらにそめたりける其後もつねはかの所
におはしてことを引てなぐさみ給へりいまかの所」四一ウ

をみれはきしの竹はまたらにてたてりことをしら
べしあとには雲たなひいてものあはれなる心有と
きつしやうこうのふにつくれるなりこの大納言は
させるもんさいしいかうるはしうはおはせざりし
かともかゝるさか〳〵しき人にてかやうの事まで

もきゝとがめられけるにこそ此人大納言までは
思ひもよらざりしを母上賀茂の大明神にあゆみ
をはこひねがはくは我子のくにつな一日でもさふ
らへ蔵人のとうえさせ給へと百日かんたんをくだ
いていのり申されけるがある夜の夢にびりやうの
くるまを我家のくるまよせに立と云ゆめをみて是
を人にかたり給へばそれは公卿の北の方にならせ」四二オ

給ふべきにこそとあはせたりわか年すでにたけ
ぬいまさらにさやうのふるまひあるへしとも
おほえすとのたまひけるか御子のくにつな蔵人の
とうは事もよろし正二位の大納言にあかり
給ふこそめてたけれ

すのまたかつせん

同き廿二日法皇法住寺殿へ御幸成彼御所は去ぬる
おうほう三年四月十五日に作り出されていま
びゑい今熊野なともまちかふくはんしやうし奉り
せんすいたていしに至るまでおほしめすさまなり
しかとも此二三年は平家のあく行に依て御幸も
ならす御所のはゑしたるをしゆりして御幸なし」四二ウ

奉るべきよし前の右大将宗盛の卿そうせられたり
けれは法皇何のやうもあるべからすたゞとう〳〵
とて御幸なるまづこけんしゆんもんゐんの御方を
御らんすればきしの松みぎわのやなき年へに
けりとおほしくて未だかくなれるにつけても大ゑ
きのふやうびやうのやなきこれにむかふにいかん
かなんだすゝまさらんかのなんゑんせいきうのむ
かしのあといまこそおほしめししられけれ同き三月
一日南都のそうかうらほんくはんにふくして末寺
しやうゑんもとのごとく知行すべきよし仰くだ
さる同き三日大仏殿作始らる事はじめの奉行
には蔵人の左少べんゆきたかとぞ聞えしこのゆき」四三オ

たかせんねん八幡へまいりつやせられたりける夢
に御宝殿の内よりびんつらゆうたるてんどうの

出てこれは大ぼさつの御使なり大仏殿奉行の時
はこれを持べしとて金のしやくを給ふといふゆめ
をみてさめて後見給へはうつゝにありけるあな
ふしぎたうじ何事有てか大ぶつでんぶぎやうに
参るべきとてくわいちうして宿所へ帰りふかう
おさめておかれたりけるが平家のあく行に依て
南都ゑんしやうのあひだゆきたかべんの中に
えらまれて事はじめのふきやうにまいられける
しゆくゑんのほどこそめてたけれ同き三月五日
みのゝ国の目代はや馬をもつてみやこへ申けるは」四三ウ

十郎蔵人行家子息あくぜんじゑんさい兵衛の佐
頼朝の弟卿の公ぎゑん六千余騎で尾張の国までせ
め上り人を一かうとをし候はすと申たりけれは平
家の一門さわぎあへり入道相国うせ給ひてのち五
しゆんをだに過ざるにさこそみたれたる世といひ
ながら浅ましかりし事共なり平家やがてうつ手
をこそくだされけれ大将軍には左兵衛のかみ知盛

小松の左中将きよつね同き少将有盛侍大将には
ひだの大夫かげ高かづさの太郎たゞつな五郎兵衛
忠光あく七兵衛かけきよ越中のせんじもりとし
次郎兵衛盛次たかはしの判官ながつな都合其せい
三万余騎同き十日京を立てみのゝ国へはつかうし」四四オ

すのまたの西の河原にぢんを取十郎蔵人ゆきいゑ
もみのゝ国におしよせてすのまたの東の河原に
ぢんをとる源平川をへだてゝさゝへたり同き十六
日の卯のこくにすのまた川にて矢あわせとそさだ
めけるきやうのきみぎゑんは九郎義経に一ふくの
あになり十郎くらんどに力をあはせよとて兵衛の
佐殿一千余騎のせいを付られけるかすのまた河に
おしよせたりきやうのきみ明日の軍にわれこそ
せんぢんせめゆきいゑにさきをせられじと思
はれけれは十五日の夜に入て只一騎ぢんより上へ
二ちやうはかりあゆませ河をわたいて平家のぢん
ちかふひかへつゝ行家此あかつき河をわたさば」四四ウ

ぎゑんこゝよりけふの大将軍と名乗てまつさきかけんとて夜の明るをまちゐたりかゝりけるところに平家の侍越中のせんじもりとし五十騎ばかりにて夜まはりしけるがぎゑんを見付てあれはたそといふきゑんすこしもさわかすこれは味方にて候が馬ひやさせ候とこたふもりとし味方ならは甲をぬいて名乗と云きゑんさらばなのらんとてあぶみふんはりついたちあかり大音じやうをあけて是は故左馬のかみ義朝か末子卿の公きゑんと云ものそ日比のうつふんたつせんためにたゞいまよせたるなりといひもあへすかたきの中にわつて入たてさまよこさま十文字にかけやふり能武者七騎切て」四五オ

おとし八騎にむかふ時あまやの藤次と云者にくんでうたれ給ひけり十郎蔵人の子息あくぜんじゑんさいは尾張源氏いつみの次郎重光を相ぐして七百余人いかだにのりわたりより上をさつとこして平家のぢんへぞ入たりける十郎蔵人これを聞てあくぜんじうたすなゑんさいうたすなとて六千余騎川をわたいておめいてかく平家の方の大将軍左兵衛のかみ知盛あふみふんはりつつたちあがり大おんじやうをあげて源氏只今川を渡したれぬれたる武者はみなかたきそそれをしるしにうつとれ〳〵と下知せられけれは馬物のぐのぬれたるを爰におつつめかしこにかけつめてくびをとる」四五ウ

あくせんじゑんさいふか入してうたれぬとらのこくより矢合して夜の明るまであひたゝかふ源氏ぶせいなるに依てたすかる者はすくなくうたるゝものはおほかりけり十郎蔵人からきいのち生つゝ尾張の国にひきしりぞき小越といふところにぢんを取すいゑきをうしろにする事なかれとこそ云に今度源氏のはかりことおろかなりとぞ人申ける平家つゝいておはりの国にみたれ入小越にこそおしよせたれ平家はせんぢん七千余騎を五手にわかつ一ばんにひだの大夫かげたか一千余騎で

よせけるが射しらまされて引しりぞく二はんにか
づさの太郎たゞつな一千余騎おめいてかくげんじ」四六オ
矢ぶすまを作て射けれはこらへずしてざつと引
三ばんに越中のせんじ盛とし一千余騎くつばみを
ならへてよせけるかげんじ矢前をそろへて射けれ
ば是もかなはでざつとひく四はんに高はしの判官
長つな一千余騎かぶとのしころをかたふけてよせ
けるが源氏さしつめひきつめさん〳〵にいけれは
しばしたゝかふてひきしりぞく五ぢんにきよつね
有盛二千余騎でおしよせたり十郎蔵人只今かゝるは
大将どもそあますなもらすなうつとれ〳〵とてい
のちもおしますおもてもふらずこゝをさいごと戦
けるか平家は三万余騎をいれかへ〳〵せめけれは
十郎くらんど又軍にまけてひきしりぞきたう　」四六ウ
国のうちおりどゝいふところにぢんを取平家かつ
に乗てせめけれは十郎蔵人そこをも落て三河の国
やはき川のはしを引てひがしのきしにぢんを取
平家馬のいきをもやすめす三河の国にみたれいり
やはぎ川を渡しけるが大将軍左兵衛のかみ知盛
しよらうてかへり上り給ひぬきよつね有盛は尾張
のあつたにゆらへたり十郎蔵人はかりことに年
老たるざいしき三人みのかさきせらうりやうおわ
せて京のぼりのぶおとこに作り立心を入て平家の
ぢんの中をそとをしける平家のせんぢんこの
おとこをとゞめて源氏軍にまけて逃けるがせいは
いか程ありつるそ東国よりのぼるせいはなきかと」四七オ
とへば此おとこ申けるはやはぎ河のひがしのぢん
のせいはいか程あるも知ぬ候東国よりのぼるせい
はうんかのことくに候きく川はしもと見付のこう
にはたとつゝいて野も山もみな武者で候と申て
とをりけり平家これを聞てとう国の大ぜいに
とり籠られなばゆゝしき大事そとてわれさきに
とそのほりける十郎くらんど平家をはかつて大き

によろこび二千余騎でおつかけたり平家は三万余
騎といへとも落武者のならひなれは返し合て戦
ものもなしたゞ身をたすけんとばかりのふせき矢
射て西をさいてそのげのほりける十郎くらんどあ
そこ爰におつつめ〳〵あるひは射おとしあるひは」四七ウ

切おとしてくびをとる平家今度一ぢんをばやふる
といへともざんたうをやふらねばし出したる事
なきがごとし平家は去々年小松の大臣こうせられ
ぬ今年又入道相国うせ給ひぬうんめいの末に
なる事あらはなりしかば年来おんこのともがら
の外はしたがひつくものなかりけり東国は草も木
もみな源氏にそなひきける

しわがれこゑ

去程に越後の国の住人城の太郎すけなが越後の守
ににんせられてうおんのかたしけなさに木曾
ついたうの為に都合そのせい三万余騎同き六月
十五日門出して明る十六日の卯のこくにすてに打」四八オ

立んとしけるが夜はんはかりにはかに大風ふき
大雨くだりいかづちおびたゝしうなつて後天はれ
て雲井に大きなるこゑのしわがれたるをもつて
なんゑんぶだいこんどう十六ぢやうのるしやな仏
やきほろほし奉る平家のかたふどするものこゝに
ありめしとれやと三こゑさけんでそとをりける城
の太郎を始として是を聞者みな身のけよだちけり
郎等とも是ほどおそろしき天のつげの候に只りを
まげてとゞまらせ給へと申けれ共弓矢取者のそれ
によるべきやうなしとて明る十六日のうのこくに
じやうを出てわづかに十余町そ行たりける其
時黒雲一むら立来つてすけ長がうへにおほふと」四八ウ

こそみえけれにはかに身すくみ心ほれて落馬して
けりこしにかきのせられたちへ帰りうちふす事
三時はかりして終に死にけりひきやくをもつて
此よしみやこへ申たりけれは平家の人々又大きに
さはかれけり同き七月十四日かいげん有てやう和

とかうすその日筑後の守さだよしちくぜん肥後両
国を給はつてちんせいのむほんたいらけに西国へ
はつかうすその日又ひじやうの大しやおこなはれ
て去ぬる治承三年にながされ給ひし人々みなめし
かへさる松殿の入道殿下備前の国より御上らく
太政大臣めうおんゐん殿尾張の国よりのほらせ給ふ
あぜちの大納言すけ方のきやうはしなのゝ国より」四九オ

帰落とそ聞えし同き廿八日めうおんゐん殿御院参
去ちやうくはんのきらくには御前のすのこにしてか
わうおんげんじやうらくをひかて給ひしにやう和
の今の帰京にはせんとうにして秋風らくをそあそ
はしけるいづれも〳〵ふせいおりをおほしめし
よらせ給ひけん御心の程こそめてたけれあぜちの
大納言すけかたのきやうもその日院参せらる法皇
いかにや夢のやうにこそおぼゆれならはぬひなの
すまゐしてゑいきよくなとも今はあとかたあらし
とおほしめせ共いまやう一つあらばやと仰けれは

大納言ひやうしとつてしなのにあんなる木曾路河
と云いまやうをこれは見給ひたりし間しなのに」四九ウ

ありし木曾路河とうたはれけるぞときにとつ
てのかうみやうなる

よこ田川かつせん

八月七日くはんのちやうにて大仁王ゑをおこなはる
是は将門ついたうのれいとそ聞えし九月一日すみ
ともついたうのれいとてくろかねのよろひ甲を伊
勢大神宮へまいらせらるちよく使はさいしゆ神
祇のこんのたいう大なかとみのさだ高とそ聞えし
さたたかくろかねのよろひかぶとを伊勢へ持て参
るほどに近江の国かうかのむまやよりやまひつき
いせのりくうにして死にけりむほんのともがらてう
ぶくのために五だんの法承ておこなはれけるかう」五〇オ

三世のだんの大あじやり大行事のひがんしよ
にしてやしにゝしぬ神明も三宝も御なうじゆなし

と云事いちしるし又大元の法承つてしゆせられ
けるあんじやう寺のじつけんあしやりが御くはん
じゆしんじたりけるをひけんせられけれは平氏
てうぶくのよし書たりけるそおそろしきこはいか
にと仰けれはてうてきてうぶくせよとおほせくだ
あるあひだたうせいの体を見るに平家もつはら
てうてきとみえ給へりよつてこれをてうぶくす何
のとがや候べきとぞ申ける此法師きくわいなり
しざいかるさいかとありしが大小事のそうげき
に打まぎれて其後は沙汰もなかりけり源氏の代に」五〇ウ

成て鎌倉殿しんべうなりとかんじ給ひてそのけん
じやうに大僧正になされけるとそ聞えし同き十二
月廿四日中宮院がうかうむらせ給ひてけんれい
門院とぞ申けるいまだようしゆの御時ぼこうの
ゐんがうこれはじめとそうけたまはるさる程に
やう和も二年になりにけり二月廿一日大はく
ばうせいをおかす天文ようろくにいわく大はく
ばうせいをおかせば四ゐおこるといへり又将軍
ちよくめいをかうむつて国のさかひを出ともみえ
たり三月十日ぢもくおこなはれて平家の人々たい
りやくくわんかかいし給ふ四月十四日の前のごん
せう僧都けんしん日吉の社にして女院に法花　」五一オ

きやう一万ぶてんどくする事あり御けちゐん
のために法皇も御幸なるなに者の申いだしたり
けるやらん一院山門の大衆に仰て平家をついたう
せらるべしときこえしほどに軍兵内裏へ参て四方
のちんとうをけいごす平氏の一るいみな六波羅へ
はせあつまる本三位の中将しげひらの卿法皇の御
むかひにそのせい三千余騎でひよしの社へさん
かうす山門に又聞えけるは平家山せめんとて数千
騎のせいをそつしてとうざんすと聞えしかは
大衆みな東坂本におりくだつてこはいかにとせん
ぎす山上らく中のさうどうなのめならす供奉
の公卿殿上人色をうしなひほくめんの者の中には」五一ウ

あまりにあわてさわひてくはうすいをつく者も
おほかりけり本三位の中将しげひらの卿あなうの
へんにて法皇むかへ取まいらせてくはんぎよなし
奉るかくのみあらんには御物まうでなとも今は御
こゝろにまかすましきやらんとそ仰けるまことに
山門の大衆平家をついたうせんといふ事もなし
平家又山せめんと云事もこれあとかたなき事
どもなりてんまのよくあれたるにこそとぞ人申
けれ同き四月廿日りんじに廿二社にくはんべい有
是はききんゑきれいに依て也五月廿日かいげん
あつてじゆゑいとかうすその日又越後の国の住人
城の四郎すけもち越後の守ににんずあにすけなか」五二オ

せいきよのあひたふきつなりとてしきりにじし
申けれともちよくめいなれはちからをよはすすけ
もちをなかもちとかいみやうす同き九月二日城の
四郎ながもち木曾ついたうの為に越後出羽あいづ
四ぐんをもよほして四万余騎木曾ついたうのため
にしなのゝ国へはつかうす同き九日たう国よこ田
河原にぢんをとる木曾は余田のじやうに有けるが
これを聞て余田のじやうを出て三千余騎ではせむ
かふしなのゝ源氏井の上の九郎みつもとがはかり
ことにはかにあかはたを七流作り三千余騎を七
手にわかちあそこのみね爰のほらよりあかはた共
手々にさしあげてよせけれはじやうの四郎是を」五二ウ

みてあわや此国にも平家の方人する人ありけるは
力付ぬとていさみのゝしるところに次第にちかふ
なりけれはあいづをさだめてあかはたをは切すて
用意したるしらはたはつとさしあげ七手が一つに
成て一度にときをとつとぞ作りける越後のせい
ともこれをみてかたきなん千万騎かあるらんいかゝ
せんと色をうしなひあわてふためいてあるひは川
におつはめられあるひはあく所においおとされて
たすかる者はすくなふうたるゝ者そおほかりける
城の四郎がたのみ切たる越後の山の太郎あいづの

ぜうたんばうなといふきこゆるつはもの共そこにて
みなうたれぬ城の四郎我身手おいからきいのち　」五三オ

いきつゝ川をつたふて越後の国へ引しりぞく同き
十六日みやこには平家是をは事ともしたまはす
前の右大将宗盛の卿大納言にくはんちやくして
十月三日内大臣に成給ふおなじき十七日よろこび
申有たう家他家の公卿十二人こせうせらる蔵人の
とう以下の殿上人十六人ぜんぐす東国北国の源氏
ともはちのごとくにおこりあひたゞいまみやこへ
せめのほらんとするにかやうになみのたつやらむ
風のふくやらんもしらぬていにてはなやかなりし
事ともなり中々いふかひなふそみえたりける
去程にじゆゑいも二年になりにけりせちゑ以下
つねのごとしないべんをば平家の内大臣むね盛公」五三ウ

つとめまいらせらる正月六日主上てうきんの為
に法住寺殿へ行幸なる鳥羽院六歳にててうきん
のぎやうがうありそのれいとそ聞えし二月廿二日
宗盛公従一位し給ふやがて其日内大臣をはしやう
へうせらるこれはひやうらんつゝしみのゆへとぞ
聞えし南都ほくれいの大衆熊野きんほう山の僧等
伊勢大神宮のさいしゆじんくはんに至るまで一かう
平家をそむいて源氏に心をかよはしけり四方に
せんじをなしくだし諸国にゐんぜんをつかはせ
共ゐんぜんもせんじもみな平家の下知とのみ心へ
てしたかひつくものなかりけり　」五四オ

平家物語巻第六終　」五四ウ

（遊紙）　」五五オ

（遊紙）　」五五ウ

翻刻の確認作業で松永早知氏の教示を得た。御礼申し上げたい。